

川柳塔

創刊大正十三年 通卷八六〇号



白川協加盟

No. 860

同人特集・私の一句

一月号

川柳塔創刊75周年 記念川柳大会

と き 平成11年3月20日(土) 午前10時開場
ところ ホテルアウィーナ大阪(なにわ会館) 4階 金剛
大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 電06(6772)1441
(地下鉄谷町9丁目・近鉄上本町下車)

出句締切 正午(各題2句・欠席投句拝辞)

開 会 午後1時 披 講 午後2時

あいさつ 川柳塔社主幹 橋 高 薫 風

おはなし 作 家 織 田 正 吉 氏

兼 題 「 蕾 」 八 木 千 代 選
「 砂 」 久 保 正 剣 選
「 竹 」 小 島 蘭 幸 選
「 喜 」 小松原 爽 介 選
「 港 」 藤 本 静 港 子 選
「 役 」 磯 野 い さ む 選
「 高 」 (事前投句) 橋 高 薫 風 選

閉 会 午後4時予定

会 費 2000円(当日いただきます・記念品呈)

<懇親宴> 8000円(会席料理)

午後5時-7時半 アウィーナ大阪

<宿 泊> 8000円(朝食付) アウィーナ大阪

<翌日観光> 4500円(昼食付)

大坂城、周辺 先着25名まで(マイクロバス)

◎事前投句及び懇親宴・宿泊・翌日観光の申込みは
本誌最終ページの申込用紙に明記の上、2月20日
までに本社事務所宛おねがいたします。

◎懇親宴・宿泊・翌日観光の御送金(句会費をのぞく)
は同封の払込用紙でお願いします。

主 催 川 柳 塔 社
後 援 (社)全日本川柳協会

新春ご挨拶

橘高 薫風

明けましておめでとうございます。

今年はい卯（つちのと・う）ですから、小学校で習った歌「ふるさと」を先ず思い起し、穏やかな年になりそうな気が致します。その一方で一九九九年と書けば俄然世紀末の様相が感じられて、いよいよどん詰まりかとも思えます。何れにしても川柳塔は七十五周年を迎えるのですから盛運を授かりたく、三月二十日（土）には各位のご支援を切にお願い致します。私は年賀状に、少しでも遠く少しも高くとは思わないが、美しく熱く跳びたいと書きました。熱い心を持ち寄って、ホテルアウィーナ大阪での大会を盛んにして下さい。

兎は鶏と同じに一羽二羽と数えられ、昔から人間との付き合いは密なのですが、あの可愛い毛物が必ずしもイメージ通りに受け取られていないことも多いのです。

カチカチ山の兎も、因幡の白兎も意地

悪であつたりずるい性格を持ち合わせています。兎と亀の童話も油断をいませめる例に挙げられ、兎として心外に思っていることでしょう。兎の容姿や寡聞氣にそのような気配は毛ほどもないと私は思うのですが……。

「株を守りて兎を待つ」という諺が古い中国にあります。韓非子に見える話によりますと、昔、宋の国の人が畠の中の木の切り株に兎が衝突して首を折って死んだのを見て、それ以後、畠を耕すのをやめて切り株を守っていたが、二度と兎はかからず、その人は国中の笑いものになった、というのです。

この話は、日本では童謡にもなっていて、「待ちぼうけ」のあほらしくもおりとりした不条理の味を教えられ、子供心にもほのぼのとした思いさえ感得したものです。

こつも科学が進歩して宇宙時代に突入の世となり、誰もが追われるばかりの生活をしていると、兎の頓死を待つ大陸的性格をうらやむ思いもしないではありません。

路郎先生は晩年に、何処か静かな山小屋が欲しい、ゆつくりと気儘な執筆で余生を楽しみたいと仰っていました。

私もあと二年で七十五歳になります。

寅年の私は虎視眈々といいほどではありませんが、力以上に背のびをし続けて来たように、多くの上輩、同僚、後輩のお陰で川柳塔社の運営を大過なく果して来ることが出来ました。苦勞知らず世間知らずですが誠意をモットーにしました。

赤心を推して、人の腹中に置くという言葉は私の人生のテーゼです。

肺結核を患って得たのは、柳が風に逆らわぬ自然体と誠意で生きることの大切さでした。

川柳塔を次の世代に引き渡すための組織を、地方との関係を密に改めて行くことに次の二年を努めたく思っています。

新年を迎え川柳生活四十五年に入り、「烏兎匆々」の思い切なるものがあります。

作品

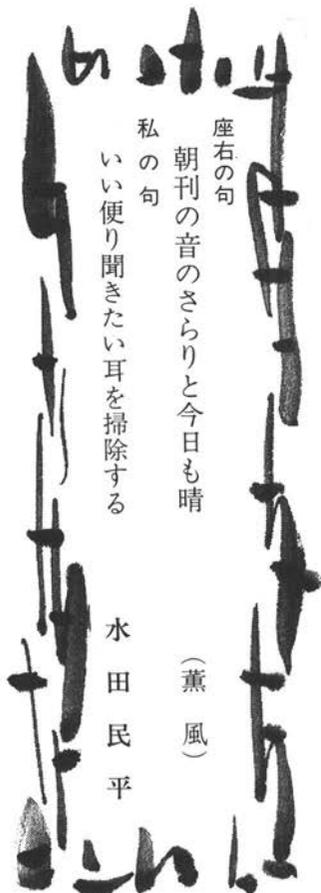
四方拜今年も旅の豊かなれ

三人は松竹梅よお正月（同期の桜）

王羲之のいろはと書くを思いおり

雪うさぎ昭和の雪はもつと白

酒供養生きてる人のためにある



座右の句

朝刊の音のさらりと今日も晴

私の句

いい便り聞きたい耳を掃除する

(薰風)

水田 民平

川柳塔 一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 新春ご挨拶	橋高薰風	:(1)
わたしの四季	河内天笑	:(2)
川柳塔(同人吟)	橋高薰風選	:(4)
佳句感想	橋高薰風	:(53)
自選集	橋高薰風	:(54)
大空のころ(96)	橋高薰風	:(57)
私の一句(同人特集)	東野大八	:(58)
川柳の群像 三浦秋無草	東野大八	:(72)
誹風柳多留二四篇研究 1	東野大八	:(74)
先輩 ↓ 後輩 (2)	東野大八	:(78)

菱田満秋・橋高薰風・桜井千秀・黒川紫香

小林由多香・森山盛桜・木村あきら

わたしの四季

河内 天笑



『道頓堀の雨に別れて以来なり』出版祝賀会の次の日から私のダイエットがはじまりました。何故この日からかと申しますと三月二十七日にちよつとした会があり、翌々日が田辺聖子さんのお祝いの会が三井アーバン。両方とも御馳走やお酒が出る会なので、ここで思い切り飲んで食べて、それからダイエットに入ろうという飲み助のいつわらざる魂胆がありました。三井アーバンでの写真は何枚かいただいたのが四月半ばで、私の顔も胴まわりもみっともなく膨れていて、とても人前に晒せるしろものやないと、改めてダイエットをさびしくやって行く事を自分に言い聞かせました。

最初の目標を七月七日の路郎忌に五キロ減に設定、栄養士の先生とも相談して一日一六〇〇〜一八〇〇キロカロリとし、サンブルの表を渡されました。お酒は一日三勺と決められました。三勺とはぐい呑み一杯ぐらいなので私には拷問のようです。だから三日に一回一合飲むことに勝手に決めました。ダイエ

水煙抄	河内天笑選	(82)
秀句鑑賞「同人吟」	岩佐ダン吉	(76)
水煙抄	吉川寿美	(107)
渺湖抄	八木千代選	(104)
茴香の花	西出楓楽選	(108)
「雪」	藤田泰子選	(110)
一路集「和らぐ」	川上大輪選	(110)
「リボン」	安平次弘道選	(111)
初歩教室「一」	吐田公一	(112)
十二月本社句会		(114)
柳界展望		(118)
各地柳壇(佳句地十選/岩切康子)		(120)
一月各地句会案内		(133)
■編集後記	みつ子・楓楽	(166)



ツットの最初の三週間ほどは、一向に目方も減ってくれず、むなししい思いの日が続きました。が、毎日歩け歩け、耕せ耕せを続けました。

このころ嬉しかった事が一つあります。それは長いこと忘れていた空腹感を毎日味わう事が出来たからです。目方が減り出したのは五月に入ってからで、毎日体重計に乗るのがたのしみになってきました。七十八キロに始まったダイエットは五月末には七十四キロに減り、腫れてみつもなかつた頼ったも少しだけ引き締まりました。そして路郎忌の前日には七十二キロ、八月二日の夜市川柳大会では六十九・五キロまで減量に成功しました。

お酒はいつの間にか毎日一合になっていたのが栄養士さんに経過報告に参りましたところ八月九月は三食しっかり食べて下さいとの事。渡りに舟とはかり大好きなトンカツで生ビール。好きなもんカロリー気にせずに食べるのはこれぞ極楽です。

酒は減量にも大敵ですが、これまで飲みすぎて何遍も同じような失敗をしています。言わなくてもええ事言うたり、言うたらあかん事言うたりして周りに迷惑かけています。「俺は酒が強い」と思うのが馬鹿なんで、飲んでつまらん事喋るのは「酒に弱い」からやということを六十四にもなってやっと気付きました。十二月十五日より第二段階のダイエットに入ります。



橘 高 薫 風 選

岸和田市 岩 佐 ダン吉

核兵器やがて民話になるだろう

頼るのは自分ぶっかけの卵

洪面が町にあふれた世紀末

気がつけば菌をくいしはる僕がいる

でこぼこの道だがひとすじを歩く

悠久のリズムか山が赤くなる

唐津市 仁 部 四 郎

体重に甲乙二論初日の出

年頭の所感妻とは軌が合わず

目くじらを立てて女が歳をとり

小用の近き妻子に隠してる

カタカナを食べて六尺並みになり

無為自然そうさそうさと眼鏡拭く

和歌山市 川 上 大 輪

追伸の追伸らしいハガキ来る

眼鏡拭いたぐらいで落ちぬ目の鱗

天井のシミはやっぱり愚痴だろう

どちらにも義理あり白い票にする

粉骨碎身美味しい出汁が取れそうだ

焼香は一回ですと念押しされ

松江市 舟 木 与 根 一

孫達の靴の空き間へ十文半

致死量を間違え運が向いてくる

ノンフィクションだ芸能人が離婚する

転作地疲れ果てたり秋が逝く

前略で無心のくんだり長いなり

すぐ切れる尻尾も頭領運のうち

和泉市 岡 井 や す お

なかなかの技を持つてる口外交

犬の鼻証拠にならぬぞと無罪

皺の数ポランテアにも不合格

立合いを正し大怪我しなくなり
雪やんで知るお日さまの暖かさ
ぴよんぴよんと跳べば新世紀の麓

弘前市 浅田隆樹

赤トンボひとりぼっちじゃないんだと
何万遍ルージユを塗った三面鏡

論語から老子に変えた五十坂

ジョギングのズツクの底がすり減らぬ

糟糠の妻の軒は堂々と

とり出した入れ歯が僕をあざ笑う

和歌山市 牛尾緑良

真珠婚また置き直す砂時計

水平線過去をきっぱり切り離す

時刻表夢と思い出ある数字

サヨナラサヨナラサヨナラ映画を見なくなるサヨナラ

さかむけで小春日和をふいにする

ゆつくりと歩く明日はきつとくる

茨木市 藤井正雄

全十二色皆それぞれにしたり顔

挨拶をされて気づいた隣の娘

林檎髻る齒型二本は人工齒

よう出来た話やなあとコップ酒

左遷地は出迎えもなく降る水雨

先輩を越えて座った固い椅子

富田林市 藤田泰子

欲しいもの何ひとつ無し百貨店

君は未だ髪黒々と夢枕

振り向くと最早紅葉は霧の中

年金貴族いつまで続く幸福か

虫籠の狭い世界の小競り合い

亀さんにいつも負けている兎

明日の為とはもう思わないことにする

骸とは惨ないものよひまわりも

物指しを変えねばきつと過労死だ

神の鈴とりあえず振るとりあえず

満月の道をハミングして帰り

生きるなら嫌いな人がないように

ウオンルーブル共産主義の末路かも 島根県 小砂白汀

急停車さてはブレイキ利きすぎか

トリプルプレーこんな日もある人生譜

束にして叱られました爺と婆

見る聴く話す考えるどちら向いてもむつかしい

この道はいつか来た径崖つぶち

唐津市 田口虹汀

忠孝の二字は我が家のお題目

鐘は妻 僕は撞木で除夜に座す

病院と寺は二人で水入らず
耳鳴りを翁は秋の虫と聞き
潮風に鯛山笠の鱸太く揺れ
殿は鯨の太鼓か浪の花

鳥取県 土橋 螢

古稀という新春どうもありがとう
青春にもどしてくれる夜明け前
魂を抜いても六十疋はある
うれしい事があるように雪を掻く
美しい罨にかかつていたらしい
合掌のうしろ姿が母に似て

竹原市 小島 蘭 幸

広辞苑の古さの中にいる父か
一所懸命歩くと燃えてくるいのち
お守りを一番よろこんでくれた
淋しいと言わなくなった冬の滝
瘦せていた頃の私を誰も知らない
歩いて歩いて年金貰うまで生きる

堺市 志田 千代

紫にみやこ好みと江戸好み
めくるめく極彩色の極楽園
地下水はくぐりもぐって澄んでくる
息吸って一服なさい兵馬備
手すさびの大正琴の古賀メロデー
すこうしは飾ってほしいおばあさん

豊中市 吉田 あずき

秋の草みななごやかに控え目に
猫じゃらしのん気に生きたわけじゃない
吾亦紅気取らなくてもいいんだよ
木枯しいちばん冬將軍の影ゆれる
一つつつ君を許して枯れてゆく
鉄橋を渡る轟音今も好き

河内長野市 加島 由一

馬鹿ですと笑えるまでもう少し
母を許し父を助けて家を継ぐ
何だっただけの気がする酒五合
神様と会いたい時に飲むお酒
履歴書に特技笑顔と書いてある
火に油注ぐ結果になる意見

出雲市 久谷 まこと

一つずつ春に近づく鐘の音
福笑い昨日の顔は忘れよう
経験も小出しに使う再雇用
耳鳴りが相手嫌いをして困る
愚痴こぼすそれも明日の予防線
機械刈り掴む藁さえ戻らない

八尾市 内海 幸生

新春や神から無垢の日記帳
童唄昔に還る術もなし
老人会の誘いを拒むかたくなに

こんな小さな一錠で血圧が下がる
百人百様でもそれほどには変らない
齡重ねまだ今年こそ今年こそ

竹原市 森井菁居

俺なりの歩幅で俺の人生譜
塞ぐ日は特に深まる海の色
愛の花ひらくと木もれ日がゆらく
スペースシャトルのメッセージが凄
い
ポンコツになって充電ばかりする
人情を土産に帰る柿の里

大阪市 井上白峰

虚と実の狭間で揺れる心の灯
待ったなし地球は回り陽が沈む
正確な時計は妥協してくれぬ
鏡拭く今日も佳い日であるように
今日の嘘明日も嘘とは限らない
背伸びして義理の重さに耐えている

大阪市 川原章久

生きたいし煩らわしいがコレ本音
丸腰で座る日蔭の佗しさよ
ひらがなの流れにそっと身をゆだね
早よ来んかい あんた待ってと老い二人
もう熟れた夫婦に風が暖かい
良く遊びよく働けよ若者よ

大阪市内 川内 呷笑
年金がチヨイと気になる年となり
ノムさんが猫に鈴をば付けに来た
誘われて払い覚悟でお供する

居酒屋で一人つぶやく濡れ落葉
保険屋も肩身の狭いご時世に
敵知らず己も知らず負け戦(太平洋戦争)

鳥取市 近藤佳子

悪友が妻をおだてて酒ビール
次の世も夫婦になんっておどすなよ
働いているがお金が逃げて行く
茄子の花ひとも約束守らねば
泣けばいい涙かれたら立ちあがる
野仏に赤の絨毯曼珠沙華

鳥取県 岩崎みさ江

無重力 缶のポイ捨て出来るかな
無重力の恐怖巣穴へ戻れない
羊水の宇宙もきつと無重力
闇に咲くとき存在を香らせる
瞬けば気付いてくれるかと思
い
星の降る里にみぞそば群れて咲く

大阪市内 本間 満津子

こころもの こんな地球に誰がした
持ち味を生かすまあるい食卓で

打算やめひとつの壁を通り抜け

隠し事なのは呑気なものですな
合理的かも言葉少なになり佗びし

二度咲きの桜に山茶花慌てだし

西宮市 牧 淵 富喜子

強く言うことばの割に温かい

ダイヤルを押せば変らぬ人がいる

渾身の一筆書きの飛行雲

仕事場は宇宙と孫も真似ている

欠点のひとつふたつが好きになる

公園の一本急に紅葉す

高知市 北 川 竹 萌

柴笛を吹いて家内と尾根に立つ

庭三坪温室三坪四季の花

妻共に励まし若く越ゆ八十路

自家菜園里へハンドル五〇K

育苗の残りは里の教え子に

買った杖まだ下ろさずに四年ぶり

大宮市 八 田 敏

君付けで社長励ます社友会

泣く子等と並び診察待つ耳鼻科

温室に似たマンションで風邪ばかり

人様に渡れば我が家もよそよそし

丹精の庭木伸びてる元わが家

関東で啖呵は切れぬ大阪弁

熊本市 永 田 俊 子

さよならが言えず追伸長くなり

心貧しく竹の絵がまだ描けぬ

はやされて帰って来ない竹とんぼ

追い風が吹くまでマグマためている

あゝ人間盗泉の水飲みたがる

熊本県 高 野 宵 草

幼馴染みあだ名がボンと出た出逢い

イベントだ名刺百枚準備する

あの方がAさんBさんセレモニー

握ってるものまで探すいそがしさ

老化度の話におちるクラス会

熊本県 岩 切 康 子

ほめ上手厳しい道を従いて行く

口癖の多忙で今日を言い逃れ

ロボットになって生きるも難しい

冗談が効き過ぎその後会ってない

エコー展端ぎれの価値に目覚めたり

唐津市 久 保 正 剣

新総理宇宙でなくても無重力

国民が胸上げしたくない政治

追い越しは絶対しない走馬灯

ドタキャンにこっぴ微塵の自尊心

はじめから非才ですがと言ったでしょう

唐津市 山門幸夫

木枯しや紅葉乱舞の御所の庭

後継ぎに梯子掛けたり外したり

渡ってはならぬ橋だがついて来い

淡い虹男と女渡る橋

武豊も空しかろうよ鞭を垂れ

唐津市 山門タミ

二人きりテレビで楽し秋祭り

アルバムに去年の紅葉親友といる

お供日をテレビで観たと遠い孫

家買った二男に表札書いてやり

ロボットが人間よりも信じられ

唐津市 山口高明

霊水を貰うボトルも売る札所

法律が守ってくれる知能犯

頓堀へ出たら馬刺しと軍鶏を食べ

逆玉も悪かないぜと次男坊

王侯の気分に乗る砂の風呂

唐津市 市丸晴翠

リハビリで一緒に泣いたスニーカー

仕送りの学費を作る父の胼胝

口上がまだ決まらない年男

秋天に法被三代勢揃い

農政は先祖の美田荒野にし

高知県 赤川菊野

モンゴルはやはり祖国か低い鼻

秋灯下旅の思いであたためる

夢を盛る皿がだんだん小さくなり

あの人が持つと本物らしく見え

飲むほどになぜか淋しき増してくる

松山市 宮尾みのり

川柳塔で生きたわたしの川柳史

いつからか妻の元気が先を行く

二人三脚妻が時どき紐を解く

威勢よい売場の魚光ってる

この際はプライドを捨て生き延びる

松山市 丹下美津子

兄弟がスタートを切る入社式

賑やかな会話が漏れる子と同居

なるほどな急所押さえて妻の釘

こちらなら三男坊という見合い

姑の手を握り深夜の街歩く

今治市 矢野佳雲

深い川誘う男の声がする

エレベーター一気に乗るとき無言

無駄だとは思うが妻の化粧品

こんなセリフ私に言わす憎い人

シングル盤あれば陽の目を見ない頃

今治市 越智一水

人が見て通るところへ花を植え
天地いっばい落日が染め人恋し
粗大ゴミにするな老いても人間だ
友だちをつくろう笑顔先に見せ
不況だと枯葉が賽銭箱に散る

今治市 野村京子

花いちもんめ親孝行な子がほしい
モミガラの温みへくいを恋うリンゴ
夕やけこやけもう古里の血もうすい
絵ロウソク灯し仏と対話する
おいしくて少し汚いラーメン屋

香川県 木村あきら

アンテナの長い兎に明日がある
栄光の叙勲立派な旅土産
一粒の種に限りのないドラマ
オメデトウさんと賀状ドツサリやつてくる
今年こそ今年こそはと歳男

香川県 工藤吟笑

少し距離置いて近所と仲がよい
伏兵が待っていそうな近い道
線香の煙で薬師目が開かぬ
真っ先に杖を洗って遍路宿
転んではならぬ絆の二人綱(若貴)

香川県 川崎ひかり

悔いのない一日なんてあるものか
道草で少し覚えた嘘の味
ふる里に老母の歩いた道がある
引き際はきれいきれいを考える
封を切る前から解る息子の手紙

香川県 山地マツエ

途中から道を変えたい人に逢う
年金を友に気楽な一人旅
山彦が帰って来ない敗戦記
待つ人に似た靴音が通り過ぐ
紙袋さげても女見栄を張る

香川県 池内かおり

金婚へ二人三脚まだつづく
どの道を行っても君となら嬉し
白樺に佇みおれば風立ちぬ
おっぱはこの長の叙勲におめでと
何よりの手土産 レタス ホウレン草

香川県 神保坊太郎

リモコンが利かなくなった妻の距離
古稀祝う人も祝える貌であり
西へ西へゆけばあるだろユートピア
リストラに尾羽うち枯らす年の暮れ
こしひかり国籍のないトロが乗り

下関市 石川 侃流洞

舫い舟ゆらりゆらりと春になる

一大事ヒトの部品ができるとか

保育園描く太陽がよく笑う

老い耄れにネクタイが要る目出たい日

魚市場支えるめし屋テンコ盛り

柳井市 弘津 柳慶

雛祭り男小さく座らされ

旧道へ昔ながらの格子街

新人類次々新語を造り出し

小言にも母の情けがこもってる

跳びはねて私の干支も七回目

宇部市 平田 実男

隣との空気がよどむ塀の丈

脱税が下手で倒産してしまい

義母の死へ師走の風が冷た過ぎ

Uターン冷たい風と温い風

矢印の半分以上妻が書き

美祿市 安平次 弘道

自画自賛新種のバラがやつと咲き

野にくだり人間らしい目に戻り

文化人を自称ベレーもさまになり

ご厚意に甘えておれぬ自尊心

化かし合いとても人間には勝てぬ

広島市 森田 文

向き合えば秋の一夜も短すぎ

この季節郷愁覚ゆ煮めの香

厳島雅楽がとてよく似合う

どん底から上がった国がまた迷う

バイアグラの話をしてる患者室

竹原市 三宅 不朽

そのほかは言えんよ父を頼みます

健忘症三度の飯は正しかり

弟子からの掌の豆までが消えかかる

無頼派か太郎か祖父か木守り柿

人柱みまもる神かグムの虹

竹原市 時 広 一路

幾つもの節を重ねて伸びる竹

走るのを嫌がり出した僕の足

紙コップ逢って別れてそれつきり

何時までが晩成白髪増えてゆく

影長くなる境内に一人居る

竹原市 岩 本 笑子

滝つばの橋はふるえてないけれど

手を振って橋から帰る影法師

ヒロシマの橋にかかった虹である

秋ですなあと本を買うてくる

木守り柿ダイオキシンはいりません

竹原市 石原淑子
カラスまで夕焼けこやけ紅く染め

茜雲ためいき秋のみだれし日
物忘れひどくて虚空蔵菩薩様
二万とな素通りらしい商品券
あれそれでわかり合っている三十年

竹原市 古谷節夫

一徹のあるじを慕う飲み仲間
喝采をあびたピエロがもう居ない
決算書貸方ばかり増える国
ライバルと節目ふしめに握手する
亡母の味妻も伝える手巻きすし

呉市 横田英詩

仏さま拝むなんにも恐くない
太陽に花の大合唱が続くよ
夕食の準備雑誌が伏せてある
若い頃大志抱いたことがある
九十九%妻が喋っている電話

廿日市市 林野甦光

帳尻を合わすと朝の陽が昇り
折々の夢はわたしのメッセージ
皮肉にも杖を貰った日に転び
知らぬ顔ばかりの都心に居て楽し
掛けてると目が眼鏡に合ってくる

広島県 藤解静風

イカを剥くひとの不幸はすぐ忘れ
二律背反意地通したし好かれたし
何が起きても可笑しくはない世相
脂気抜けてルームメートになりました
秋の月似非詩人の物思い

岡山市 井上柳五郎

猫とカラス呉越同舟ゴミ漁り
よく吠える前も後ろもうちの犬
山海の珍珠老いには食べきれぬ
石臼の安住きめた庭の径
ハルピンは長子夭折した街よ

岡山市 川端柳子

母性哀しどの夢みても子らの影
さしあたり年改まる身支度を
季節感狂う人生観狂う
方向音痴やっぱり明るい方へ向く
車椅子スイスイ鼻唄すれちがい

倉敷市 田辺灸六

北国の情けに濡れてきた命
人の世の情け今更噛みしめる
再会にお互い齢は争えぬ
住みついた命札幌にて炎やす
老友の情けは人の為ならず

倉敷市 小野克枝

安らかな光の中に立つ余生
脇役にまわり見えないものが見え
温そうに夫婦小雨の駅に降り
話好きな仏とむかし話する
有難う定年の駅始発駅

岡山県 小林妻子

父のメモ川柳だけか書いてない
共存共栄そんな旗印に迷う
正月が毎年早く来るような
老父出番少し話がむつかしい
兎とび位ですまぬ世紀末

岡山県 二宗吟平

声を練る声若々しカサチセユ
他人の子も世継ぎ可愛い頭撫で
亡娘の墓で待ってましたと花が枯れ
鯖寿司を食べると太鼓の音がする
山車の喧嘩テレビの子守歌

岡山県 矢内寿恵子

初光も一度輝く夢あそび
語り部を寄せて温めて初春ごたつ
かかる世をかける風吹く世紀末
振り返る事のみ増えて時雨する
掃きだめの枯葉やがてはこのように

岡山県 山本玉恵

昔ばなしがまた息を吹く柿の種
最はての風は太鼓を打ちならす
絵にならぬ足あとそつとふり返る
舞い終えた夢のかけらをふところに
義理一つ果した足袋を白く干す

岡山県 大石あすなろ

流れ雲アバンチュールの旅をする
エネルギー色で言うなら真っ赤かも
古帽子弾んだ日々が秘めてある
哀の彩少しにじんだ抽象画
嵯峨菊がきれいに咲いた花の寺

岡山県 富坂志重

青虫の昔を語る花の精
やつしたけやつした秋の山見事
姿見に一つの悔いがかくせない
欠点も結ばれてから許し合う
本当は誰が悪いかうらがえす

岡山県 荻野鮫虎狼

谷川の水大海の夢を見る
卒塔婆になっても酒の匂いがし
倒産に自由契約とは淋し
仮の顔水に映せば波が立ち
初春へ去年の灰を捨てて待つ

岡山県 福原悦子

うす味の中にちよっぴり母の味
真面目さが手後れながら得たポスト
母の留守父の大きな握り飯
どの攻めもゆるがぬ女世帯です
折角の特売だったが無駄を買う

岡山県 江口有一朗

天道様が相手農夫は逆らわず
機械化も老いには酷し農作業
稲株に青芽吹き出す温暖化
モラルハザードまた芳しくない新語
親切にされてお名前聞かぬ悔い

松江市 川本 畔

一緒だと頼ってしまふ影がいる
隠れ家の径も傾く秋になる
わたしの中に咲きたい色の花がある
折返し地点で上げる大花火
医者通い酒もついでに買っている

松江市 佐野 みえ

渡月橋渡ってまどろむ京の宿(京都旅行 三句)
京土産清水焼のペンダント
京都御所タイムスリップしばし佇つ
ほととぎす草咲いて嬉しい庭の隅
菊花展身の上話聞いている

出雲市 園山多賀子

石路の黄に元来わたしの妥協癖
コーヒーが飲みたいと言う句読点
潮退いた浜に疑問符残される
満ち潮に人を信じて人許す
胸襟を開いて点す融和の灯

出雲市 吉岡 きみえ

日本中がおめでとうさんお元旦
初春へうっすら紅を忘れない
臆(はなむけ)の言葉 樽酒派手に割る
お節介のおばさんがくる回り道
むち打って明日も頑張る晴れるから

出雲市 竹治 ちかし

親に沙汰せずに子の沙汰待っている
子の居ない家で仕種が老いてくる
苦勞など見せず脱毛症となり
健康を競って妻と良い寝息
好き嫌いな人も野菜も多種多様

出雲市 小玉 満江

命日は仏と語る菊の花
話しぶり父に似て来て子は五十
宝塚夢に浸った三時間
人情が厚い社長のいずも弁
涙見て思わず涙出てしまう

出雲市 板垣草丘
売り出しに子分になつてついでゆく
原因は木枯らしだろ消防車
艶やかな上がり櫃で親子孫
町一巡忘れた傘に会いました
供え物毎日食べて兄想う(兄弟故死)

出雲市 岸 桂子
化け方の下手なお方といて平和
妥協したはずの心に波が打つ
判一つ押して重たい紙になる
私の峠ここから下り坂

出雲市 板垣夢酔
少し渴いた喉に沈める缶ビール
妻は百舌 僕は蛙で機嫌とり
破れ傘こつちに寄れと言う勧め
ゴキブリも喧嘩動けず傍観し
影と影ラストダンスの灯は燃える
鍋囲む話の蔓に花が咲き

出雲市 富田蘭水
だい神楽お皿まわして秋をのむ
足もとが冷える太陽待ちつづけ
発掘のブームは止める眠らせろ
神在りの神に問うてるこの荒れを
我慢など今は炬燵を早く出そう

出雲市 石倉芙佐子
唐子人形舞うてる帯で春の膳
椿一輪飾れば楽しい木の葉髪
噂ひとつ貰うているやら火照る耳
神様が多くて私目が眩む
白兔神話の中で跳ねている

島根県 堀江正朗
熟睡中だけは失明苦にならぬ
戦盲の生きる戦いかも川柳
老いの道いらぬ手出しはせぬことだ
頬よせてきれいな花だなど褒める
いちようの葉少年の日が浮かんでき

島根県 堀江芳子
叱られている良さ生きている証
他愛ない寝顔ほのかに匂う酒
拗ねている背中につこり返事した
曇る日も照る日も原因は川柳で
気をつかい過ぎた日ほっとする寝顔

島根県 松本文子
空気の抜けた自転車だけよく走る
部屋中飾って淋しがりやが治らない
写真よりきれいになってから帰る
汚点庇っているのか寒い顔になる
紙に書いてつくづく下手な字と思ふ

島根県 榎原秀子

堀川巡り松江の裏を知る情緒
編針へ若い姿の亡母のこと
厨川白村読み耽ったのは昔むかし
晩秋の風に想いがゆれ動く
柿たわわ寒村にありもの哀し

島根県 伊藤寿美

果されぬ約束だった風の駅
揺り椅子と亡母の匂いが残る部屋
通り過ぎる季節を探すビルの街
虚飾みな落として秋の汽車を降り
青春多感明日のジョーを見た仲間

島根県 森茂美

外れ籤だったと思う共稼ぎ
遠回りした人生に日が暮れる
自販機の音に劇薬ふと思ひ
失職の駆けこみ寺も人余り
過疎の空遊覧へりや文化の日

鳥取市 石上悦子

花束を貰いたいから贈ります
リニユーアル少し不都合あるところ
温暖化アリさん少し過労さみ
捜し物ふたつ見つけた大掃除
大根のラインダンスが軒飾る

鳥取市 杉本孝男

白熱の勝負応援席も乱
善悪を論す高僧過去を持ち
一票差激しい選挙物語る
音たててダウン人情どこへ行く
あいさつも難なくこなす多能振り

鳥取市 岸本孝子

定年を待つふるさとの温い土
農政がどうあれ子には田を残す
強そうな紐だ結んで走ろうか
酸欠で地球白旗振るだろう
スタートで瞬発力がでてこない

鳥取市 岸本宏章

吉報が大きな音をたてて来る
物置が健康器具の遊び場だ
二カ月に一度眺める預金帳
飲んでから昔のことを言うでない
朝の顔鏡しっかり拭いて見る

鳥取市 武田帆雀

ライバルを撫で斬る舞台菊花展
覗かれて批判に耐えて菊還る
菊還る一番うまい寛水
菊還る市長夫人に見初められ
男狂わす妖精の匂い菊

鳥取市 植田 一京

親子でも以心伝心とはゆかず
浅いところで溺れぬように生きている

走り過ぎ孤独な道へ出てしまふ

とっておきの秋へふたりの歩が揃う

UFOが降りて来そうな枯野だな

鳥取市 倉益 一瑶

算盤に合わぬ働きして愉し

夕暮にすこし酸素が足りませぬ

お師匠が遊びのイロハまで教え

心の色を念入りに塗るコンパクト

ネクタイの垢を落とした土いじり

鳥取市 西村 黙光

散るまでに土に爪跡残したい

夕月は粋なものだよ酌をする

松食虫己のハートを食い荒らす

風のまま雲に教わる護身術

縄ノレン疎遠の親友が気にかかる

鳥取市 上田 宣子

生き残る線が呆れるほど長い

伏兵がチラリチラリと顔をだす

やっかいな芯を除いて焼くリング

義憤いつしか美しく果てんとす

ピポパポと君に繋がれ流れ星

鳥取市 福田 登美

朽ちかけた杭も流れに凍と立つ

いたずらな風に埋み火また燃える

色褪せた恋の泉に枯葉散る

のんびりと揺られ鈍行日本海

錦繡の大山眺めにぎり飯

鳥取市 岩原 喬水

新聞で拭いた時代が懐かしい

さすがママ俺の財布を知っている

敗戦のお粥に米が浮いていた

詐欺の手を毎日テレビ教えられ

列伝記偉い血筋が俺にある

鳥取市 春木 圭一郎

不景気が脱兎のごとく逃げて初春

月うさぎきれいな地球見てはねる

うさぎ年虎が野村でよみがえる

小遣いかせぎにうさぎを飼ったことがある

平和だなうさぎが野草食べている

鳥取市 坂田 和歌子

十五夜の網に掛かった人魚たち

父さんは月へ単身赴任です

面の皮うろこの数をしのぐなり

恐ろしい石が私の味方する

二人だけ暮らそう露の傘の下

鳥取市 美田 旋風

向き変える風へ泣いたり笑ったり

少子化で無縁仏が増えそうだ

息を止め太古に触れる尾瀬の花(尾瀬旅行)

名月を拝む老母の背が丸い

子らのためほどほどに長生きをする

米子市 田中 亜弥

花も人も南斜面で咲いている

南の国にわたしの好きな仏さま

冬眠の前にきれいな写真とる

大阪へ出ると人間よく笑う

歳もって歳の維持費をもてあます

米子市 白根 ふみ

山深いひとから届く今年米

新米を磨いですべてが白くなる

仏壇の奥まで照らす新米が

月天心まじしいところ見抜かれる

桜が咲くと亡母があとからついてくる

米子市 鷺見 正子

コタツ出すそろそろ服す冬の刑

割烹着の出番喪の時婚の時

授乳する娘がとても美しい

タンポポの綿毛に乗って来たウフフ

ブランコをゆすって風を笑わせる

米子市 石垣 花子

花咲かすために摘まれる芯もある

名物に時々うまい物が有る

うしろ手に守ってくれた人も逝き

生きてゆく掟虫にも虫なりに

原点を見据えて歩く女達

米子市 澤田 千春

寝返りをうてば枕に母が立つ

息とめて眉ひく時は女です

親ゆずり百面相は出来ぬ顔

原点に立てば歯車回りだす

立ち上がろう背骨の錆をとってから

米子市 林 瑞枝

おお神よわたし医大の灯に感謝

死の淵を這い出て息子胸に抱き

子や孫と暮らすいい夢見ましたか

姉の言葉いつか漫画にして見せる

九十パーセント治ると金毘羅さんが言う

米子市 政岡 日枝子

鬼が産んだは三千九百の赤ん坊

枯れ井戸になるまで乳を呑み漁る

小さな耳で風を聞いている水を聞いている

いずれこの児も背のびをしたりしゃがんだり

一男一女もうゆるぎない住所録

米子市 光井玲子

うれしさをからだ一杯娘の帰省
進む世に必死にしがみついている
人嫌い壁がなかなか崩せない
古里の友に期待をかけすぎた
軽口をたたいて欲しく酒を注ぐ

米子市 木村富美子

朝夕の灯明あなたとの時間
お父さん盛り場の灯にゆれないで
手の平の生命線をあてにせぬ
ピアノ弾く手には見えないから弾かぬ
一瞬のすきをねらって来る風

米子市 中井ゆき

友達の絆 山越え海越えて
スコールのはげしさ旅のウツが消え
これからは辛さばかりよ秋の蝶
風の盆胡弓で亡兄が呼んでいる
散骨はやめようやはり待っている

米子市 茂理高代

あの頃は貧しかったがみな元氣
竹とんぼ兄に負けては泣いてたね
妹を可愛がってた肩を組み
幸せの四ツ葉探すのうまかった
押花をさがした道を歩いている

米子市 青戸田鶴

壁とれば同じ悩みをもつ友だ
いつも友にやさしさもらうティータム
土くれた手で大根をくれる友
亡父に似た後ろ姿を追うている
賞味期限過ぎた位で捨てられぬ

米子市 野坂なみ

紙幣の顔 明治の人の他にない
塩ふって流れを吉にかえてゆく
天体望遠鏡で逢う君の星
「もういいよ」聞こえるまでの土起し
生真面目なわたし旅では軽く跳ぶ

米子市 永井三津子

色つばい金の無心に墓穴掘り
怖いのは男心の裏表
気が細い父の舵取る母の影
母が病み子等は無口な貝と化す
ごめんねが勝気な喉を出たがらぬ

倉吉市 淡路ゆり子

合掌の隙間を漏れた運不運
飛ぶことは生きてることよ赤とんぼ
優しさが伝わるように障子張る
気がかりは隣の柿が食べ頃
難聴へ松が揺れてる風の音

倉吉市 野口節子

何も彼も血に責任をなすりつけ
引分けでやっと治めた腹の虫
躪いた過去が薬になっている
人間のエゴで起こした山崩れ
立止まっても老いて行くから恐ろしい

倉吉市 山本玲子

日捲りとせかせか歩く十二月
からいのは隣がくれるわさび漬け
みんなまで言わぬが匂う下心
なんだ坂こんな坂だが手間をとる
境界線ちよつと動かす出来心

倉吉市 松本よしえ

好きだから一つ言えない事がある
爺さまのペンフレンドは女の子
うかうかと同じ所で蹴つまづく
掌中の玉にも羽が生えて来た
ばあちゃんほうるさいけれどお金持ち

倉吉市 山中康子

旬を食べ彩にあやかる秋が好き
文鳥が送り迎えの合図する
真つ先で見えぬタクトを振っている
端にいて顔色見てるよごれ役
沈黙をやぶった嫁の知恵袋

鳥取県 新家完司

秋の浜異国の果てに来たような
にんげんが苦手でいつも隅の席
秋のほとけは秋の野草で飾るべし
いいことはないかと通う駅の裏
戒名は自作 未完川柳居士とする

鳥取県 谷口次男

吊るし柿残った皮は芸術品
その昔日本国があったとき
パソコンが三日見ぬ間に古くなる
お仕事は眉間に皺を寄せる役
怪体な役をもらった学芸会

鳥取県 塔寛子

五十年教え子ら還暦という宴(教え子のクラス会に招かれて二句)
先生と呼ばれ往時に酔いしれる
カナ文字が先越して行く待ってくれ
老人力グングングングンよく伸びる
不況台風直撃不法滞在中

鳥取県 原みさを

青い目になっちゃいそうな朝ごはん
縁先の話やがては奥の間へ
対極の父の座標が動かない
札束が反対論を押え込む
子育ての眺めるといふ距離がある

天涯孤独 気楽と言えば嘘になる
鳥取県 石谷 美恵子

過去はみなロックしてます翔んでます
冷やかしのつもりが提げる陶器市
向く向かぬそれは私が決めること
上昇の気運男は逃さない

鳥取県 林 露 杖

蓑虫がゆらゆら揺れて文化の日
熱燭で大山紅葉見霽かす
減反のコスモス雨に裏返り
掛声の割には力入つとらん
長生きを祈ったこともあったのに

鳥取県 吉 田 孔 美 子

ワンルーム視えない壁も有るんです
土に座し平常心を取り戻す
みどり児よママとお花見しませんか
わんぱくに蔵より怖い冷凍庫
新築に心痛めているピアノ

鳥取県 上 田 俊 路

良い話まだありそうで帰れない
底辺の祈りを天は見捨てない
土匂う方角へ向く老いの足
民衆のつぶやきやがて風になる
柱時計余生をきざむ音がする

鳥取県 土 橋 睦 子

躰いた事は内緒に跳んでいる
面影が浮かんで消える虹の橋
蓮如忌の生きた証に逢えた旅
秋風に舌で覚えたおでん煮る
よく遊びよく働いた手を洗う

鳥取県 田 村 き み 子

少しピアノ弾いて見ようか雪バラリ
笑っても泣いてもひとり見るテレビ
目を閉じて見ようか昨日見るために
寒菊も耐えてる夢は咲くために
小さい秋ハウス小菊にミニトマト

鳥取県 土 橋 はるお

しんみりと初冬の色になる水面
すこしずつ女嫌いになるんだな
白蟻が大黒柱上下する
さわやかに梅干しそえて食べている
うまい事言っても宗旨変えられぬ

鳥取県 西 川 和 子

あちらには帰りの道が無いらしい
天国でまだ心配をしてるだろう
検診の異常無いからまだ飛べる
旅は吉天氣がいいから出発だ
町おこし先祖の蔵が甦る

鳥取県 西原 艶子

雪が来るまでに母真似外仕事
ご無沙汰をしているうちに恋も冷め
つんつんとして気をもませ気を向かせ
飲みなさい命を捨てる覚悟なら
空白の日はなし妻のスケジュール

鳥取県 橋本 多哥由

正直に書いた日記を妻が読む
苦勞してさがしにさがし嫁貰う
悪女にはなれずに悪を貰いうけ
日々好日感謝の心続いてる
肩書きを捨て平凡な道生きる

鳥取県 山本 正光

賀状うけ日は中天に屠蘇祝う
除夜の鐘鳴って琴の音きくテレビ
御先祖の温もりもらう屋根の下
掌を合わす解脱の域は遠くとも
ヒソ騒ぎとつても怖い夏でした

鳥取県 さえき やえ

すんなりといかぬ話に柿が出る
血圧は正常値です仏さま
冬至のかぼちゃ向こう三げん両どなり
大山に雪やっ和人間らしくなる
四捨五入して考えをまるくする

鳥取県 乾 隆風

離農して路頭に迷う冬の蟻
風が吹くたんびに木ねじを締める
生い立ちを言うと因幡の白うさぎ
出来過ぎた祝辞が途中から迷い
子宝を抱いた三三九度も良し

鳥取県 羽津川 公乃

宝船幸先のよい帆を上げる
三世代まるく治めて嫁姑
しみじみと見れば手相も悪くない
深呼吸して万歩計引き返す
26種の靴中一は伸び盛り

鳥取県 黒田 くに子

姑が笑う嫁も笑って輪がなごむ
きつと来る春を信じている枯野
捨てた恋未練が残る秋の章
健やかに生きよと生んでくれたのに
さよならの視野へコスモス揺れている

鳥取県 国森 武子

淋しさを楽しむ心地する日あり
計算をすれば農業馬鹿らしい
灯とあつい料理が主待つ
私にはわからぬ流れ多くあり
骨拾い母の一代考える

傘になつてくれる息子へ感謝する
鳥取県 近藤 春 恵

句箋箱へそつと祈つて投句する
愛情が母の笑顔に満ちあふれ
方々に良い種を蒔き夢を盛る
談合にうなずき合つて席につく

鳥取県 乾 喜与志

買わされた杖は傘立てから眠る
お浄土の妻の余生も托されて
生きるのに平均寿命気にしない
吟詠の声大きくて叱られる
お隣の方とデイサービスで会う

鳥取県 鈴木 公 弘

似た者を誘つて日向ぼっこする
リストラの気圧配置は真冬なり
雪よ降れ転んだ道の消えるまで
ふりむいて縮んだ影と対話する
言い訳の途中に咳が出てしまふ

鳥取県 石 尾 かつ乃

庭に石おいて勝手にこれが顔
悔しいが熱い涙が出て来ない
野良仕事手さぐりだった辛かった
片手間にするから何もかも半端
日だまりにもう先着の猫が居る

さまざまな趣味にストレスたまらない
鳥取県 津 村 八重子

日記練りあの日あの時思い出す
何事も鞘におさめりや鳴りが
献立に四季折おりの脈が打つ
冠雪の大山あおぐ此の歓喜

鳥取県 太 田 幸 枝

体力は落ちて口は反比例
広く浅く知識磨いて世を渡る
飾物つけぬ私の健康美

いばら道歩いた体芯がある
目の動きで心底までも見透かされ

神戸市 中 村 ゆきを

陽が昇り陽が落ち海に手を合わせ
夕焼けて雲み仏の顔になり
松茸のお越してんでに料理法
宇宙より短歌が届く空の青
千古の夢醒めて銅鐸こんにちは

神戸市 山 口 美 穂

反論が咽につまって壁睨む
春の約束 球根を地に眠らせる
実をつけて千両万両新春を待つ
苦勞まだ足りないという皮下脂肪
またメモを探す己を嘲笑う

神戸市 木村 貴代子

失敗も生きてる証空を見る

柿なます着物の母は若かった

柿八年吾子は何年かかるやら

お隣になつて困る犬がいる

豊かさが心の貧をさらけ出す

神戸市 池田 善守

初詣で我がことよりもタイガース

喧嘩をしさらに女房研究中

エスカレーター百人百様流れゆく

マスコミは書かれる方の都合無視

高い高いしてやつた孫今見上げ

芦屋市 黒田 能子

雪晴れへ昨日のことは忘れず

なにはなくとも御飯たつぷり炊いてある

無雑作にポケット財布がわりなり

手短に話すから面白い

秋の蚊を見すごしているところなり

伊丹市 山崎 君子

兎年ひと跳ね欲しいひとり言

娘うさぎが翔んでしあわせ分かちあう

初釜にそつと撫でます座りだこ

芦屋街犬も品よくついでゆく

園児の目二十一世紀見つめる目

尼崎市 春城 年代

放浪せんとやされど文明離れ得ず

晩秋の蝶いっぴきの雅にて

愛しいと抱きたき娘はや五十

噂にも感応鈍くなる初冬

まつ白のエプロン菊のまがきかな

尼崎市 春城 武庫坊

喜寿過ぎたからどう遊ぶかを考える

霧の街一人歩きは野暮に見え

午後三時ピアノ競演住宅街

青空に悲喜こもごもの相がある

昔軍閥 今政治屋にいじめられ

尼崎市 長浜 澄子

目標を絞りゆつくり靴を履く

眼うらのこどもにかえる秋の風景

ケーキセット囲みおんなの自由席

黄昏れて風の助言を聞くひとり

此の先は主婦の顔です改札機

西宮市 林 はつ絵

補聴器で屠蘇のお膳の仲間入り

入れ歯にも早口言葉強いられる

仏像のもつたいないが好き嫌い

いつの間に正義不在に誰がした

老体のますます冴える司令室

西宮市 西口 いわゑ

上品に飲んでおります初対面
あやとりの孫と心を通わせる
乱れてもコスモス気品失わず
地球の隅で小さなドラマ繰り返し
五百羅漢何か忘れた顔もあり

西宮市 奥田 みつ子

当然のように新年を迎える
子の巢立ち胸の谷間を風が抜け
行き交う人みな懐かしい秋の暮れ
太古にはおおらかだった女たち
祈り深し記念切手もルミナリエ

西宮市 門谷 たず子

言い足りぬ言葉を溜めて冬に入る
いいように取ろうとろうと瞳を洗う
運不運一会の風のめぐり会い
いくさ話がえんえん続く父の酔い
古郷へ傾く夕陽冬近し

西宮市 秋元 てる

格式を今に隠岐家の三玄関(旅で)
変るはずのない階段を数えつつ
廃村に墓残してと汽車走る
まぎれなく生れ故郷だこの匂い
次世紀へ生きて見てやる後一年

西宮市 亀岡 哲子

旅一夜今台風の通過中
減反のコスモス畠遙かなり
ごめんごめんといつも明るい友が来る
ブランドの傘長すぎる重すぎる
こんなところが似るかと孫の足の指

西宮市 菊池 トミエ

良い品だ産地直送リング着く
村はずれ風ひそひそと道祖神
数え年都合で答える満年令
自分しか解らぬ手帳そつと出し
玄関に靴が跳ねてる子供会

西宮市 山本 義子

六甲山紅葉の神おりぬまま
髪染めただけでこころも彩がさし
とっておきの面つけ花野ひとり旅
自動扉虫が一匹待っている
なつかしい過去もあります五色豆

西宮市 井上 信子

マジックの打ち出の小槌振る政府
防衛庁あの手この手のみなよこれ
泣きどころ男は黒を白と言う
似顔絵が気に入る遺影に取っておく
野菜高安くなるまで野草摘む

西宮市 井上松煙

脳細胞減るも楽しみ減りもせず
病院に待つ辛抱を羨けられ
お互いに似てないつもり姉妹
風邪引いて医者に行く子と行かぬ子と
穏やかな顔がまわりを和ませる

西宮市 緒方美津子

孫と指す手加減ばかりの詰め将棋
父となら財布は持たず時価食べる
コソ消えたおでんに慣れて父静か
華の席花嫁の父飲むばかり
どしゃぶりに父かかえ来る大西瓜

西宮市 刈田泰司

減らす気で居るのに減らぬかもめーる
絵はがきに託して虫のいい話
一日に二度の所在を問う眼鏡
怒っているらしい逆立ちしたはがき
たわむれのハガキ一枚から絆

宝塚市 嵯峨根保子

切り出した妻の敬語が恐ろしい
割増しを出しても旅の一人部屋
お茶碗を割って謝まる人も欲し
五千歩のところに旨いコーヒ館
髪きって半分ほどの憂さが晴れ

宝塚市 黒台伊佐武

もみくちやにされて長銀くったくた
愛憎も幾星霜に憎は失せ
やんちゃくれ悪の中にも善が在り
湿原を鹿の離れて鶴立ちぬ
古稀に在り未だ青春を模索中

宝塚市 吉田笑女

アフリカで一人で暮す子を想い
初孫の結婚式も無事に済み
それぞれに婚期も近い孫四人
久しぶり姉と話した夢の中
ママに似ていけずな娘にならないで

川西市 氏林洋敏

裏切りを許すと友が去っていく
不景気でも体重計は上を向く
真っ当に生きて眠れぬ夜がある
同窓会話題の主は死んでいる
万華鏡心変りを許さない

川西市 松本ただし

安来節面を外せば髭の顔
二十世紀欲ばりすぎた人の知恵
アーケード駅前銀座のたこ焼屋
常識が一本背負いで転がされ
果て太鼓聞いてまむしの旨い店

加古川市 吐田公一

豆台風にかき回された老いの家
どの国にも免疫がない核汚染
鬼の機嫌とる手土産を下げてゆく
元朝の誓いができる幸があり
海外の土産が自慢そうな顔

相生市 中塚礎石

包丁も米とぐりズム母に似る
嘘ばかりカルテの裏に書いてある
手のひらの携帯電話いい返事
酔った振り内証話がよく聞こえ
指切りがすんなりからむ愛たしか

姫路市 古川奮水

紅葉が遅れて柿が早く熟れ
地球儀の春から秋へ電話くる
改築が進み花鉢変えて見る
万歳の叙勲が並ぶ金屏風
仁王さん威張った顔に鳩が住む

兵庫県 大谷幸次郎

まっぴらと来世の縁を断られ
清濁を併せて吞んで破滅する
さわやかに散髪済ませ旅に出る
終章へしみじみ思う罪の数
親の夢すつきり拭いて子が巣立つ

大阪市 神夏磯典子

自分への約束があり初詣で
蟻さんの列にはとても入れない
籠の鳥ささやきあつて年をとる
留守番の犬と御馳走分ち合う
せめてお鏡でっかく作り老夫婦

大阪市 西出楓楽

遺品整理する気まだ出ぬ一周忌
納骨へどつと安堵と淋しさと
墓石建立ここを地球の芯にする
義父母 父 夫送った黒真珠
自分の背見たらがっくりするだろう

大阪市 河井庸佑

一筆に温みを乗せる年賀状
仕事始め景気浮上を願いつつ
弁解をすればするほど立つ苦境
行き過ぎた積極性が仇となる
言葉じり強すぎ誤解招く羽目

大阪市 津守柳伸

気はこころ笑顔を結ぶお年玉
正月の拳式へ消える旅プラン
王様の昼寝 言い訳などしない
浮き草の意地浮き草の子を宿す
目立ちたいから茶髪にはしない

入園児先生の手で並ばされ

留守電に誕生知らず弾む声

乱高下株も忙しいお正月

理想など諦めました余命表

亡夫の面影綴るページに心ゆれ

大阪市 鈴木 トヨ子

当り年目の下尺のにらみ鯛

長旅は老いに相談かけてから

踊り初め傘寿の女の青海波

福引は楽しむものよかすの札

停戦中風邪には勝てぬ嫁姑

大阪市 大塚 節子

イエスともノーとも言わず折れる父

万歳をして喜ぶと脇があき

黒似合うおんな視線の背をのばす

泣いた子と根くらべする若い母

赤飯も鯛も出ないが誕生日

大阪市 川端 一步

先楽後憂 財布代りに持つカード

お色気を憚るけれど伎芸天

境遇が似て盛りあがる屋台酒

遠縁も顔が似ている通夜の酒

お隣と仲が良いのは猫同士

大阪市 小林 周信

低迷をびよんと跳ねてよ年うさぎ

萎びる日來ると思えぬ菊の花

ポケットの碟いつから角がとれ

青空へ吸われてゆくに口開けて

御試飲のワイン含めば呼び水に

大阪市 渡部 さと美

好きな花好きなかだけ買っても独り

十二月おんなひとりも風に立つ

天神さんの知恵を授かり古書まつり

子の白髪見つけ支払うフルコース

限りなき視野にコスモスただ寡黙(水上の里)

大阪市 清水 絹子

華のある生きざま恋し古日記

酒ほろほろ風に抱かれて桃源郷

酔うほどに、このていたらく止まらない

不良中年おもしろ可笑し夢つなぐ

からっぽな心にしたいたい眠れぬ夜

大阪市 田中 節子

夫の記に完の字入れてあげました

お正月祝の酒は用意せず

母さんより幸せでしたと夫に礼

喜怒哀楽お餅を四つ食べました

逆風が平手で頬を打って行く

大阪市 川久保 睦子

力とは政党に金頭数

大阪市 北 勝美

リストラに社長は明日の顔になり

笑われて勲章もらっている平和

世の果てか物もお人も使い捨て

時雨きて茸にうらみの芭蕉の忌

大阪市 辻川 慶子

ホップステップジャンプ出来ない兎です

それなりの幸せ六回目卯歳

菊の花絵を習って年賀状

願い事かしわ手を打つ手をすすぐ

ポケットベル兎も亀も持っている

大阪市 杉澤 汀

耳立てて飛躍の年を待つ兎

万歳の空の青さよ式終る

薬指のような役目の職でした

迷いこみ標札をよむ袋小路

頭だけ下げて済むよなことだなし

大阪市 津村 志華子

セールスに居留守の息を止めている

借家でも女ひとりの花の城

老母ひとり庭のぎくろの実がはぜる

かあさんの秋が咲いてる小さい庭

老いの身を励ます鞭は花のむち

つつがなく何もせずでは身が立たぬ

正月だ特別な顔並ぶ里

孫が来てトーマス ポケモン教えられ

無口すぎ離婚されると言う噂

河内音頭出ればそろそろお開きと

大阪市 清水 利武

初詣で月のうさぎへ会いにゆこ

ノムさんの檄に奮起のタイガース

悪人に知恵を貸してる弁護士

味のある男 飲み屋でもっている

桜吹雪が不倫の汚名着てテレビ

大阪市 板東 倫子

幻も現も無限大の飢餓

豪邸で稀代の鬼女が高笑い

カリスマの素性は赤いまんじゅうやげ

罪深い私へ仏は無表情

懸命に今日を生きるだけの自負

大阪市 福岡 雅楓

あわてもの似ていて母娘笑いだし

霜焼けの手など知らない手が揃う

思いつき手を叩きたくなる静寂

断層の目には眩いパール橋

掌中の玉は育って転げ出し

大阪市 中田 あい子

列つくるくせすぐに出る戦前派
人生の幕にはチョンとならぬ粧
八十路来て夢だく友の薄化粧
ママとなる月書きそえた年賀状
行つて見て絵葉書ほどにない景色

大阪市 岡本 久峰

神農さんでこれかいなあと国訛り
崩れゆく老舗へハイエナがたかる
校庭の隅に鶏 兎小屋
老女医の旧宅白椿が匂う
可愛さの余り外せぬ躰糸

大阪市 小糸 昭子

にんげんで良いな ありがとすぐ言える
血の色は女を試す曼珠沙華
からだから吹き出す汗で子を育て
強い意志曲げずに通す男だな
背を丸め優しい兎うんと翔べ

大阪市 寺井 東雲

待っていてこないはずだよ明日でした
草むらで千の鈴振る虫の声
巡り合せパチンコ玉が山と積む
女優さん素っピンなれば分らない
まちがわず届きましたか義援金

大阪市 奥田 良子

カサブランカ一本だけのお正月
歳晚を掃き出し一人年迎う
片思い泣いて時雨が好きになり
老桜の一輪だけのかえり花
裏庭の柿また一つ落ちている

豊中市 安藤 寿美子

米寿の師かこみ昔の声を出し
人生の戦いすんだ顔ばかり
おだやかな顔をいくつか湯に浮かべ
髪白くなるまでつづく片思い
このへんで親類少し切り捨てる

豊中市 田中正坊

当然のように正月やってくる
年金が遊んでなんで悪いのや
長い不況タクシーのながい列
大臣と力士の名前すぐわすれ
隣組みんな仲よく飢えていた

豊中市 湯浅 馬洗

初日の出波飛び兎曆掛け
除夜の鐘鳴っても秘仏まだ半眼
グレンさん同じ世代に気合入れ
老いた犬抱いてぬくもり貰う朝
散髪も短く切つて不況策

豊中市 井上直次

新世紀へ心はずまず老いの初春

手のこんだ嘘を見破る妻の勦

生傷の絶え間ない手で磨く技

うかうかと生きて来ました喜寿の朝

華やかな色で隠そう老いの背

豊中市 松岡久留美

親泣かせ一粒種の後始末

姑の耳内緒話が大好きで

出稼ぎにたっぷりサービス屋台店

熱心に育児書見入る若い母

華やかな舞台裏にもある嫉妬

豊中市 江口明光

浮き玉が沈む今宵の黒い海

ワンテンポずらし送ろう金のこと

白黒の虹を見ているビル谷間

返らない島の夕陽が赤すぎる

育つ孫もうかうかうかと叱れない

豊中市 滝北博史

新世紀へ金婚式へあと二年

美女だからマユバケオモト見てもらう

親友の快気祝いに雨がやむ

黒谷から紅葉もとめ真如堂
野球には関西弁がよう似合う

箕面市 岩津ようじ

サイレンススズカやあわれ安楽死

吉田はんノムさん人気どう見はる

銀行より固い生業パチンコ屋

兆という単位に慣れて行く恐さ

あのころはまだ若かった古希の僕

箕面市 椎江清芳

水割りの底で煩惱まだ消えず

饒舌が過ぎると底が見えてくる

ツケの効く店が最後の梯子酒

もう下手な芝居しなくて済む極

箕面市 出口セツ子

一行に心凝縮する年賀

思い出にするには辛い年賀状

割烹着炎ひっそり包み込み

寒椿燃えて四十九の抵抗

平凡な幸福鍋が四季歌う

池田市 岡本吉太郎

嘘がばれても平気な顔してる女

ふと我に返って持ち味何だった

うしろより押された振りし前になる

何時の間にやらかつがれて会長に
人の心読むに強くて好かれな

寝屋川市 森 茜

地響きをたて特急が空いている
木枯し一号ポーナス回答もぶるぶる
吉本でおとなりさんも泣いてはる
そら豆のぷつとふくれた孫の頬
困ったな隔世遺伝してる癖

寝屋川市 江口 度

取調べあいこが続く黙秘権
商品券当らぬらしい我が家には
北方領土赤く塗っても還らない
風船の割れる音聞く伝言板
盆栽の枯れ葉はらはら散りたいが

寝屋川市 岸野 あやめ

卯の年だもうひと跳ねもふた跳ねも
眉を描くおんなに少しある迷い
孫の婿 美青年とは言えません
この自由この夢古稀もいいものだ
留守電話いいお話の時間切れ

寝屋川市 妻谷 重三

献血にきれいな方の腕まくる
田中です表札安う書いてんか
亡母真似てパパがパパがで波立たず
万一の荷物が重い山登り
荷物など積んではくれぬ霊柩車

寝屋川市 平松 かすみ

おめでたい妻で夫で恙無し
知恵袋繕う昨日今日あした
ピリカラで活気をつけるわたくしに
実直な父さん載らぬ週刊誌
公園で寝てる七彩食いつぶし

寝屋川市 籠島 恵子

それからは言わぬが花にしておこう
手抜きには見せないように五目めし
静電気溜めて火傷をしています
小春日和日向ぼっこはシクラメン
口開けて笑う話でないのだが

寝屋川市 堀江 光子

頑張れと人の事には言い易し
泣きに來て結局帰り急ぐ友
豆を剥くいつか没頭してる顔
首輪ついて犬の生涯決りけり
バクバクと原稿なぞっている所信

寝屋川市 柴田 英壬子

柿ひとつむけぬ姪っ子晚い婚
せい一ぱいの色でとなりの菊が咲き
負けた夜の裏道萩にいやされる
それから賀状の気配りなどもする
占いはいい方をとる事にして

法善寺ぜんざい食べる楽しみも
寝屋川市 後藤 黎之助

国会が終り各党自画自賛

人間のぜいたく烏知っている

御歳暮にする予定なり商品券

柿をもぐ庭の灯がひとつ消え

寝屋川市 北岡 波留吉

当たり年祝い兎と月旅行

陰膳が一際映える松の内

正月も帆を張っている父の舟

先ず先祖の冥福祈る初詣で

受刑者に年賀状書く元刑事

寝屋川市 坂上 高栄

すばらしい夕焼今年はなかったね

自動車が自動車積んで走ってる

拓本は句碑に許しを乞うてから

雪の道辿れば鉢の木が見える

中東の和平歪に手を握る

寝屋川市 太田 とし子

健やかな夜明けがほしいカレンダー

世界記事取って読んでワンルーム

正月も平日もないおでん鍋

スーパ―に本屋があつて哲学者

横文字が理解出来たら翔ぶだろう

手も足も達磨になつて冬ごもり
高槻市 川島 諷云児

偶然の出会いで開く恋の花

理不尽が大手を振つてゆく時代

バーゲンの粗品へ並ぶ自己嫌悪

黙つてゐる時が一番怖い妻

高槻市 傍島 克治

ご事情は察しますがと断わられ

待機する履歴書お呼びかからない

定年までの夫婦と妻は決めている

格付けをわが家も下げる中から下

臓器提供しようしないと長い夜

高槻市 井上 照子

新年の膳にらみ鯛福を呼べ

負けられぬ同志は群を抜いていく

冷えてくる風娘をおもうマフラー買う

昇る陽を一人で拝む生きること

美容院きつと魔法の鏡でしょ

茨木市 井上 森生

宙返り出来た天女の衛星の旅

明石大橋島おこす夢書紀以来

海峡の魔神大橋大地震

香港の孫なら英語か広東語

これからはゆっくり時計に万歩計

炭木市 堀 良江

付きを呼ぶカラーは白ときめている

法要の客は嫁女を持ち上げる

常連と思ひ思われ角の店

留守番が猫ではゆっくりでできません

鮫小紋指輪はずした手が白い

吹田市 古川 喜美子

左手に何時も不満をもつ右手

手の中に子の手たしかに昏れた道

ひなげしのひとひら聖書からこぼれ

鳶が鷹でも顔だけはよく似てる

私に似て政治家記憶鈍いこと

吹田市 山本 希久子

めでたくて春のうさは耳のばす

平服で平常心の屠蘇の味

誤解されたまま紅葉はまっさかり

シングルベルと第九に押され年を越す

絆かな二枚残った皿に似て

吹田市 石原 靖巳

灯台は子や孫だった夫婦舟

帳尻がプラスになった住所録

丁寧に指示を下さるメカニズム

ボキヤ貧のことなら僕も総理並み

保険詐欺 希代の毒婦なる語あり

吹田市 瀬戸 まさよ

感動の水府泡幻ああ川柳

手を探るそれだけの恋映画館

何のため生きてるのかと長電話

目覚めれば小鳥の声に励まされ

それぞれに好きなこととして善い夫婦

吹田市 茂見 よ志子

コンサート弦の調べにお洒落して

蛇口全開大きな声で好きな歌

あしたとは言つて居れずに灯油買う

旅のホテルで花嫁姿佳き日かな

夫婦独楽いずれ一つで回るだろ

吹田市 野下之男

ユーモアのつもりで誤解置いてくる

終点が薔薇色の夢終らせる

珍しく隣の犬の安息日

色ガラス透かして見てる世紀末

外出で妻の若さが試される

守口市 森川 まさお

八十歳抜け道を行くゆつたりと

寄せ植えに尾花を忘れてはならぬ

夜の雨ラジオつければまた演歌

颯爽と山越えてきてうどん屋へ

よそよそし青いもみじの散る時は

守口市 結城君子

実感のわかぬ立冬とはなりぬ
盛りつけてプロ級になる料理

大皿に盛ると呼びたくなるお客
故郷のおまけもついて奈良をほめ
夫唱婦随心入れ替え来世まで

枚方市 前 たもつ

古稀近しわが人生を謳歌する
肺移植経過良好我が如し

宿題が出たとうれしい一年生
ぼくに似た羅漢こつちを向いている
色即是空 空には一つちぎれ雲

枚方市 海老池 洋

やがて咲く四人の孫はどんな花
手持ち無沙汰もいいなと思う二三日
酔うても忘れずくすり四五種類

財布は財布くよくよせずに飲むことに
ブランコに飾らぬ顔の揺れている

枚方市 森本節子

吹く風に煽られて舞う秋の蝶
石童丸のことを尋ねる外人さん

朝一番今日の空気を部屋に入れ
休みあけ診察なんだかざついよう

ゼッケンをつけた名馬の最後噓

枚方市 寺川弘一

故郷はがじゅまるの樹の記憶だけ
八月の水平線に疼く胸
無人駅降りねばならぬ風光る

望遠レンズのなかを走ってくる人生
観覧車告白するには速すぎる

東大阪市 森下愛論

ほん少し庇に寄れよ濡れ雀
戦争で残したいのち百までも

初詣で靴がシャキシャキ砂をかむ
おけら火を悪戯に似たる回しよう
盃が知ってるだけの三ヶ日

東大阪市 谷口 義

礼服のままうどん屋にいるふたり
立ちくいうどん忙しい人暇なひと

立ちかけたとき聞き捨てのならぬこと
役に立つ話を誰も聞いてない
化粧して言いにくいこと言いに行く

東大阪市 指宿千枝子

じつと見る六十余年元気な手
皺も染みもあって大事な私の手

飴色に染みた大根老母の味
七色の金米糖を買いに行き

寶石の色で賑わう夜の街

東大阪市 西村哲夫

座右の銘変えては進む牛でいる
春の風帰って来たとかざぐるま

人間絶滅地球の笑顔目に浮ぶ

亡父が吹くシャボン玉はまだ消えず

鬼の面付けて離れぬヒト科いる

交野市 山川日出子

小錦のうまくてっかいコマーシヤル

目の玉で愛憎作る人形師

多数の無生死の鍵か般若経

人力車乗った気分でハイポーズ

宇宙葬打上げ費用百万円

松原市 玉置重人

食べすぎたような気がするバイキング

お隣の猫が私に会いに来る

カネと暇両方あればどないしよ

人食うた話大きな声でする

朝漬けの胡瓜が好きなお粥さん

松原市 小池しげお

おじいちゃんになりきる柿をむいている

のびのびと空を眺めてから帰る

特急を立ちづめで行くよい便り

夜が明けてみればつまらぬ欲でした

中古品俺もこんなやと思っ

八尾市 宮西弥生

OB会出合いのつづく秋最中

夢のない列島いっぱい秋実る

夏の花元気で秋が近寄れぬ

思い出に酔わすひとりの京の風

矢絰が似合う格子の多い奈良

八尾市 高杉千歩

新年や家族五人の抱負きく

幸せはひたすら生きて千歩の絵展

ロッキーの山に囲まれ絵三昧

ネクタイをはずせばただのお爺さん

宝石のような地球よハイビジョン

八尾市 高橋夕花

山茶花のいちりん二りん冬支度

茶碗むしの程よい熱さ凡夫婦

羊羹を厚く切っても菊の夜

ピアノの音心に響く日も近し

聞えばまたやさしい男好きと言っ

八尾市 宮崎シマ子

お正月からラジオ体操するつもり

近所からもろたお餅で足る雑煮

妻喋り夫が笑うて生きている

婚の荷が村のはずれの橋渡る

裏打ちをするよに電話来てばれる

八尾市 大内朝子

正月の花の凜凜しさからファイト

晴れ着きる娘がまぶしくて嬉しくて

子の夢を翔んでわたしは素寒貧

あやとりの川を渡ると老母にあう

生き下手な子よごめんなさい親ゆずり

八尾市 長谷川 春 蘭

夏ばてに心はげまし句にひたる

杖をつく人を見送り秋の風

菊の鉢枯るる金賞銀賞も

留守居することも一役菊日和

のど飴をなめて来るべきものを待つ

八尾市 吉村 一 風

孫と酒飲みたい夢が今日叶う

風花も楽しく妻と腕を組む

素うどんと七味で酔いをとじこめる

童謡で灯油ほほ笑み売りにくる

鳴き砂を裸足で老いの夢を追う

八尾市 村上 剛 治

入試の日靴音軽く子が帰る

身体には惜しまず金をかけている

ライバルもまむしドリンク飲んで

なまじっかおとこ気だして火の粉浴び

トラックに荷が半分という不況

八尾市 村上 ミツ子

妻の顔みると白状してしまふ

おはようと言うて家族がひびき合う

生きる知恵自閉の娘からもらう

出し洩り役に立たなくなつた知恵

喪が明けてまた新しい喪に入る

八尾市 篠原 いつふみ

先逝きし友を愚痴ってひとり飲む

酒二合本音ぼろりと浮いて出る

先頭の旗を時どき見失う

歯を削る音に命もけずられる

残り火を胸に大事にしまつてる

八尾市 神原 まさと

古稀の酒猪口三杯に自制して

昨日古稀今朝老春の第一歩

国の為質素節約止めようか

肩すかし食わないように立ち上がる

諄ちゃんが勲四等をもろている

藤井寺市 吉岡 美 房

好きですとやつと言えたら秋だった

平凡なことです愛は注ぐもの

来年の再起へ餌をやっておく

淋しいと何度も言わぬ方がいい

木枯しの中をお通夜に駆けつける

藤井寺市 中島志洋

元日は妻も笑顔でご返杯
賀状来ぬ明治の恩師気にかかり

不景気な話に飽きた雪兎

宝舟お着き待つてる兎小屋

新成人慣れた手付きで酒を注ぐ

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

朝やけの色人間を信じられ

秋深くもみじの色は裏切らぬ

避難所は恋も迷彩色の中

十菜も愛した人も手に残る

疑心なく温いからだと森の中

羽曳野市 榎本吐来

娘等去りし後公園の秋の空

達観の酒コーヒーは栄養ぞ

古稀の手はもう蠅も蚊も叩かない

老眼が初診の医師へ甲乙丙

晩秋と初冬に惑う庭の柿

羽曳野市 吉川 寿美

愛無限母と太陽在る限り

妥協する爪をまあるく剪っておく

小走りについて来ました五十年

シチューことこと愛も不満も投げ入れて

生きてゐる証税務署から封書

羽曳野市 田中透太

自転車で図書館に行く秋日和
役不足でしたと言わぬ馬の足

その先は誰も話さぬ曲り角

来るたびに昔話をして帰り

特別な生き方はせぬ定期券

羽曳野市 福田満州

神様の怒りか青い空見えず

紫かたばみしばし忙しき忘れさせ

時間と言う相手とどん逃げてゆく

土壇場でいつも自分を追い詰める

もともつとわたしを丸く削らねば

羽曳野市 酒井一壺

鍋の耳片方取れて考える

耳があるのでメガネを掛けられる

年寄りの聞こえる耳はやかいかいだ

手術してきつねうどんが欲しくなり

金借りに行つてすうどんよばれてる

羽曳野市 三好専平

サンテクジュペリ海に旅していたんだな

焼き捨てるつもりで書いてる日記

なにごとも天気の良いにしてしま

甘辛を断てとはむごいことを言う

種のない柿はさびしい味がする

河内長野市 井上喜醉

正直へまともに当る向い風
魅せられた岬の風が肌へ立つ
真心がこもると変る墨の色
雑草のごとく生きます夫婦坂
退屈な雑兵でいて夢捨てず

河内長野市 植村喜代

母が逝く思い出多き里の橋
どこへ行く当てもないけど初日の出
孫を待つすくすく育つ有難さ
台風が去って孫のお宮参り
もういいだろう母さんも楽をせな

富田林市 片岡智恵子

雲走る昨日の嘘が立ち止まる
コスモスゆらり石の孤独を聞いてやり
人間不信偉大な海の息づかい
本心を話して力湧いてくる
満天の星に護られ生きている

富田林市 松本今日子

嫌がる子袴はかして七五三
可愛ゆうて仕方ないから叱りつけ
紙テープ投げずに持っている別れ
山鳩の巣立ち待ってる杉一本
鬼も神秋の祭りに駆り出され

堺市 黒田真砂

家中をうろうろ老いのもの忘れ
老い二人お茶のむ縁の秋日和
リハビリに少しのばして行く散歩
道遙か夫婦の歩幅揃ってる
父の風きびしく冬の木を揺する

堺市 楊井二南

難解の句には小首をかしげがち
逸る気を抑えて右往左往する
貫禄は白髪が増えてから目立つ
羨望の的になりたい派手好み
宮仕え昔昔の顔になる

堺市 宮本かりん

異常気象だまされやすき花の性
脇道に逸れて出会ったのがあなた
片方の耳は喜劇に聞いている
湧水を掬って初心よみがえる
海面にダイヤを撒いてゆく夕日

堺市 山本半銭

うさぎ兎千両の実は君のもの
嬉しいこと聴いて欲しくて香をたく
緋衣の法主うるわし散華舞う
三文判謀反する気を抑える
コスモスよ小さい顔に光射す

堺市 神原 文

松茸を食べ損ねたる冬隣

冬空にクラブ振る手で拭き掃除

方便の嘘すら言えず世に迷う

のびのびと天馬で駆けている夫

叱られも褒められもせず差し向い

堺市 柿花 紀美女

百本の芋苗今年も無事に植え

やがて来るひとり进行を思ふ夫婦箸

娘を託す男へ固い握手する

寄せ書きのひとりひとり顔

眠らせぬ暗闇口を開けて待つ

堺市 近藤 豊子

涼しから台風一過の瀬戸の海

虹のいろ七つかぞえたころに消え

雨あがりしずくのしたに鹿のかお

青信号鹿の親子と道わたる

奈良のやど朝日夕日へ鐘がなる

高石市 浅野 房子

何もかも灰と帰す空しい秋だ(義兄死す 2句)

骨拾う勲章のない白い骨

訃報聞きすぐ喪服出すのは他人

亡き人の表札未だ生きている

探しもの箆笥二棹かき回す

和泉市 西岡 洛醉

正直を一途に母の影を追う

東の間の午後です苦いモカにする

指を折る日数に遠い孫の声

諸行無常美しく暮れ寺の鐘

一滴のしずく命の大事知る

岸和田市 芳地 狸村

あれこれとみやげに悩む五条坂(清水寺)

散策に昔を偲ぶねねの道(高台寺)

古のれんいまも誇りの三年坂

いもぼうの顔が変わらぬ五十年(円山公園)

借景の三門うける旅写真(知恩院)

岸和田市 高須賀 金太

ふるさとへ行けば子供の眼になれる

ふるさとへ行けば疲れがとれている

ふるさとへ行けば曲者などいない

真帆片帆フォローの風がほしくなる

いさかひの隙間を埋める酒ぬくし

岸和田市 原 さよ子

よっこらしよ声でバランスとっている

バランスよく酒を薬にしている夫

好きだからちよつびりきつい言葉選る

言いあって春の七草覚えあう

木枯らしに負けるものかとペダル踏む

岸和田市 田中文時
含羞と言う語は死語となったのか

本を買う金が屋台で消えてもた
兎小屋潜水艦のような部屋

二日酔いせず初日の出拝もうか
四ヶ月外でカレーを食べてない

岸和田市 古野ひで

嫁も五十路苦勞の愚痴を聞いてやり

冬枯れのたんぼで烏何思う

語り部になろう恩師のお人柄

有難うひと言残して夫は逝き

十二月今年も無事に齡をと

岸和田市 寺田甚一

会議するまでに結論もう決まり

運動会ピリ娘や孫が継いでくれ

梯子酒職場と家にある谷間

久し振り会えばどちらも年をと

童顔の余得かすぐに打解ける

岸和田市 井齋一齋

社長訓示今年が山と初荷出す

御転婆の着物姿が裾を蹴る

日本髪夜も寝させぬ三箇日

親がかり成人式が笑つてる

金融危機二十一世紀が霧の中

岸和田市 長谷川 呂万
轟音に話もとぎれナイヤガラ

急がない余生のはずが忙しい
カップルは互いに相手見比べる

いとこ会モンゴル系の顔集う
もめ事に冷却期間活かす知恵

岸和田市 原 苑子

情熱を秘めて静かな青りんご

優雅とは程遠かった子育て期

匠わざ針を持つ手は無欲なり

松の木の樹齡歴史を物語り

年賀状元気で生きている合図

岸和田市 藪野 けい子

死に別れ犬をペットに生きられる

バスツアー知らない顔と友になり

じゅうたんの上で落ち着くハイヒール

金色のシャネルを耳にバスの旅

一ヶ月合わない人のふくよかさ

大阪府 榎山 隆盛

初日影われに給えり古希の節

古希の年以下同文の仲間入り

五風十雨テレビみている鼻めがね

水琴窟ころのリズム整える

KONISHIKIのアンバランスがおもしろい

大阪府 八十田 洞庵

自画像のせめてバックは暗れにする

色づいた山並み秋の大合唱

一人旅古寺にある魚板打つ

相聞によろめき冬の目を歩く

ローカル線降りて円空仏に遇う

大阪府 米澤 俣子

雪は旅人どこへ行くのか舞いながら

ためらいもなく妻は王手をかけてくる

強い父寄り添う母の絵は昔

飄々と生きて時折味なひと

今日のスタートおはようは私から

和歌山市 青枝 鉄治

任期中私腹肥やしていたバツジ

補聴器を外し七十五日待つ

フイーリング合うて一会の屋台酒

教養をひととき捨てる掴みどり

机上論現場の汗に嗤われる

和歌山市 堀端 三男

等分にエールを送る外野席

童顔を隠す口髭だつてある

プラス思考何時でも夢を見る女

酒好きへ土産地酒と煮干買う

ふるさとかからなれ寿司届く秋日和

和歌山市 福本 英子

お陽さまをきつちり拝む三ヶ日

刺しかけの手毬を溜める老眼鏡

無駄ばかり詰まる一人の冷蔵庫

和歌山が有名になり年明け

鞍替えをするとも知らずした握手

和歌山市 山根 めぐみ

雑兵へ不況の風が突き刺さる

翔びすぎて私の翼傷がつく

丸くまるく生きるとひびく朝の水

まっ白のまま汚さぬ胸の水

天衣無縫ルール乱して妻は翔ぶ

和歌山市 桜井 千秀

多種多彩操る糸は纏れがち

歯車がわたしひとり置き去りに

満身創痍生き延びて来た証なり

水割りで弾き語り聴くバーの隅

脱線してレールの無理を知らされる

和歌山市 川上 富湖

輪の中に人数よりも多い耳

吹き溜り身の上話始めよう

去ってゆく人にもやさし自動ドア

シャッター音幸せ芝居してやろう

事勿れ主義ではないか雪の白

和歌山市 木本朱夏

火の記憶抱いて化石になっている

四 五日は燃えた日もありカラスウリ

うしろ姿で待つひとが居る藪柑子

蓑虫の機嫌を風が知っている

舞い終えてさてそれからの肩がさむい

和歌山市 木村初子

保育器の小さいのち天掴む

無為無策お伽噺が好きになり

理想には遠いが貧乏には強い

天高し紅葉の下で墓洗う

ポイ捨ての缶屑籠でひとりごと

和歌山市 福井桂香

けなげなる兎は天に住み給う

世紀末のうさぎも先ずはジャンプする

読みかけの頁へ聴かすメヌエツト

夢の椅子あるかもしれぬ冬銀河

沖に出る鏡に眉を整えて

和歌山市 山田高夫

完璧に計算された罠におち

生きのびて償うことが多くなる

人嫌いびたりと閉じたドアの鍵

したたかに生きる男の二枚腰

冴え渡る月に邪念を拭い去る

和歌山市 楠見章子

娘婿の実家の犬が大きいぞ

結び目の解けないように言葉選り

おみやげの梅干し紀州弁が出る

大好きな蟹で朝から持て成され

梅干しと茶漬けて苦い旅終える

和歌山市 榎原公子

笑っても泣いても一人冬の蠅

体温でまどろむ朝の甘い刻

食いはぐれないよう次の世も法科

食文化歴史の前に立たされる

今一度君とまともに向かい合う

和歌山市 細川稚代

ドナーカード生きる証の糧とする

佗しさが満杯にする市場籠

本家とのバランスを取る引出物

里の駅だるまストープあった頃

あれ以来ぬくい瞳を信じてる

和歌山市 山口三千子

還暦を迎えて月日加速する

大志抱く子の夢糧に万歩計

生き甲斐は喜怒哀楽の中にあり

人生の午後偶感を書き溜める

黄昏れて学びの友は広辞苑

和歌山市 玉置 当代

響くから打ちたくなつてくる大鼓

自己防衛いつかは剥げてくるメッキ

蝸牛どうも私に似て頼馬

感情に燃え長続きしない恋

それぞれの生き方があり彩もある

和歌山市 堀 畑 靖 子

ほがらかなオバサン族の仲間です

太陽の丘を探している子供

キッチンのリフォーム老後への準備

私は私フォームは崩せない

カレー事件以来園部と書き辛い

和歌山市 古久保 和 子

宇宙語を話す若さと擦れ違つ

雑巾を持つとキョロキョロしたくなる

温泉の素が粗品に付いている

手を入れてみてから壺を買うことに

テイ・ペアの記憶に探る森がない

和歌山市 池 永 正 嗣

勲章は無くとも胸を張つてみる

大船に乗せて貰つて風の海

世の中がハローワークのピラにある

マラソンのゴールの何と遠いこと

家具 楽器 わが物顔のワンルーム

海南省 三 宅 保 州

ああ父も老いたりご飯粒こぼす

ネクタイを結んであげる妻ですか

新聞紙に包んでくれる小商い

コマーシャルどおり竜角散を飲む

転んでも照れ笑ひする日本人

海南省 谷 口 義 男

聖戦の字句に踊つて居た昭和

政治屋を政治家にする責めを負う

顔見せる事も立派な親孝行

寸志とは言えぬ厚さの熨斗袋

隙見せず生きて虚しく黄昏れる

奈良市 米 田 恭 昌

慶沢園池とび越えてくる演歌(天王寺公園)

職安で再生頼んでいるおつむ

都市砂漠表情のない人ばかり

背信の重み歲月流れても

烏飛兎走今年こそは擁締める

奈良市 天 正 千 梢

米びつを見てため息ついた事もあり

血が薄いのかべたべたしない親子

捨てられた理由が分かりかけてきた

成功は身丈にあったやり方で

結局は曲つた釘に助けられ

生駒市 麻生 アート

元旦はレースの窓にもやって来た

古時計のような男が一人住み

ただひとり冬待つ宿のあるじなり

依存症とは思いたくない酒の味

いじらしや妻のまごころ茄子トマト

生駒市 北山 悟郎

紅葉ではサクラほどにはうかれない

人生の背後に迫る万が一

自分を抑え自分に手を焼いて

真心が相手の心溶かして

頭低く根性軽く見られて

大和郡山市 坊農 柳弘

新春の祝い待ってる大吟醸

今日だけは母が新湯の二日風呂

予定日は元日ですと初孫ちゃん

夫唱婦随愛の絆のやじろべー

大和高田市 岸本 豊平次

声変りして父親に似た電話

電車賃で行ったつもりで長電話

帰りはデパート妻の医者通い

青空を飛行機雲が覆った日も

数え歳昭和の年と同じ歳

奈良県 中原 比呂志

北国の温さ求めて渡り鳥

青い芽だ不法侵入ゆるす庭

コーヒーが良い大役を終え一人

ブラインド角度を変えて書き直し

玉串の先からご利益降りそそぎ

京都市 山海 友熙

新春に「ねね」を見かけた高台寺

羽子板に恋の話をする雑煮

寅にまだ追いかけてられているうさぎ

古都の春赤い鼻緒が恋をする

加茂川の流れみているお年玉

京都市 都倉 求芽

兎と亀の世に戻れるならばと願う初春

兎の日亀の日一年がまためぐる

鳥獣戯画兎も哀れ弓矢持つ

かの山もこの山も兎は住めぬゴルフ場

安住の地が月にも地球にもない兎

京都市 稲葉 冬葉

一年の構想を練る床の中

三ヶ日紙人形を着せ換える

生き甲斐のひとつにコンピューターミシン

秋財布のせいにしておく浪費癖
瞽女の世を思うひととき枯葉舞う

富山市 舟渡杏花

さがしてくれる期待あつての置手紙
鬼になろうと手はじめに彫る鬼の面
宇野千代の真価ひもとく古希過ぎて
不時着の男と揺れるどこまでも
バラを買うたんびにどもるボクの癖

富山市 酒井輝

生き過ぎた詫びも加えて初詣で
縄文で暮らす巢穴に戻りたい
バス停の朝を自販機もう様ぎ
逃げ口の見えぬ都心のけもの道
役立たぬのに頼られる医師の妻

富山市 島ひかる

歩を合わす兎と亀の夫婦仲
地獄極楽あの世この世と聞かされる
良い事がありそう長い列に居る
初釜へ足袋と帯揚げ新しく
花の香に負けない母と煽てられ

犬山市 早川盛夫

旅立ちの日の着い空白い雲
タクト振る才覚もなし鉄火井
その先は知らぬ一緒に呑んだだけ
とんとんで生きていけたらいい老後
倅せなサンマ備長炭で焼け

可児市 板山まみ子

聞き耳をたてる視線は点になる
くしゃみには背中をむける満員車
老化にはチョコを毎日食べるとか
野菜高もやし料理が増えてきた
家計簿にうとい娘のねだる服

静岡市 安本晃授

長生きの護符か手に持つ葉包紙
真相をぼかして笑う二枚舌
夏の絵を抜けて女の語る恋
一輪の花にこそある誠実さ
自叙伝の浮かぶ静かな野天風呂

富士宮市 渥美弧秀

コック職二十年間まだ独り
反骨のツルアキラ読む秋灯下
花に埋み棺の義姉は永久の旅
拳ひらくロマンはすでにこぼれ落ち
言い合ってまた寄り添って夫婦きり

静岡県 蘭田 猿 杓

雲止まる校庭の声変声期
半農半漁案山子漁網を着せられる
合掌の墓前 心に萩こぼる
壁の如紅葉迫る山の駅
煮え切らぬ心そのままで従いてゆく

横浜市 菱田満秋

一日にたった一善出来難い
天下泰平五年も先の法つくる
大國の保身に核が欠かせない
カタカナ語嫌い硬骨漢を自負
嫌われていても烏は媚びてこぬ

横浜市 清水潮華

新調のパンツに足を組んで見る
まだともう使い分けして誕生日
電話の声褒められ姿見せられず
葬儀社の不思議人影見かけない
カタログに任せて快気祝来る

横浜市 後藤早智

どんぐりを山のみやげに三個持ち
雪月花 下戸には下戸のお付き合ひ
禁酒法そんな時代の映画観る
シヨッピング平和な主婦の顔になる
わが家にも骨董らしき夫の無駄

横浜市 菊地政勝

新品に負けてはいない古時計
差別語に加えてほしい呆け老人
星空は姿勢良くして眺めさせ
湯豆腐がしなをつくって揺れている
贅沢な趣味と言われる草むしり

町田市 竹内紫鏞

治療して試歩食べすぎて万歩計
生意気なドイツ語は消えクラス会
煙突掃除ですと手術の画像見せ
見学の目にも売上死守の文字
濃淡の二重印刷句のごとし

八王子市 播本充子

やや長い助走が風をよく捉え
優しい目厳しい目にも支えられ
泣かされた話へ女膝を寄せ
還暦へ優等生を止めようか
同人へ河内音頭も覚えねば

弘前市 斉藤 荔

白い髭とつても似合う秋の画家
秋天っていいなあ赤い実をくれる
台風になんとかよわい人間よ
電線が埋まり小鳥が来てくれぬ
鬼灯やおまえも亡母が恋しかり

弘前市 高瀬霜石

コンビニと母 元旦も休まない
鈍行の旅麦飯の味がする
寝台車タイムマシーンのような貌
おい奥歯長いつきあいだったなあ
背景は青空 映画館を出る

蒼天の深さに迷う竹トンボ

弘前市 一戸ツネ

そのままの仕返しができる懐手

自分史に節目をつける袖だたみ

過去帳に載せる命の名が決まる

仏心に妬心動いて噛むりんご

弘前市 高橋岳水

生かされた命へ謝して屠蘇を酌む

新年に賭けるつもりの日記買う

カルチャーで妻の目線が上を向く

余生なお狂気一つを持ち歩く

枕辺の般若心経からなごむ

弘前市 富士慕情

腕組みを解いて男が立ち上がる

鏡餅丸くしてみかん落ち着かず

三が日過ぎて職場の独楽となる

雪のんの何処へも行けぬ団子虫

吹雪く夜のまんどろに出る北の月

弘前市 櫻庭順風

キャブテンを信じ気楽な波枕

揺れないと船と判らぬ豪華船

台風に呼吸ピツタリと酔うダンス

なりきって一途に歌うフロアも歌う

句想わき真夜中に繰る辞書を繰る

もみじ散る見返り阿弥陀頬濡らし

後世願い見返り阿弥陀けんほろろ

丸描いて悟りに生きる筆の禅

きしむ雪踏む雪沓の愛と憎

年越しそば欲ささやかに初詣り

弘前市 小枝ふさる

人間が好きで今日も群れに居る

ブナ林で森の鼓動を聞いてくる

極楽に生きてる秋の露天風呂

青春がいっぱい詰まったドーナツ盤

大輪の菊も今夜の食卓に

弘前市 中山雅城

一手目を天元に打つ果し状

一本に熱いほたての貝柱

一曲は校歌で締めるクラス会

一升びん枡に戻して小さくなる

一期生何時も誇りを持っている

弘前市 蒔苗果林

爺の体調りんごごぞって問いただす

小春昼りんごの樹下に食座敷

蜻蛉夫婦りんご一樹につきまとい

農業を離れ寂しい手の美人

落ちりんご傷をさすればすすり泣く

弘前市 小寺花峯
のんで飲んで男は夜の風になる
疑った闇から雪が降り続く

真冬日の底で命が呼吸する
橋だけを残して消える川の鬱

ゴミの日にゴミが溜らぬ昼下がり

弘前市 今 愁 女

春のバラより紅萌ゆる満天星葉

羽衣を捨てて天女は宇宙翔け
仕事を宇宙にみつげ星は友

第一希望宇宙と書いて失業者
宇宙からの採用通知夢にみる

弘前市 相馬銀波

新米になるとおにぎり売り切れる

秋霖にレタス白菜別メニュー
雪掻きの軍手も赤いお隣さん

それぞれ思い見られる水飲み場
結論を急ぐと厚い壁がある

黒石市 相馬一花

もう少しお金があれば寝て暮らす

青森の美女はりんごの依存症
再婚の話に動く遠い耳

女房に背を向けているマムシ酒
悩ましい声でチリ紙交換車

十和田市 小笠原敏人
娘の出産慣れない家事に子を思い
急な雪 雪国にても一呼吸

初雪に油断の隙を狙われる
黒ずんだ柿に帽子の牡丹雪

御稲荷が初荷の籠に陣取られ

八戸市 島田昭治

墓参り替りたかったと言ってくる

佳子さん毎日惚んで三回忌

片想い生きる励みになっている

天国で熱い恋した夢を見た

このごろは日課に校庭の石拾う

青森県 諏訪柳々

常識の弱さ非常識煽り立て

斑模様山の化粧は荒削り

仏足石行脚の僧の日暮れかな

義人碑に王者に向けた刀描く

供養塔飢饉の風が吹き溜まる

砂川市 大橋政良

蓮の座の眠りごちはどうでしょう

直球で完封妻のいいリード

一歩出て用心深い仕草する

傘ひらき誘いを軽くかわされる

一人欠け少しいびつな輪になった

高知県 小澤 幸泉

古街に乙女の戻る時がない
にこにこと怒り始めた糖尿
コップ酒酔うた昔に戻れまい
娘の夢を満たし父さんやせ細り

香川県 成重 放任

酒肴膳いっぱい春の宴

鏡見てスターの道は諦めた

平凡な暮し続ける難しさ

花柄の墓で埋めた山一つ(台北にて)

松江市 安食 友子

雨しとど安らぎなさい病葉よ

でくの坊になりははあと畏まる

温顔で毒のエキスを勧めてる

命日に愛用の杖撫でて見る

松江市 浦辺 静江

つっぱりや意外な事で騒ぎ立て

あちこちを整理し出した秋日和

うわべだけ飾って見ても年は年

立話煽てにのったお人好し

出雲市 小白金 房子

叱られる頃はよかった亡父の夢

どの花も似合うわたしの白い壺

野良猫も今日のくらしへ牙をとぐ

雑巾の糸目に母の愛を置く

鳥取市 前田 一枝

人波にもまれて自分見失う

雪国で南国の花床にいか

握りめしざるとかにとの仲たがい

宴弾み老いのリズムをくるわせる

鳥取市 富山 檳榔樹

ぐさり刺す怒声の槍はかわせない

愛憎の陰に無心が鞭を打つ

油絵の自画像なぜか俺睨む

研鑽を積んで磨けば味冴える

鳥取市 徳田 ひろこ

天辺を見上げるものと知っている

寄せ鍋にする出来事の山がある

蔵中がビックリ箱になってゆく

銜いなくピアノ素直に鳴っている

倉吉市 最上 和枝

せかせかと踵を返す忘れもの

せかせかと厩に追われ姑達者

燃えるより熾火のような人と住む

燃える日を信じて火種絶やさない

倉吉市 米田 幸子

脱ぎ捨てた子のお下がりを親が履く

潤滑油銚子一本余分呑む

晩学の筆にはあちゃんなめられる

考古学古代のロマン眠らせぬ

鳥取県 権代康女

コーヒーを飲んで寒さをやわらげる
見ぬ人の心温さに胸つまる
顔色を読んで女の気が抜ける
新しい年だ笑って迎えよう

鳥取県 幸家單車

ぼろぼろに破れた夢を貼り直す
平凡な暮らし波風避けて行く
不況風貧乏人に良く当る
ぼろぼろの心を癒す神頼み

倉敷市 井上富子

若いのに鮮度が見える市場籠
二十五の時に振られてまだ独り
気を引いておいてアバヨツと言う魚
カルチャー画家を冷やかして行く男下駄

岡山県 福原辰江

蓼を食う虫がしってるその魅力
友の苦言あとでじんわり効いてくる
金婚の皿は娘等へ任せます
ファミコンと箸持つ指は同じこと

大阪市 町田達子

世界の化石美石の店を覗いてる
珍しい石の主張も聞いている
木枯らし一号紅葉もやつと腰を上げ
妻には負けますと向井さん照れてはる

池田市 栗田久子
かくしてた手の内すでに読まれてた
単線に揺られ夕焼空の下
咲いたのも束の間山茶花がはらり
降り止んだ雪南天の実を洗う

池田市 藤井計光
ヤブだけど何故かほどよく慕われる
言葉などいらぬ絆の灯が温い
通夜ぐらい人の陰口避けたいね
府中にはやはり魔物が住んでいた

寝屋川市 富山ルイ子
後ろから私案じて影法師
役に立たぬものは何にもないと知る
一生の目標早くから見つけ
味噌汁の具に朝取りの野菜入れ

寝屋川市 角野仁清
サラ金の時計は容赦なく回る
はらはらの手をヨチヨチが逃げ回る
お預けの犬も辛から休肝日
アルバムの少女逢うてはならぬひと

寝屋川市 酒井勇太郎
モナリザの微笑にハート盗まれる
半世紀翻弄される北の島
不況風子らのリストラだけ案じ
太鼓判押され油断をした愚か

枚方市 二宮 山久

我が足を信じきつて登山靴

カレンダー流れの早さ見てる年

誕生日今年も迎えた元氣よく

幸せな暮し妻子の寝てる顔

東大阪市 安永 春

新年にさしつさされつ祝い膳

寄席がえり笑いの余韻語り合い

灯籠の影ふたりなら恐くない

まだ先の転居に苦楽考える

八尾市 生嶋 ますみ

ファックスで声遠のいて核家族

汗にじませりハビリの母息をつく

人を呼ぶ忘れられてるタマゴツチ

蒲団叩く静かな昼をゆるがせて

貝塚市 池田 寿美子

生かされて生きるよろこび富士仰ぐ

宙返り天女の声はつややかに(スペースシャトル)

ホテル今日最上階に日の出見る

台風の去った翌日疲れ切る

和歌山市 田中 みね

何をよくよクリントンでもへまをする

初夢は後生大事とする艶書

八つ当たりしないできつい言葉尻

因習の壁塗り替える嫁が来た

仙台市 川村 映輝

のうのうと利子で暮らしたこともある

好きな物それは一番旨いもの

OB会明治生まれはわれ一人

孫ピアス茶髪を親は黙してる

十和田市 阿部 進

喜寿夫婦やる気あるらし竹を踏む

疑うより信じだまされる方がまし

何時までも輝いて居て欲しいママ

生涯の宝我が家の孫娘

二賞選考方法改定

平成十一年度から左記のとおり改定する。

。川柳塔欄・水煙抄欄の入選句（九月号―八月号）

から各自が自選五句ずつを応募する。

応募の締切りは八月十五日とする。

八月号本誌最終ページの応募用紙を使用すること。

。川柳塔欄・水煙抄欄に六ヶ月以上出句した人のみ

応募資格を認める。

選考方法改定につき、平成十年度までの二賞受賞

者も応募できるものとする。

川柳塔欄 社

佳句感想

橋 高 薫 風

穿(うが)ち

子が出来て川の字形りに寝る夫婦

(はなれ社すれく)

役人の子はにぎくを能覚

(うんのよい事く)

右は柳多留の名高い句で、私は前者を穿ちの、つまりは川柳の原形のように思う。後者は明らかに権力者への批判で、ある時期には穿ちと言えば諷刺の句と解していた。

寝転べば畳一帖ふさぐのみ 麻生路郎
「起きて半畳、寝て一畳」の諺を五七五に格調高くまとめた名句も、

子沢山使いにやったのを忘れ 正本水客
あの産めよ殖やせよの時代の生活の些事を軽みの味にさらりと写した佳句も穿ちである。

恋人の膝は檸檬のまるさかな

解説をしやすいため私の句を挙げるが、現代川柳に多い暗喩の句も、若い女性の膝とレモンの形、また内在する精神性の上での爽やかさに相通するものがあるので穿ちと言えな

くもない。路郎先生説の、穿ちは英語で言うインサイト、穴を穿って内部を観る観照の意味合いに取れば、うがちの川柳に占める領域はまことに広い。

私は川柳はうがちだと解している。

論語から老子に変えた五十板

浅田 隆樹

道德の本を仁と観じ、政治・教育など広範に亘り高度の見解を述べたのが孔子だ。道家の祖老子は、恬淡・無為など自然に帰れをモットーとする。五十の働き盛りにいささか早過ぎはしないかと思えるが、地球の荒廃を見れば領けないこともない。

季節感狂う人生観狂う

川端 柳子

従来の日本の季節感、今年いささかのずれを来たした。花も雨も炎暑も半月ばかり早くおとずれ、洪水も台風も荒々しかった。春夏秋冬それぞれが育んできた国土や国民性は狂いはしないか。季節感と人生観は直結する。

時に一九九九年を迎えた。

魂を抜いても六十冠はある

土橋 螢

特攻隊の生き残りのこの作者は、魂の存在を常に強く意識しておられる。私の好きな

雪達磨春を迎えに行つたきり 螢

も春に近い風物詩と見るだけで価値があるが、ひよつとして神風特攻隊へのレクイエムかとお訊きしたとき頷かれたので、やはりそうかという思いがした。この句、魂を抜かず計ると優に百冠になるのであろう。

渾身の一筆書きの飛行雲

牧瀬富喜子

柳人は省略が好きなので飛行機雲を飛行雲と言ひ習わして通じさせてしまった。

一直線に伸びる航跡は乗る人の意志のようでもある。見送る人は、その意気やよしとする。「渾身の一筆書き」の力強さは感銘深い。

目くじらを立てて女が歳をとる

仁部 四郎

目くじらは目の端、目角のこと。目くじらを立てるとは、小さいことをとがめ立てする、目に角を立てることだ。

女が擦れ違ふとき、ちらりと観察する目付きは目くじらの芽であるうか。目尻の皺に用心と言っているようにも思える。

自選集

辻 白溪子

病名を聞く間もカルテの休まぬ手
見合の座ケーキも少しある方がよい
自販機の酒はその場で空にする
ハンカチを噛んで口惜しい演技する
とりあえず一つは用意しとく芸

小 西 雄 々

中空が見たいハウスの葱トマト
修正液で反対ですと書きなおす
肩の力ぬいて余生を楽しもう
寸足らずばかり一票決めかねる
Uターンすると決めても職がない

金 井 文 秋

内需拡大ぜいたくは味方です
足腰を冬が痛めにやってくる
人生の旅路いくつもあるコース
勧められる保険なんにもない八十路
おみくじも凶また凶の深い闇

小林 由多香

深刻な話しずかに箸を措く
晩学へ送り仮名さえおぼつかぬ
暖冬へ素直に花が伸びすぎる
朝からの不機嫌きようは休肝日
恋猫が涼しい顔で膝にくる

宮 口 笛 生

古希という妻も大きな齢となり
正月だ元気だゆっくり呑むとする
元氣屋が元気ではない齢となる
三ヶ日布団は敷いたままにする
正月の鏡は笑顔ばかり見せ

波 多 野 五 楽 庵

薄情なカルテが歩く冬の章
モノクロの津軽は雪の降るところ
夕寒や暦と一人対座する
落し文するりと月の真ん中に
濾過されて濾過されてゆく私です

藤村 女

ありがたき世にありがたく生き延びる
すこやかがただありがたし元旦迎え
坦々の日々ありがたし米寿の坂
初日の出忘れた初心呼び戻す
静けさの中で賀状の届く音

野田素身郎

妻や娘が歩け歩けと言うから歩く
両足損傷気丈な妻の松葉杖
かわいいが今来られては困る孫
正座はおろか胡坐もかけぬ後遺症
悪筆にならざるを得ぬ後遺症

松川杜的

勘亭流 仁左衛門の名の久し振り
七十九歳笑顔で宇宙に舞い上がる
八人目の乗組員と熊を撫で
本心の本心私の日記帳
豆腐屋のラッパおねぎも御座居ます

藤井明朗

人出より財布の固く十二月
国民生活打開に無党派が多し
歌合戦に不況がゆるむ大晦日
幸せな「むらくも」五十年の新春
新春こそ明るいニュース初詣で

黒川紫香

街路樹の葉っぱが溜まることで待つ
ひこばえが何と寒所に並んでる
風邪ひいてまんねと携帯電話から
焼芋屋の笛が鳴ってる裏通り
平成十年とも角無事に過ぎました

月原宵明

しまなみの橋から二十一世紀
クロアチアこんな所に小さい国
猫じやらし猫も蜻蛉も来てくれぬ
相槌がかなり遅れている謀反
パチンコで半日悠々自適する

正本水客

淋しくて嘘がだんだん大きなり
大声でほんとうの事が言われない
割箸の先も意の如くならず
昼の月昨日と同じ道かえる
こつこつと来た道だからまた歩く

遠山可住

同級会タイムトンネルぐりりぬけ
変らないふるさとがある茜雲
種袋 写真のように咲くつもり
二十一世紀こつち向いてる手を振ろう
いい朝だゆうべのダルマ確かめる

野村太茂津

ふれあいが娛しく和む世紀末
手薬煉ひいて待ちに待つて新世紀
青春に戻す氣力を貯めている
呼んでゐる招んでくれている海響く
戒名は自分で決める俱会一処

恒松叮紅

欲張つて二兎追つてゐる春の酒
幸せな兎が酔つた春の酒
幸せでいつも一緒の席にいる
竹踏んでまだ長生きをするつもり
友情の証たとう紙に包む

阿萬萬的

知つたか振り、ふつと冷たい風にあう
自己過信が突然はまる失語症
科学万能だが厄介な廃棄物
遣伝子改良だけど不安もついて来る
庭師ポツリと石にも顔があると言つ

西田柳宏子

行き届きすぎでうるさい妻である
妻や子の祈りに再起支えられ
またしても踏み迷うて亡父の道
結局は嫌い抜いてた家業継ぎ
顔一面生真面目な汗吹き出てる

高杉鬼遊

正月の酒ありがたし孫といふ
いるものも買わなくなつた消費税
黄の花の不思議黄色い蝶が来る
金木犀会うて別れの通い径
なまこ食うなまこに堅き志

板尾岳人

人間になりたくなつて下駄を履く
新春の空氣にふれて道歩く
おめでとう妻も私も舟を漕ぐ
新春や虎に追われてうさぎ跳び
十八年振りに夫婦で山の峰

八木千代

年々の懐い 曆も匂うよう
曆いちまい鱗もひとつめくる春
雪の下には情けの好きな春の草
軽ければ軽いほどよし春ごろも
春寒や 机は母の避難場所

河内天笑

脚長い娘の団体とすれ違ひ
先生が測ると血圧が上がリ
知らん間に跳ね上がったる薬代
迷惑がかららないから片思い
父ちゃんの内緒守つた事がない

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、く、ろ

(96)

橘高薫風

昭和十一年の新春特集号の巻頭には、路郎先生の

寝転ぶ癖の僕に海上雲遠し

の一句が据えられ、川柳雑誌社屋上に於ける先生の近影が別の一頁に向き合つて掲載されている。この年の宮中の新春御歌会始めでの勅題が「海上雲遠」で、昭和天皇は

紀の国のしほのみさきにたちよりて

沖にたなひく雲を見るかなと詠じられてゐる。

エッセイは石崎柳石の「枕草子と川柳味」、平安朝女流作家の清紫二女の比較や清女の一般論はさし置き、本論のみ紹介する。

春は曙、やうやく白くなり行く山きは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜、月の頃は更なり。闇もなほ螢とびちがひたる。雨などの降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山の端いと近くなりたるに、鳥のねとこへ行くとして、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて、雁などのつらねたるがいとちひさく

見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、いとあはれなり。

冬は朝。雪の降りたるは言ふべきにもあらず。霜などのいと白き、又さらでもいと寒き。火など急ぎおこして、炭もて渡るもいとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもて行けば、炭櫃火桶の火も白き灰がちになりぬるはわろし。

全文を通読する時、何という歯切れのよい無駄のない文であろう。何という自然観照の確実なる把握だろう。すっぱりと切込んでくる冒頭の句、――春は曙、夏は夜、秋は夕暮、冬は朝――川柳は、寸鉄詩と謂われる。その懐に跳込んで肉をえぐる程の鋭利さと、これは又一脈通するものがある。金子元臣氏曰く、長歌は大薙刀、短歌は太刀、俳句は九寸五分、川柳は剃刀と。大きいものよりは小さいもの、巧緻精密さを喜ぶ日本人が、又敏捷、淡泊を好んだ江戸っ児が、短い詩型十七文字を生んで、その中に人事人情社会の観察をこめて詠じた川柳が生れるのも、遠く溯ればその淵源

は、時代の子としての清女の一面に求められはしないか。小さい精巧なるものを愛するのは、わけて女性には顕著である。この一章の中でその現れを拾い上げると、「すこし、細く、螢、三つ四つ二つ、ちいさく、虫」等が挙げられる。

全文の表現を貫く單明さは、複雑を殺して多くを言うまい、言うまいとして終に精選の魂の篩を通して後表現された、所謂金玉の文字なのである。そこに一語一句が、味わえは味わう程、広く深い匂いがひそみ、余韻余情の響が伝わって来るのだ。冬の段に於て「言うべきにもあらず」と言う辺り、言うべきに非ずして言うべく語を用いる所、清女の胸中がまた偲べるではないか。如何に言うべきか、言うべきものへの価値を探索して筆を執るところに、表現への一語千金が生まれてくる。

通読すれば全文はさらりと描かれているが、筆づかいの裡に作者の複雑な魂の動きがひそめられて居るのである。その複雑な高潮する感情の現れを、章中の「いと」語に汲み取りたい。それは七つも用いられ「さへ」が二つ。そこにも亦多く述べたい心を殺した清女の息遣いが、感情の高鳴りが窺われる。

万象観照と表現への一苦心、ここにも現代柳人の作句上深く味わうべき点がありそうだ。

同人特集

私の一句

わが生に韃靼の火と閻伽の水
 石垣の石の絆を見て飽かず
 七十路まで生き延びてきた星仰ぐ
 日本にも国歌があった金メダル
 旅はいい私もなれるお殿様
 地球儀を壊し人間何処に棲む
 お金では買えぬ九十のこの生命
 善人の仮面被ってくたびれる
 全て許して海は静かな顔をする
 目薬をさすとき爺と姥になる
 努力して出来ない事が多くなり
 点滴の雫が光る窓あかり
 夢ばかり描いて男の机上論
 平凡がしあわせと知る齢となり
 ふる里の窓辺へ母はもう居ない

豊中市	竹原市	呉市	枚方市	寝屋川市	香川県	香川県	香川県	大阪府	大阪府	尼崎市	尼崎市	羽曳野市	大阪府	香川県	岡山市	鳥取県
橘高	森井	榎田	海老池	平松	木村	工藤	井上	春城	春城	春城	酒井	津村	山田	井上	黒田	
薫風	菁居	英詩		かすみ	あきら	吟笑	白峰	武庫坊	年代	一壺	志華子	マツエ	柳五郎	くの子		



爆竹の音が聞えるエアメール
 人情の交差に欲しい川の音
 一合の米でもとげば生きる音
 老いてなおここに夢あり花言葉
 寝たきりの手鏡に浮く秋の雲
 雲掴むような話に惹き込まれ
 花道に咲かせて置こう返り花
 謝罪する念書にハンコ軽く捺す
 モナリザに相談しても返事せず
 気掛りは何にもおまへんうまい酒
 母ならばどう耐えるだろ風当り
 振り逃げという手をひよいと出し出し
 ワレモノと家族写真に書いておく
 泣きごとは止そう人生長い道
 妥協せぬ海ほろほろの石を抱く
 肩を貸すただそれだけに要る勇氣
 虎の威を借りても猫はねこである
 有縁なり九十歳も九歳も
 好きな子がいる少年の細い首

今治市	鳥取県	岡山県	松山市	岡山県	高槻市	和歌山市	和歌山市	東大阪市	米子市	鳥取県	出雲市	豊中市	箕面市	生駒市	富山県	和歌山市	高知県	
矢野	新家	小林	宮尾	荻野	川島	川上	川上	岸下	森下	小西	羽津	園山	井上	椎江	麻生	酒井	桜井	赤川
佳雲	完司	妻子	みのり	鮫虎狼	諷云児	富湖	大輪	桂子	愛論	雄々	公乃	多賀子	直次	清芳	アト	輝	千秀	菊野



あべの橋幸せに酔う影二つ
 七十になれば七十まだ若い
 予定表びっしり詰まる幸せが
 タイムトンネル抜けて戻ってきた吾が娘
 ほら貝を吹くと男の貌になる
 一抜けて二がまた抜けて春淋し
 破れたら繕う針を母は持つ
 福恵比寿枯れない笹を下さいな
 そんなことおましたかいな恥の汗
 皆の衆人生慌てすぎないか
 歟光るきのうや今日のものでない
 掌を合わす姿勢になつてゆく
 透明な硝子が好きで欲が無い
 失速のわたしを救う阿弥陀くじ
 雷を落すおやじの温い顔
 幸せは友の誘いに乗る余力
 名園の松は女がすねたよう
 たとう紙に女の夢を折りたたむ
 古い先は清くやさしく生きて行く

鳥取県	和歌山市	今治市	吹田市	岸和田市	弘前市	竹原市	米子市	松原市	海南市	大阪市	寝屋川市	加古川市	河内長野市	大阪市	鳥取県	出雲市	神戸市	藤井寺市
津	青	越	茂	芳	一	時	野	小	三	川	太	吐	植	津	乾	富	池	中
村	枝	智	見	地	戸	広	坂	池	宅	原	田	田	村	守	田	田	島	志
八重子	鉄治	一水	よ志子	狸村	ツネ	一路	なみ	しげお	保州	章久	とし子	公一	喜代	柳伸	喜与志	蘭水	善守	志洋



こいさんと呼ばれほほ染む古希の女
 何もかも知らない振りの耳でいい
 酒呑むといつも油断をしてしまう
 核ゼロでスタートしたい新世紀
 赤サンゴダイヤリングも真っ盛り
 辛口に酒豪の笑顔注ぎ応え
 予告なく来ても母なら出来る膳
 身がまえて残りの人生五十坂
 生きたいと思う未完の絵を抱いて
 正論を吐いているのに拍手なし
 幸せを頂き今日も箸をとる
 よそ行きの顔で冷たいことを言う
 チャップリンの靴に油断をしてしまう
 道遙か夫婦の歩幅一步ずつ
 背を押す風はでっかい亡父の手か
 菊脇芽咲きたかろうに摘みとられ
 鶴の一声社長と僕にある違い
 生きている喜び自分の顔撫でて
 でこぼこの人生だからよく笑う

島根県	島根県	弘前市	大阪市	八尾市	堺市	美祢市	岸和田市	高槻市	奈良市	鳥取県	枚方市	豊中市	大阪市	鳥取市	岸和田市	犬山市	大阪市	大阪市
堀	堀	小	北	大	黒	安平	寺	井	天	石	二	江	松	武	岩	早	寺	大
江	江	寺	内	内	田	次	田	上	正	谷	宮	口	尾	田	佐	川	井	塚
芳	正	花	勝	朝	真	弘	甚	照	千	美	山	明	柳	帆	ダ	盛	東	節
子	朗	峯	美	子	砂	道	一	子	梢	恵	久	光	右	雀	吉	夫	雲	子



おかしいね惚れると惚けるおんなじ字
 デコボコの道に夫婦の詩がある
 人々の笑顔が集う裏長屋
 備忘録のつもりの日記六十年
 爺さまが逝って駅裏ビルが建ち
 物差しを替えるところが疲れたら
 プライドを捨てたらただのおばさんだ
 罪のない心に曇るものはない
 目の動き一つ夫婦の合言葉
 力んでも案山子がかかし風にゆれ
 旗振りには妻にまかせて従いて行く
 富士山に笑われそうな日本人
 平穏な暮らし終章まで願う
 モンタンを慕う枯葉が今日も舞う
 こつこつと来た道だからまた歩く
 押し花の葉書が届く春の夢
 園児らは我流それでも見事な絵
 守護霊がまた一つふえ花明り
 無位無冠こんな気楽なことはない

吹田市	富山市	鳥取市	廿日市市	大阪市	貝塚市	寝屋川市	高知市	堺市	寝屋川市	八尾市	倉敷市	米子市	大阪市	香川県	仙台市	十和田市	出雲市	箕面市
石原	島	春木	林野	正本	池田	富山	川竹	柿花	坂上	宮崎	田辺	鷺見	西出	池内	川村	阿部	小白	岩津
靖巳	ひかる	圭一郎	甦光	水客	寿美子	ルイ子	松風	紀美女	高栄	シマ子	灸六	正子	楓楽	かおり	映輝	房進	房子	ようじ



迷わずにさばさば生きるマイペース
 押し入れをくまなく捜すもの思い
 鯛山笠は川柳塔の旗標
 句読点うちそこなつた世の乱れ
 いつ寝ようがいつ起きようが無職の身
 袂より手軽さ恋し糸切り歯
 神に祈り神に頼らず陽を仰ぐ
 比べたら他人の傷が浅く見え
 内緒よと聞いた話は皆が知る
 耐えにたえ励んだ過去にありがとう
 七枚の仮面を抱いてまだ女
 母の日に腕相撲する母さんパワー
 盲導犬キミは恋愛しないのか
 又ひとつ忘れて明日を生きられる
 祈らばや我が結果の花あかり
 童心と老心遊ぶ五七五
 輪の中に明るい人と暗い人
 もう苦手何にもないという白寿
 伴走の酒が応援してくれる

大阪府	和歌山市	弘前市	交野市	岡山県	芦屋市	大阪市	岸和田市	出雲市	大阪市	大阪市	八尾市	静岡県	大阪府	倉敷市	熊本市	唐津市	唐津市	大阪市
榎	堀	小	山	矢	黒	川	藪	石	鈴	中	宮	蘭	米	野	永	田	久	町
山	端	枝	川	内	田	端	野	倉	木	田	西	田	澤	田	田	口	保	田
隆	三	ふ	日	能	一	け	芙	ト	あ	弥	漠	俣	素	俊	虹	正	達	
盛	男	さ	出	恵	歩	い	佐	ヨ	い	生	杳	子	郎	子	汀	劍	子	



温かい人情が好き握り飯

甘いも酸いも変わる浮世の風車

進みたい方向はある盃舟

一本は俺の所為かも母の皺

おかめ面怒らぬようにしています

しみの手に女のいのち静かなり

線香よりタバコの煙ほしかろに

ふるさとの記憶は風化などしない

八起き目は根気でいこう杖の足

胸の宝庫に愛と言う字を入れておく

ピアノの音ときどき狂う恋なかば

相手よりでかい味方を連れてくる

さわいでも騒がなくても新世紀

自動改札抜けて道問う人もなし

初孫に会って長生き誓わされ

短いという一年の変りよう

指輪耳輪鼻輪と男進化する

ともだちと二人で春を待っている

不死鳥になりたい紙の鶴を折る

河内長野市

鳥取市

大阪市

高槻市

羽曳野市

堺市

大阪市

竹原市

大阪市

岡山市

今治市

尼崎市

豊中市

西宮市

寝屋川市

八尾市

島根県

弘前市

井上喜樹

富山檳榔樹

小林周信

傍島克治

福田満州

山本半銭

川久保睦子

古谷節夫

辻川慶子

大石あすなろ

野村京子

黒川紫香

田中正坊

亀岡哲子

菱田満秋

堀江光子

神原まさ子

榑原秀子

波多野五楽庵



切り捨てるまでに時間のかかる髪
 連翹の道かくれんぼなら出ておいで
 靴底に妻の呪文が敷いてある
 ノンポリをきめているのに流れ弾
 毎日の喧嘩も愛の証です
 鬼ごっこ京には京の童唄
 新春の野山をかける老うさぎ
 恨みの深さ埋めてくれるのは時間
 かわいい子旅に出したら帰らない
 バランスをくずしピカソの自然体
 どん底で聖書を生きる糧とする
 究極の果ては無限の空を見る
 何よりの幸せ父母の顔を知る
 極楽の真中に居る酒の席
 まなうらに亡母あざやかに生きている
 アンコールのない幕下ろすありがとう
 手鏡の袋を母の布で縫う
 動けない肩にトンボが止まってる
 お決めにやさしい嘘も添えました

和歌山市	香川県	寝屋川市	高石市	岸和田市	奈良市	大阪市	出雲市	岸和田市	堺市	八尾市	八尾市	豊中市	京都市	岸和田市	大阪市	兵庫県	米子市	倉吉市
福本	川崎	岸野	浅野	古野	宮口	清水	吉岡	加藤	神原	村上	村上	松岡	松川	原東	板山	遠山	政岡	淡路
英子	ひかり	あやめ	房子	ひで	笛生	絹子	きみえ	基文	ミツ子	剛治	久留美	杜的	さよ子	倫子	可住	日枝子	ゆり子	



年の功姑の降ろした蜘蛛の糸

青葉風独り占めする朝の杖

ピエロ百態涙を誘うのは帽子

お化粧で先送りする更年期

不況にもこころは豊か名もゆたか

卓袱台の丸さ湯豆腐困む幸

冬の旅もよし鈍行に温まる

わたくしを尊敬しない影法師

旗旗吹雪の中の男泣き(長野五輪)

曲の世に教育勅語懐かしむ

おっとりとかまえて風を読んでいる

転んでは達磨さんと睨みっこ

門衛にしては仁王の威張りすぎ

ほんとうの事を探している風だ

泣く子笑う子放っておこうかくれんぼ

目標があるから老いの目が冴える

八十路二歩登坂の息を深く吸う

早起きに力をくれる陽が昇る

すぐ齢を忘れる悪い癖がある

西宮市

大阪市

弘前市

黒石市

鳥取市

和歌山市

東大阪市

守口市

奈良市

大和高田市

西宮市

大阪市

今治市

鳥取県

鳥取県

静岡市

鳥取県

茨木市

松原市

林 はつ絵

上江 勝子

相馬 銀波

相馬 一花

小林 由多香

玉置 当代

指宿 千枝子

結城 君子

米田 恭昌

岸本 豊平次

門谷 たず子

神夏 典子

月原 宵明

土橋 螢

田村 きみ子

安本 晃授

林 露杖

井上 森生

玉置 重人

豊かさの度合い計れば霧が湧く

木の机鳥の匂いがしてならぬ

恥じらいのまなざし伏せる綿帽子

妻がまた転ばぬ先の杖となる

空き缶を拾って田植準備する

風船が手を振りながら飛んでゆき

水やらぬペンペン草の生きの良さ

吉報は手早く壺に入れておく

柔らかい嘘で包んでいく見舞

蔵のまわりに親兄弟が住んでいる

ひと言がとてもうれしい街の中

傘寿まで夢いっぱいのスケジュール

言うべきか言わざるべきかまだこの世

神の手に委ねようやく風いである

抵抗へどうにもならぬ消費税

うわさぐらいにびびり大物にはなれぬ

散歩にも小粋にハット老夫婦

熟睡は水飲むコップ決めてより
罪状もなく身の丈ほどの我が塔よ

岡山市 川端 柳子

米子市 八木 千代子

西宮市 奥田 みつ子

宇部市 平田 実男

香川県 成重 放任

八王子市 播本 充子

八尾市 内海 幸生

米子市 澤田 千春

箕面市 出口 千七子

米子市 田中 亜弥

米子市 中井 ゆき

豊中市 光井 玲子

和歌山市 榎原 公子

柳井市 弘津 柳慶

大阪市 渡部 さと美

東大阪市 安永 春

和歌山市 古久保 和子

富田林市 池森 子



さぞや苦勞したであろうな丸い石
 百万ドルの笑みオアシスに咲く芥子よ
 慰めが効いて背中を丸くする
 夾竹桃まだ爆風を覚えてる
 茅の出ない靴をはげますいわし雲
 決断を下す今宵は落着けず
 おおらかな母の手摺み数は合い
 母さんと呼んだ気がする流れ星
 柿の花ポトリポトリと自我を捨て
 キューピッド軌道はずれて泣いている
 大臣が寝言で嘘を言ってます
 バラバラでひとになる修正会
 弱虫のままの雪より白い骨
 たましいの深いところで赦し合う
 口惜しさが詫びたあとからこみあげる
 月の夜千鳥の餌になった蟹
 嘘がない澄んだ子の目を信じ込む
 想像より此の眼で見たい娘の住い
 献金の金は有っても貸し渋り

岸和田市	大阪市	大阪市	鳥取市	大阪市	羽曳野市	黒石市	弘前市	大阪市	松江市	横浜市	米子市	大阪市	大阪市	八尾市	堺市	堺市	寝屋川市	和歌山市
田	北	河	坂	西	吉	千	岡	清	安	後	茂	鶴	小	吉	志	楊	柴	池
中	野	井	田	田	川	葉	本	水	食	藤	理	田	林	村	田	井	田	永
文	久	庸	和	柳	寿	風	花	利	友	早	高	哲	トメ	一	千	二	英	正
時	子	佑	歌	宏	美	樹	匠	武	子	智	代	郎	子	風	代	南	壬	匍



聴診器まだまだ元気な音を聞く
 守備範囲に優しい嫁がいる安堵
 半分の小さい方を妻が食べ
 ほんとうの仲間握手の手が温い
 健康をたずねる賀状多くなり
 不況でもニッポン人はおとなしい
 父よりも剛父よりも柔でいる
 四半世紀過ぎても同じ眉を描く
 胸の内老いと若さのやじろべえ
 明日という知らぬ世界を頼りにす
 ご自慢の順は盆梅孫に嫁
 肝心なところを補聴器聞きもらし
 楽譜などない音楽が海にある
 土壇場になれば素手でも火を掴む
 人間を脱いで人間らしくなり
 底の無い袋に愛も夢も詰め
 沙羅の花ひっそり寺の隅に咲く
 結跏趺座進むサインを待っている
 鬼の目に涙老いが加速する

吹田市	藤井寺市	松江市	岡山県	青森県	鳥取県	鳥取県	大阪府	茨木市	鳥取県	京都市	横浜市	竹原市	岸和田市	京都市	鳥取市	鳥取市	寝屋川市	大阪市
藤村	高田	佐野木	山本	西谷	上田	西原	金井	藤井	橋本	大河	清水	小島	高須賀	都倉	岸本	岸本	北岡	鈴木
メ	美代子	みえ	玉恵	大吾	俊路	艶子	文秋	正雄	多哥由	未佐子	潮華	蘭幸	金太	求芽	孝子	宏章	波留吉	節子



回り道して私も時かせぐ

生きるとは悲しい時にする笑顔

こういう事もあると諫める天の声

目が優しきつと幸せな人なんだ

要するに国が教えた泣き寝入り

星座表あなたもきつとビルの上

台風の通過待つだけ無力な日

走って来た道の記憶がはなれない

も一つの顔を知ってる水鏡

礼儀正しい一しよびんが今日は

ゆっくりと回る時計を持ち歩く

不景気な坂だ笑って転げよう

二人して遊ぶ余生の放し飼い

きびだんご滅私奉公などせぬぞ

取り柄などちつともないがよく食べる

割り箸の割れた今日から忙しい

白昼夢ならず野面に朱雀門

有り様を言えば開いてゆく辛夷

ネクタイをはずし温和な顔となり

米子市

大阪市

和歌山市

大阪市

唐津市

和歌山市

豊中市

和歌山市

出雲市

鳥取県

相生市

八尾市

八尾市

吹田市

大和郡山市

八尾市

豊中市

西宮市

横浜市

青戸田鶴

稲本凡子

田中みね

本間満津子

仁部四郎

楠見章子

滝北博史

山口三千子

久谷まこと

土橋はるお

中塚礎石

高杉鬼遊

高杉千歩

山本希久子

坊農柳弘

長谷川春蘭

安藤寿美子

牧淵富喜子

菊地政勝



物忘れしても地球は自転する
 流れ星おちゆく先に恋があり
 正論を大人になれと曲げられる
 運がいいのか青空になってきた
 千円になつたらタバコやめてやる
 恋人がたくさんいます赤ワイン
 大文字亡夫が好きな位置にいる
 十五夜に一族達者で生きてます
 人間を少しばかり撮るさくら
 限らない欲の渦から逃げられぬ
 正直なすがたで息切れが続く
 にんげんと歩める杖を連れている
 生きていくために煩惱小出しする
 名曲にこころ養う深いす
 棟梁は古刹みあげて動かない
 実行力あるハンカチだ真っ白い
 上品に飲んでおります初対面
 肉野菜魚も好きで元気です
 よろこぶと悪人たちも笑顔よし

堺市	堺市	西宮市	尼崎市	宝塚市	西宮市	川西市	鳥取県	鳥取県	鳥取県	富山県	八尾市	京都市	堺市	羽曳野市	松江市	尼崎市	大阪市	出雲市
河内	河内	西宮	長浜	嵯峨根	山本	氏林	中原	中原	中原	増田	高橋	山海	板尾	森松	恒松	住谷	奥田	竹治
天笑	月子	いわゑ	澄子	保子	義子	洋敏	颯人	みさ子	汲香	紗弓	夕花	友熙	岳人	まつお	町紅	石舟	良子	ちかし

三浦秋無草

東野大八

平成元年8月16日、番傘本社優待同人であり、愛媛県川柳連盟の理事でもいられた、三浦秋無草(本名成章)が亡くなられた。享年84歳、病名は心不全。入院九日間中も、担当されていた朝日新聞の伊予柳壇に心を寄せられて

「投稿者の皆様へ、二十九年間ありがとうございました。心から感謝しております。末長く川柳をお楽しみ下さい。秋無草」との死を予知せられた言葉がご家族を通して最後の選句と共に発表されました。

氏は京都同志社大学在学中の若き頃から、川柳に親しまれ京都番傘に籍をおかれ、一時番傘川柳本社で編集にも当られました。(中略)昭和62年の番傘中四国ブロック大会において唯一人表彰を受けられたものの、当日休

調を崩され欠席、さぞ御無念のこととお察ししたことでした。(番傘同人47年在籍)

それより以前、全四国松山大会を二回企画運営され、中央から近畿はじめ多数番傘会員が参加、氏の最も晴舞台でありました。

(中略)

明治生れを代表する一徹なご気性、ことばの上の上手下手もなく世間へのへつらいも知らず「わが道を行く」を地で行かれました。

氏の雅号の秋無草は「あきないぞう」からもじって付けられたと聞いておりますが、本当に川柳を一生を通じ愛し、死の床からも頭の中は選句でいっぱいという純粋さでした。

ご遺族は奥様と二男二女のこの上もない生涯であり、もしその碑文を書くとしたら

「家族を愛し、川柳を愛し世渡り下手な無

垢な男、ここに眠る」以外にありません。

目覚れば定職のない健やかさ。秋無草

法名・常照院釈成章法師一合掌。あ、三

浦秋無草さん。佐伯みどり」

筆者が一海外引揚者の傷痍軍人として、郷里の伊予大洲市の水郷川柳社中の連中と、引揚後松山市における県下川柳大会(昭和23年)に戦後初めての川柳句会に出席した折

引揚げの眼に花だけが美しい。大八

の拙句を天位に抜いてくれた選者の前田伍健師の傍らから立ち上って、わざわざ末座の筆者のところへ近より

「最高位、おめでとー!」

と隻手の掌を、両こぶしてひしと握って貰ったのが、他ならぬこの秋無草という主催者の一人であるエライさまだった。このことから、敗戦の虚無的心境にある当方を、再び川柳の道へ引戻してくれた。その唯一の柳人が伍健師であり、秋無草というこの老柳人だったのである。

以来、幾度かの川柳大会でこの御仁と顔を合わせると何がなし世間話をするようになったのだが、その話の中でこの人の職業は、松山高校の英語教師である事と悟った。

「何さま、米英撃ちて止まぬの相手の言葉が敵性語で、野球まで、ストライク、や、ポ

「ル」の用語が禁止された直後でしょう。やりにくいこと甚だしくて、しかも、そんな英語教師でめしを食わんならんというのは、まさに川柳味ですよ。明治38年4月生れの話だ」といつて苦笑された面ざしは今も忘れぬ。

「何分、幼少から生家が恵まれた環境なもので、勝手気ままに育てられて、それで正直なわがまま者に育った話は、せめて川柳でもやりにやツジツマが合わんのです」と申され、川柳は学生時分に眼にした柳多留への関心が昂じて、どうやら川柳家になっちゃまった、というこの人の苦笑まじりの一言まで昨日のように覚えてる。

この人の一番好きな処世訓No.1の愛誦句は

考えを直せばフツと出る笑い 伍健

という伍健作品で、当方も大陸引揚者の無為放心の最中として、思わず同感です、伍健先生のこの句は、わが生活の明日への指針です、と大げさなことを口にして、コックリと大きく同感の意を表した。

愛媛県川柳文化連盟が誕生したのは、筆者が感激の引揚第一歩の川柳大会当日の、矢野赫堂の緊急動議からである。それは昭和21年7月の事であった。

かくて前田伍健を会長に、この県下各吟社十六社加盟の強力な川柳団体が生れたわけだ

が、時に昭和22年1月であった。

だが昭和35年前田伍健会長の急逝によって伍健提唱の川柳の真情美をモットーに、当連盟は仲川たけし会長を中心に再編成の余儀なきに至り、昭和37年7月愛媛川柳連盟は再スタートを切った。この時の加盟吟社は26社に達していた。その母体となったのは川柳まつやま吟社(仲川たけし会長)で昭和25年6月『八幡船』と『川柳伊予』を吸収して成ったもので、特に『川柳伊予』は、戦時中一貫して松山川柳界のリーダーをした時に秋無草は当社の顧問格で活躍した。

再編の連盟会長に推された仲川たけしは、(松山市議、のちに県議)戦後の再建松山市のため頑張り、のちには参議院議員で重きをなし、伍健亡きあとの愛媛柳界の普及と向上に多大の貢献をなした。

それは昭和30年頃から急速に新聞・ラジオ・テレビにマスコミの川柳指向が昂じ、各新聞も競って柳壇を設け、川柳の上昇気流に大いに貢献した。

この頃の秋無草は、定型主義者で番傘の界下切つてのリーダー森紫苑荘とのコンビで朝日新聞柳壇で川柳と柳話で活躍した。

「川柳をとかく文学化しようとしてこじつけの柳論をふり回しているのは、柳多留以来

の伝統たる口語による庶民性を否定するものだ。川柳とは省略うがちの文芸であつて、やがては俳句以上の資質を發揮するだろう」と俳都松山のムードに敢然と抗していたのはリッパなものであつた。

「眉青き十代も末のころ、国文学で柳多留の軽妙な庶民文芸に憑かれていったが、こんな戦争前後の、流転興亡の世相をうたいぬくのは川柳だ。わが生涯の生きるシルシのため死ぬまで川柳道で頑張る」

このため、川柳に「あきないぞう」と秋無草と柳号をつけたんだ、と朴とつな人柄だけにそう筆者に会つたばに、シンの強い川柳尊者の地金をヒレキして倦まなかつた。今更ながら古い柳友佐伯みどりさんの番傘の悼文に感無量たる筆者である。以下この人の句の記憶の作品を並べておく。

賽銭の景気熊手でかき集め

留守でない証提女が咳をする

離すまい離れまい手へ春の風

すみませんと美しい日本語

今年また訪ねた句碑へ蟬しぐれ

良い妻になれよと父の声が追い

休まずに来た児をほめてやる遅刻

美しい対話で朝の庭を掃き

▼次号は「葵 徳三」

誹風柳多留二四篇研究

1

小栗清吾・橋本秀信
高橋啓之・粕谷長生
山田昭夫・伊吹和男
大野秀二

清 博美・佐藤 要人

現代川柳作家の皆さんが作られる川柳は、

独詠吟即ち一句立ての句ですが、その歴史をたどれば、もともとは前句付の付句が前句を離れて独立したものと云えます。

今回、掲載させていただく「誹風柳多留二四篇」は、選者柄井川柳によって行われた前句付万句合興行の入選句（即ち付句）を抜粋した最後の句集です。

そして、この後に刊行された二五篇（寛政六年一七九四）から「川柳」はいよいよ独詠吟の道を歩み始める訳です。そういった意味からも、この二四篇は興味ある一冊でもあるわけです。

今回もまた、暫くの間お付き合い下さい。

1 座ぞうよりくどく世界をかけめぐり 狐声

小栗 「文銭」（大仏銭）の句。文銭は寛文八年から発行された寛永通宝銭の異称（「日国」）。同辞書引用の『貨幣秘録』に「寛文三年辛丑、京都方広寺の銅仏を毀ちて新銭を鑄る。裏に文字を記す。世に是を文銭と云」とある由。また、『駿弟雑話』に「寛文の比かとよ、松平故伊豆守信綱執政の時、千年以来金仙を尊て、かく成たる風俗の後に、出て、京の大仏を鑄て銭とし、天下を利益せられしこそ、先にも跡にもきかざることなれ。」とある。事実かどうかは否定的な記述もある由だが（『川柳江戸貨幣文化』）、この話を題材にした句がいくつもあり、主題句もその一

つである。

句意は、方広寺の大仏様は、座像としてじつと座っているよりは、銭に成ったことでその功德が世界を駆け巡った、というもの、銭↓お足↓駆け巡るという連想の洒落になっていることはいうまでもない。

かけめぐるものに座ぞうへはいなをされ

天二松2

大仏のおあし日本中歩行

八九29

橋本 賛。なお蛇足ながら、この場合の世界は、現代の WORLD の意味とニュアンスが違い、世の中、世間という意味。

鑄銭については『武江年表』寛文三年癸卯（礎の辛丑は誤記ならん）の項に「今年より天和三年に至って亀戸村に銭を鑄さしめらる（平安方広寺の銅仏を毀ちて鑄る所を云ふ）」とある。

清 賛。橋本氏ご指摘の通り、孫引きには常にこうした危険が伴う。

佐藤 賛

〔再記〕

小栗 橋本兄ご指摘多謝、但しこれは「日国」の誤記なのか『貨幣秘録』の著者の誤記なるか確認の要あり。因みに『日本史年表』（日本歴史大辞典編集委員会編・河出書房新社）

には、寛文二年壬寅三月の項にみえる。

橋本 再度調査。『近世生活史年表』（遠藤元男著・雄山閣）によると、寛文二年壬寅三月の項にあり。また『都名所図会』の方広寺の項にも、「寛文二年、本尊銅仏を改めて木像とし給ふ」とあるので、寛文二年壬寅が正しいのかもしれない。『徳川実記』等に当たってみなければ正確なことはいえないが。

2 大坂は座頭に用の無ところ

笑艸

小栗 三都として、江戸及び京と並び賞される大坂であるが、こと座頭に関する限り用のない所だ、という意味。なぜならば、座頭（盲人）の最大の願いは検校となつて紫衣を着ることであるが、京都は検校の位を授けられる所であるし、江戸は江戸紫で著名であつてそれぞれ縁があるのに、大坂は何にも関係ないのだから。

江戸紫の位を京でそめて出し

四九三

紫を着るに大坂か、わらず

四〇六

清・佐藤 贊。

3 七去の外にもふ一ツまつかをか

如雀

小栗 七去は、昔、中国で妻を離婚するため

の七つの条件。舅・姑に仕えないこと、子がないこと、淫乱であること、嫉妬深いこと、悪疾のあること、多言であること、盜癖のあることの七つをいう。（『日国』）

主題句は、この七去の外にもう一つ、松ヶ岡東慶寺へ逃げ込むことも離婚の条件になるというまで。

あま逆さまな事なれと縁を切 二四二四

去り状が飛脚でと、くまつか岡宝十一札

粕谷 贊。「七去」の出典は『大載禮』本入篇です。

清・佐藤 贊。

4 舟ばたを鞍くらにうとふもみちかり

笑艸

小栗 真間の紅葉見物。

同じ紅葉狩りでも、吉原や品川の遊廓へ繰り込もうという算段の正燈寺や海晏寺と違って、真間（弘法寺）はひたすら真面目に見物するだけ、というのが川柳の約束。従つて、道中の舟の中でも、舟端を鼓代わりに叩いて謡をやりながら行くという野暮ぶりなのである。

ま、のみみちハ中川の火がくろつ 二〇三三
とあるように、小名木川あたりから舟で行く光景を借りて作つた句であらう。

真間の連レちと謡てもつたはずや 傍五五
かつしかのもミちへ行くハうたひぐミ

安六梅 4

橋本 贊。謡に関連して当然『紅葉狩』を踏んでいる。弘法寺（現在市川市）は江戸川べりの小高い丘にあるが、当時経路としては、小網町の行徳河岸から舟に乗り、小名木川から行徳に着き、そこから徒歩で北上した。

清・佐藤 贊。

5 つる龜をうつて女良にかいあきる 和国

小栗 売るは、他にかこつける。別の目的に利用する（『江戸語の辞典』）。

句意は、鎌倉と江戸島へ参拜に行つて来ると言つて家を出て、その実、女郎屋に居続けて飽きるほど遊んだ、というのであらう。場所は一応品川と特定してよいと思つ。

江戸島へ行って来るのに三日かかることになつているから、鎌倉もしつかり押んでくることにすれば、さぞや買ひ飽きるほどになるにちがいない。

つるかめをむす子四五日うりに出る

天五仁 2

清・佐藤 贊。

秀句鑑賞

同人吟 岩佐ダン吉

—12月号から

私の川柳観「二つ」

「川柳って何やろなあ」、柳歴十年の私ですが、「こんな句は嫌だ」と思う世界が二つあります。一つは皇室を特別視する川柳です。国民はみんな平等だと思います。憲法も川柳も主権は国民、この視点が大切ではないでしょうか。

もう一つは「……永田町……」のように国会や政治(家)の一般的な風刺や批判です。たしかに政党助成金をマンションや買収の資金に使う、政治の腐敗を怒る気持には同感します。でもこんな時だからこそ政治に「絶望を説く」のではなく、国民主人公をめざす流れを川柳を通じて表現したいと思うのです。

まっすぐな道で疲れがとつと出る

森川 まさお

ひと筋の道を歩くにこしたことはないでしょうが、この道は肩がこり疲れるのです。

どつと出る、に共感と不器用な生き方しかできぬ自分への笑いと諦めをみました。

休耕田いま仕返しを練っている

牛尾 緑良

日本人のうち、七千万人の食料は外国に頼っています。農民の汗と太陽の恵みを笑う減反という愚策。災害、飢餓……休耕田の仕返しはきつと恐ろしいことになるでしょう。

長銀と防衛庁で今日も暮れ

岩津 よつじ

サラ金を使つての暴利、土地ころがしにマネーゲームの果ての銀行、密室での武器購入をいいことに収賄や天下り、いずれも裏では企業献金……心あつたまる話題で一日が終つてほしいものです。

節くれた指から過去の苦が洩れる

山本玉恵

「人間の尊厳を返してほしい」従軍慰安婦と呼ばれた女性の慟哭の姿を思い起こしました。節くれた指から洩れる悲惨な過去は今も続く——歴史を偽る者は同じ誤ちを……。

ピリもよし他人の生きざまよく分かる

石原靖巳

納得。マラソンを走る私には「その通り」。倒れぬ為ののみ足を出す、膝をつき喘ぐ走友。レースのピリグループの惨状にはランナーの生きざま、人生観が表れています。

言う言葉これだけしかないありがとう

大橋 政良

ありがと、五文字に秘められているドラマは何でしょう。失意の中の慰めか、援助、かけがえない友人。でも「ありがと」と率直に言えるあなたも素晴らしい。

お辞儀しているのがわかる電話口

高瀬 霜石

「電話で頭を下げて、阿呆かいなお母さん」とよく言いました。テレビ電話でない以上はその通りですが、わかるのです。あなたの息遣いや鼓動が相手にはきつと。

肩の力ぬいて風向きたしかめる

安本晃授

がむしやらに自論を展開していたのですが、友のアドバイスか、ふつと肩の力をぬいて風向きを。さわやかな句だと思えます。

百歳をはみ出す皺にただ見とれ

舟渡 杏花

蛇皮線の快いリズムにカチャシーを踊つてくれた沿道のばあちゃん、じいちゃん。

深い皺は苛酷な沖縄戦を生きのび今また基地の町に耐えている哀しみと強さでしょうか。NANAマラソンで会った人たちです。

物差しも時にのびたりちぢんだり

山口 三千子

ジス（日本工業規格）番号の入った物差しも母さんの手にかかると「のびたりちぢんだり」するようです。門限か、お手伝いの約束か、楽しい句に会いました。

肩書を抜いた名刺をくれますか

三宅 保州

寂しいのか、心許ないのか、ずらり肩書の並んだ名刺。大丈夫です、あなたの今の生き方で私は評価します。ほのぼのとした句。

なにもせぬ日が有つても良いのではない

本間 満津子

その通り、と申したいのですが貧乏性なのか辛い。でも「……あつても良い……」に聞き直りと人間の真の豊かさをみた思いです。

前向きになるとわたしは血が躍る

稲本 凡子

発想の転換があつたのでしようか。プラス思考に切替えたら眠り凍っていた「血が躍る」ことに、こうなればしめたものです。

リズム感のある句でこちらまで元気をもらいました。

菊人形菊の吐息が洩れてくる

辻川 慶子

むせるような清々しい香り、豊かな色彩で匂い立つ菊人形には一抹の憐れさを感じます。「吐息が洩れる」一ふと「菊作り咲き揃う日は陰の人」（雉子郎『吉川英治』）の句を思いました。吐息には根巻きされた菊の株をひとつずつ差し込んでいく菊師の気の遠くなるような作業、祈りもこめられているのではないのでしょうか。

時計止めひたすら母の足さする

志田 千代

老人の看護は社会問題となつているのに、ひたすら家族の献身のみに。「時計止め」には一日でも長く生きてほしい母、時間に追われている私、せめてこの一瞬は時計よ、そんな思いがこめられていて心を打ちました。

スーパ一の裏で老舗が肩で息

田中 文時

地域のくらしを守ってきた商店街・老舗も大スーパ一の乱入で「肩で息」。そのスーパ一も儲からないとみるとさっさと退散、シャッター通りの異名の商店街が残ったのです。

〇Lの電車は動く化粧室

長谷川 呂万

やおら取り出したマスカラー、口紅を器用に使う〇Lは朝の風景。わが世界にひきこもつてうっとり作業を見ていたら「朝寝坊やなくてファッションやなあ」と思いました。

僕だけはビール飲みたいコーヒード

海老池 洋

喫茶店に入るやいなや「コーヒーでええなあ」と仕切る人がいます。「あ、ビールの方がと思うのですが大勢に従って」うん、こんな時のコーヒーは思い切り苦いのです。

居眠りが上手に駅を降りてゆく

堀江 光子

「この人どこで降りるんやろう」ぐっすり寝こんでいます。でも「次は〇〇駅」でさつと立つ、ベテランさんとお見受けしました。

先輩 ↔ 後輩 (2)

川柳界にはいろいろな意味での先輩・後輩があるが、その交流・思い出・句の感想などを誌上で語り合っていた。

後輩は

薫風主幹

菱田満秋

川柳界での先輩は小浜牧人さんであり後輩は懼れ多いことだが橋高薫風さんと言わせてもらっています。

結核で入院した西宮市の明和病院で川柳を勧めてくれたのが牧人さんであり、長い闘病生活の後お互いにぶらぶらしていたので、いつも連れだって句会荒しをしていたのが薫風さんでした。後輩といっても病院では私が転院した後に入院されて青蛙川柳会に入られたよって、三十年五月に刊行された句集「第二の詩塔」で橋高薫という上手い新人が居るなと思ったのが薫風さんを知った初めです。金魚の糞の如くと言いますが、金魚は勿論薫風さんで私は糞として随いて回ったもので

した。川柳に手を染めたのは確かに私の方が早かったが、薫風さんは年上であり全てに積極的に動きお膳立てをして私を誘ってくれました。夕刻からの句会へ出席した夜は堂島の「立花屋」で反省会と称して麻雀になるのが普通で、私には薫風宅でもある「立花屋」は別宅みたいなものでお邪魔虫になっていました。若い頃に脚を伸した各地や時実新子さん

先輩 菱大人

橋高薫風

菱田満秋さんの生まれたのは満州の炭坑の街、撫順、私より年は二つ下だが川柳は先輩で、明和病院に療養していた仲間、そのまた先輩に小浜牧人さんがおられた。美しく産みだし壁にマリア像 小浜牧人

との研鑽会等、私一人では考えも及ばないことでした。三十年間川柳を離れていた私につかずはなれず川柳の息吹きを注いでくれ、復帰の時には真つ先に応援してくれたのも彼で、と書いてくるとどちらが先輩かわからなくなるのですが、青蛙川柳会では私が先輩であることは厳然たる事実なので、今後も先輩面をさせてもらうつもりであります。

欲がある楽に死にたい欲がある 徳永鬼美
嫂のピアノ小姑ばかり弾き 菱田満秋
先輩は皆うまかった。

男の眼すでに衣服を剥いでおり 満秋
「四コマ漫画を見ていたらこんなのが出来たよ」とすつとほけた顔で句を見せた朝もあつた。彼は明和病院から天理の病院へ移り、また今津の谷向病院へ戻った後病を克服した。横浜で結婚をして早々に子をもつけたが、「今年の正月のペランダは双児のオムツがへんぼんと翻って壮観です」と便りを寄こした。運送屋のオーナーになったり、渋谷道玄坂

のホテルのマナージャーをしたり苦勞を続けたが満洲生まれはくじけない。天理へ行けば天理で、谷向へ帰っても会をつくって川柳の種を播く。今、横浜でその経験を見事に実に結びつけている。

明和の仲間は寒々とした七福神のような七人由山陰の旅をした。昭和三十三年だったか。

河村日満さんに砂丘を案内して頂き、リーチという店での鳥取句会に出席した。米子では小西雄々さんの松露句会でお世話を掛けた。あの楽しい旅からもう四十年が経つ。

昨年一番若い吉本菁風さんがこの世を去る。呼吸不全の私に代って愛知県まで葬儀に赴いてくれた。情と熱の先輩である。



大先輩

桜井千秀

私が始めて手にした川柳塔誌は昭和五十八年七月号でした。当時三幸川柳教室内だけで兼題に挑戦していたので、井戸の中から大海

へ出たようで「とてもついて行けない」「何とか仲間潜り込みたい」と揺れ動く日々だったので。幼かった孫二人を連れて東京へ帰る娘を見送つての帰途、難波の駅に着いてすぐ目の前の方に「黒川紫香先生では」と思わず声を掛けてしまった。たった一度遠くからお見受けしただけの方に大胆であった。

「はいはい」と驚かれたようだが穏やかな声が返って来た。和歌山市へ行かれると言う先生と同じ車内に乗り合わせた幸運に酔いながら、私は一時間近くしゃべり続けた。勿論自分の持ち味が水煙抄で認められない辛さも手伝って、兼題なら自信があるのにと愚痴るのを黙ってひたすら聞き役の先生。和歌山市駅へ着き始めて「お名前は」と聞かれた。自分の名も告げずに勝手な言い分を並び立てていた訳で、それこそ消え入りたい気分でした。やがて作品を思い出されたのか「貴女の句は灰汁が強すぎる。灰汁は個性にも繋がるのだが、灰汁の強い句が十句も並ぶと」と後は語尾を濁され、改札口へ向かわれる先生を見送り加太線に乗り替える。灰汁、灰汁とは何か、この灰汁を早く解明したい。その後暫くして「きたぐち」の句報が届き、投句を奨められた。この一時間で私の正体を見抜き、アドバイスをして下さった大先輩。あの偶然

のチャンスをも今とても嬉しく思っています。

千秀さんと私

黒川紫香

随分桜井千秀さんとは親しくさせて貰っていますが、私水煙抄の選をしていた頃投句されて初めて知った。その後本社句会その他でお会いし好作家だなど思っていた或る日、ひよんなことで三幸教室の句会に招かれた。そこで千秀さんが智水庵氏の許で、故中筋三幸さんが作られた三幸教室のお世話をされている事も聞いた。

教室にお邪魔したのはその時一回きりだったが、多分新年会を兼ねての句会で後に宴会があり、盛り上がりの中で皆さんと語り合う事が出来ていい思い出の一つになった。

教室へ行つて先ず驚いたことは、若さと熱と活気をひしひしと感じた事である。後年川柳塔誌上を飾っている保州、鉄治、朱夏、桂香、和子さん等々多くの方が居られ、その人達を纏められている千秀さんの努力は大変なものと思つた。

その後、教室に行く機会もなかったが、千秀さんをはじめとする三幸の皆さんとは本社会会その他でお会いする度、近付きを深めさせていただいた。

最近千秀さんはご主人を亡くされ心身ともに落ち込まれた時でも立派に役目を果たされ、十分なお悔やみとお慰めを言えなかつた私にでも手を出せば「冷たい手ですが心は温かいですよ」と握り返される姿には感心した。その言葉通り誠実な心を持たれている方だと思つた。ともあれ千秀さんとは歳の差から言つても私が先輩であり、良き後輩だと思つた。



頼もしい若手

小林 由多香

彼と川柳を通じて付き合いを始めても二十十年を過ぎたが、今まで彼を後輩だとか思つたことはない。同じ川柳仲間の頼もしい若手という考え方であり今も変りはない。

そんな仲ではあるが、今回初めて、年齢、柳歴とも私より若いということで敢えて後輩と言わせてもらうことにした。

さてその後輩とは、現在県下で一番会員数の多い川柳塔鹿野みか月を率いる森山盛桜氏である。

昭和五十二年四月、私が担当している日本海柳壇に入選した一句。

合格の祝い晩酌やめて買ひ

この句が彼の川柳界デビュー作品であり、この一つのきっかけから、翌年開かれた第一回鳥取県川柳大会で初の対面となつた。以来彼とはよく飲むようになったが、川柳を深く語つたという記憶がない。しかし彼の川柳感はずばらしい。同じ年に第二回茗人賞佳作へ

うそだとは言えず無邪気な目に負ける

が堂々と入賞しており、この頃から並でない川柳人を感じさせていた。

そんな彼にも川柳に熱中できない事情がある。一流企業の総務部長という要職と、十年來寝たきりの母親を現役の職業人である奥さんと共に介護を続けているという。とても川柳活動のできる環境ではない。会社定年までにはまだ十年あるらしい。お母さんの再起を祈ると共に、十年先の彼の川柳に期待をした。きつとやる男である。

縁は異なもの

森山盛桜

地元紙の日本海新聞柳壇に、初めて私の句が載つたのは、昭和五十二年の四月でした。

名前が活字になるという事の壮快感と、上位に抜ける事の痛快感とが相まって、その後川柳にのめり込んで行く事になりました。

その頃は未だ、ひやかし半分で投句していましたが、その時の選者が小林由多香氏であり、勿論お会いした事など有りませんでした。

もしあの時何度か没が続いていたら、間違ひなく川柳を止めていたと思います。偶然的とは言え、川柳の道を歩んでいるのは、由多香氏のお陰と言えるでしょう。氏との初対面は翌年三月の第一回県大会での事となります。さて当時の由多香氏の句に

風向計素直に秋の風に向き

のけられたひとりへ犬がついて行き

等が有り、一方近句として

よく遊ぶ猫が今夜も戻らない

メンバーの一人一人は頼りない

午後は雨素直に傘を持って出る

等が有りますが、当時も今も一貫して明かさ・素直さに徹した作句姿勢が窺えます。

私もこの「軽み」を何とか身につけたいと努力したのですが、生来の天邪鬼気質が災いして、今ではあらぬ方向へ向いています。

「わかりやすい川柳で明るく楽しい国づくり」をモットーに邁進しておられる氏ですが、平成八年、永年の功績に対し文部大臣表彰を受けられた事を、皆さまと共に慶びたいと思います。



先輩は天国の

迷観子さん

木村 あきら

昭和六十年一月頃、薬局経営の松村迷観子さんから川柳に誘われたが、私は読むのは好きで新聞柳壇には目を通すが、作句能力がないのでお断りしておいた。その年四月頃、十名余りで川柳会発足の話が持ち上がり、再度のお誘いに入会を約し、五月に「おっぱこ川

柳会」の名称で発足した。月二回の定例会に投句を始めたが、素質がない上、二、三公職と農作業に追われ、今考えとソツとするようなお粗末な句を恥ずかしげもなく投句し続けた。もちろん、平拔と没句専門である。でも迷観子先輩は、作者のプライドを傷つけると思われたのか、決してまずい句などとは言われることはなかった。

そのまま、三、四年過ぎた頃、川柳塔社同人が会長迷観子一人では淋しいということで当時の水煙抄選者黒川紫香さんと、会計部長高杉鬼遊さん、迷観子先輩の三人の推薦で同人になった。同人ともなると余りお粗末な句ばかり出せぬと奮起して、本屋で川柳の本を買ひ漁り、迷観子さんの蔵書を次々借りて、古川柳からサラリーマン川柳まで乱読、少しばかり目が覚めたと自負している。

今にして考えると迷観子先輩は気の長い先生であつたと思う。あのまずい私の句に難くせをつけたことは一度もなかった。良き先輩に恵まれて私の今日があると感謝している。私にはそのような寛容さがないが、新人の方々には気長く成長を見守ることが肝要と思う。

賞め言葉七〇とケナシ言葉三〇が新人育成に必要な数字と思われる。天国の迷観子先輩からのアドバイスがなないのが残念である。

第19回ときせん賞作品募集

雑詠 2句(未発表句)

選者 大野風柳 橘高薫風 去来川巨城

寺尾俊平 小松原爽介

投句締切 平成11年1月末日

発表 『時の川柳』 4月号誌上

賞 ときせん賞 一名

準ときせん賞 二名 佳作七名

投句料 誌友五百円(定額小為替)

誌友外千円(発表誌呈)◎切手拝辞

投句用紙 便箋大用紙に作品2句と住所

氏名明記のこと。

投句先 〒650-0026 神戸市中央区

古湊通2-1-21 土井喜久栄宛

選句方法 無記名清記の上、選句。1句

ごとの合計点で山位10句入賞。

水煙抄

河内天笑選

綾部市 藤田芳郎

嫁がせて家から音が消えていく
神無月慶事ひとつに葬ふたつ
笑っている写真を探す義弟の死
娘は妻に妹寡婦になって秋
嗜むというのは浴びることらしい

羽曳野市 徳山みつこ

この先はもみじマークのハンドルで
七回忌いとこはとこで盛りあがり
そして今やせた絆を撫でている
子らを横一列にして教師たり
下り坂も一度結ぶ靴の紐

大阪府 奥野義夫

玉子の値ね鶏トリの悲鳴が聞こえそう
錠剤のころころ転ぶ夕食後
もう五キロやせねば着れぬ恋衣
ポケットに人をなごます飴を持つ
嬉しくてトイレの中で見る寸志

大阪府 澤田和重

ご自由にどうぞと回り寿司がくる
左遷地の地酒にシヨック癒される
上段に構えゴキブリ逃がしてる
幸せの線引き夫婦でも違う
戦中派不況に負けぬ自負を持つ

今治市 中村好恵

見終えると風がやさしい美術館
許そうときめて眠りが深くなる
大声の男で肚に他意はない
面影の似てる日傘へ立ちどまる
不老長寿の妻と思っていた不覚

今治市 野村清美

一人居の背なを柱がかいてくれ
テレホンカード天国まではつながらぬ
真っ直ぐな気性で散った竹の花
ピーマンのすっからかんに種残す
現実に引き戻される旅帰り

今治市 塩路 よしみ

デパートでばったり私着たナース

空振りの人生だけ夢がある

さわやかに朝のラッパは妻が吹く

東の間の出合いを惜しむ冬の駅

また逢おうねといともたやすく言うけれど

今治市 村上 久美子

ついでない花でトイレに生けられる

斬られ役なら主役にも負けてない

老いてまだ恍け上手の知恵もつき

生き抜いた骨にととうとう鬆がはい

塩砂糖 男も慣れる目分量

愛媛県 中居 善信

十二月第九へ何と忙しい

口軽い女に釘を打っておく

サツマイモ命繫いだ恩がある

農政の狭間で麦が育たない

雑草の強さは雨が降らずとも

高知県 百田 幸

見て聞いて頭にかいたはずなのに

国境は知らぬセイタカ泡立ち草

あれ以上太るとバイクつぶれそう

言葉にも隠し味あり噛んでみる

名は知らず良心市の顔なじみ

唐津市 樋口 輝夫

つぶやきにしては大きい姑の愚痴

喜寿傘寿回れや回れ夫婦独楽

法被干しくんち帰省子待つ爺

冷や水をうまそうに飲む老い二人

油切れしない女房の長電話

北九州市 岡田 幸生

もう余生妻のタクトもアンダンテ

快方の妻よどうだい俺の味

勲章に遠く暮らしている軍手

献立に妻は苦心の三十種

親切を貰い心が重くなる

鳥取市 福島 庸二

行楽地反対車線ガラ空きだ

トラの子を隠した場所が見つからず

真っ先に発言したら役につき

裏表無くする事のむつかしさ

そうらしいうわさは一人歩きする

鳥取市 録 沢 風 花

大海を知らぬ蛙が船出する

再開発という名で家並消えてゆく

良妻を演じた糸が緩みだす

豪邸が手品のように建っていく

残照のドラマ一幕ある予感

岡山県 国米 きくゑ

あの人のために残しておく素顔
火と水が半分ずつで和解する
褪せてきた夢でも命あるかぎり
優しさに触れて足どり軽い道
泪した分だけ温い気を配り

岡山県 土居 ひでの

エルニーニョ海に向こうは土砂降りだ
萩桔梗 地藏菩薩の笑み給う
ミサイルの恐怖に脅える世紀末
ハンデアイ一つ神が結んだ赤い糸
次世紀へ結ぶ絆のりサイクル

尼崎市 田辺 鹿太

才能はないけど負けるのは嫌い
空港の訣れは何故かすぐ乾く
飽食の裁きを受ける皮下脂肪
ケーキより駄菓子が好きという隠居
必要があるから父は居るのです

尼崎市 清水 久美子

かけもちで義理に喘いでいる佳日
飯の種だから優しくされている
嬉しくてついなないた万馬券
明日からもうしませんと午前様
刈り入れのムードメーカー稲雀

兵庫県 安達 厚

うるさいが叱ってくれる妻がいる
二人旅気ままも言えは聞いてやる
残ったかぼちゃ拾って夏終る
不作だと書き添えて出す宅急便
幸せに孫を叱って生きている

和歌山市 上地 忍

和解して前より太く結ぶ縁
昨日より一彩多い絵を描こう
身ぶるいを一つ朝食小芋汁
アカシアに娘の安否問いかける
首筋に風を感じて冬仕度

和歌山市 水田 秀男

翼あるけれど飛べない千羽鶴
恐ろしいほうに進んでいる地球
逆光で僕は悪人顔になる
くわえタバコでハンドル握る娘さん
光り物付けすぎ魅力無くしてる

和歌山県 坂東 和代

祖父の忌に思いがけない艶話
豪邸を目印にしてその隣
目の光いよいよ冴えて母卒寿
ゴキブリが出たら夫を呼びつける
配分の遺産など無く子等平和

横浜市 田中笑子

川崎市 和泉見早子

耳遠くいつもにこにこ聞いたふり
腹に虫飼ってダイエツトをしてる
偽った歳をちくちく針がさす
痛む脚持って嫌いな杖をつく
焦げてきた匂いで長電話終る

横浜市 山梨雅子

優勝のよるこび頌つ街に出る
物忘れ子供等がまず不安がり
同じ服着ても美人はよく見える
太ったと幼馴染はずばり言う
手土産に喜ばれてる庭の柚子

横浜市 長島亜希子

ヘルペスが若いつもりに釘をさす
「生きてるか」に「生きてる」と留守電にあり
草伸びた墓が言い訳聞かされる
弱くとも飲み放題は飲まされる
羽根つけて欲しくてタレントに募金

八王子市 井上京一郎

叱られて猫にんげんの顔をする
交番で教えてくれるくに訛り
五十段数え電車が来るホーム
退院の酒が旨いと踊る文字
あれをあれしてと夫婦で失語症

いい父でいるため正座崩せない
コンビニが売るおふくろの味もどき
親看ても子に看てもらえそうにない
CMのようにはうちの猫食べぬ
秋晴れに視力確かな富士望む

静岡市 大村正雄

湧水のような汚職の暴露記事
出張日しっかり締める靴の紐
リストラでしみじみ判る家族愛
七草を指折り祝う七日粥
妻に茶を汲んで静かな女正月

大阪市 中村叡子

孫連れて地下鉄ぐるり無料バス
油虫手づかみ出来るすこい嫁
多才ねと三日坊主をほめられる
カニシヤボテン冬の花火のように咲く
フルムーン四国巡礼大旅行

大阪市 立蔵信子

出合いがしらに君のやさしさ知りました
土壇場で外野にまわることにする
風船を追っていく価値あるのです
適当に親子関係築いてる
迷わない生き方なんてつまらない

大阪市 伊藤博仁

山間の墓参を終えて湯に浸り

念仏の合間の指図姑に似る

手土産の目刺しに朝夕睨まれる

よく馴染む杖には多くの傷があり

お母さんと叫びたかろう残留孤児

大阪市 中澤伽羅

不眠症消えたが呆けてきた気配

まちがいはないはずだけと辞書を引く

影ふまれ痛いやんかと言うてみる

ドシャ降りも観光バスは走ります

言い勝ってこころのしみが大きなり

大阪市 榎本日の出

慰めの言葉も皿に添えて出し

当分は逢わずにおいて気をもたす

影ふめば影もわたしを踏んづける

葉ぼたと巡り合うたび歳が増え

愛あればでかい軒も苦にならず

河内長野市 大西文次

米寿過ぎ極楽行きはフリーパス

左遷地の地酒に元氣取り戻す

言い訳を考えている終電車

リストラで情け無用の都落ち

まあまあ味の味か黙って食べている

河内長野市 印藤智子

紅葉が遅いと山の木せかされる

絵画展ヌードの絵だけ覚えてる

試着室迷った服に囲まれる

洗濯も買物もする旦那様

バスの中誰かキムチを持っている

河内長野市 水谷正子

カレンダー今年一年よろしくね

孫の恋そつと見てよか旗ふろか

へそくりが師走の風に眼をさます

結局はわたくし流で菜を漬ける

クリスマス ワインで祝い初春は酒

河内長野市 妹背尽呂久

空振りは無かったことにするゴルフ

生きること自己と闘うことばかり

戦いはもう始まっている前夜祭

逢い初めにおかしたミスが笑い草

金貸し屋やせ衰えて注射受け

富田林市 中井アキ

今日の罪化粧と共に落とさねば

哀しみにからだ縛られ秋の中

一日の仮面を外す仕舞風呂

忘れてはいませんちよつと呆けたマネ

そこそこにこすい生き方して女

富田林市 大橋 鐘造

炎を抱いて女になっていく少女
真に受けて妻は嫉妬の角を出す
嘘一つ抱いてコスモスゆれている
真つ直ぐに歩いて風に笑われる
角欠けて少し弱気の鬼瓦

藤井寺市 太田 扶美代

秋深し人恋う列の中にいる
買う方が安い菜ッ葉を植えている
母さんの気合で僕の背が伸びた
手を叩く消したいものが消えるまで
好きだけ寝ていてもいい朝がくる

羽曳野市 森 田 四三郎

保険屋に相手にされぬ歳となる
二泊三日旅じゃないぞとドック入り
くじ運の強いライバル ポックリ死
禁煙席あるが禁酒の席がない
振り向けば携帯電話話す声

岸和田市 木 村 正 剛

新世紀から定年もついでくる
六畳で不満なかった新世帯
見栄張って買ったたままの粗大ゴミ
落着けと言った自分がかつと燃え
居酒屋で女将にストレス診てもらう

堺市 和田 つつや

炬開きの準備今年は暖かい
素うどんの葱が値上がりして困る
栗ひとつ拾った柿の木の下で
ペン先が唄う恋しい文だから
難しいですか本音で生きるのは

堺市 見 本 ちや子

金木犀のさわやかな香を風がぐれ
慌ただしい一枚だけのカレンダー
崖淵に立つと俄然と湧く勇氣
いい風が吹いて明日へとつなぐ夢
言い訳は聞かない事にしておこう

東大阪市 北 村 賢 子

ときめきをいたわりに変え共白髪
誕生日に舌つたらずのオメデトウ
真剣に祈るところに打算なし
老いてなお身体自由に動く幸
人間が好き路地裏のぬくい風

生駒市 川 端 きぬ子

目の色を変えて味わう試食会
お年玉孫にいたたく歳になり
ジョーク好きこれも若さの秘訣かも
書道展ピカソ紛いの文字に会い
いい訳も長い尻尾で欠伸でる

秋田県 湊 修水

豊作も不作も困る米の里

影法師おまえも足が痛いのか

じんわりと性善説にまるめられ

作法などいらぬ三時の茶がうまい

尾張旭市 三浦 きぬ

この年齢になってようやく親が見え

出る釘を持たぬ幸せ持っている

八十歳が何だこれから青春よ

未成りを拗ねてくの字に伸びた茄子

野田市 那賀島 雅子

善人の面をはずして息をつく

ストレスの沁みたる服を壁にかけ

難解な若人言葉孫に聞き

かたむけるジョッキ二の腕白く照り

東京都 井上 つよし

東京の四季生き抜いた熱帯魚

谷川を紅葉身悶えして流れ

たこ焼きを頬張りながら踏むペダル

踏切を渡って気付く忘れ物

横浜市 生坂 サト子

ゴミの日を屋根のカラスに教えられ

元旦の一念発起もう忘れ

懇ろになって賄賂の額が増え

チャンバラといたちごっここの障子張り

横浜市 福田 由美子

回覧板目にした時は期限切れ

ゴミくずは持ち帰るよう願われる

実力がないからお守り信じてる

選手ではないが子供の運動会

横浜市 鈴江 純子

チャンネルを思いのままにひとり住む

干し柿のカーテン秋の陽に映えて

温暖化紅葉になれぬ樹の嘆き

相槌が寝息に変わる長電話

横浜市 荒井 広和

譲歩するたびに個性を削り取り

フィクションの風にさ迷う青春期

笛吹けど踊る阿呆が出ぬ不況

悪筆を個性ある字と褒めておき

横浜市 岡田 芳江

待ちすぎて待ちすぎてもう振り向かず

押入れに愛しまい込み倦怠期

追伸に一行だけのラブレター

旅カタログながめて秋にひたってる

横浜市 平達 也

気楽です言っても不自由独り者

踊らされ撫でられていた宮仕え

野性味が恋しくなって山歩き

祝杯も舐めて我慢の病み上がり

横浜市 保田 絹子

大声のあなたやっぱり耳遠い

俺よりも早く逝くなとふと真顔

観能の謡に軒紛れ込み

溪谷の岩に紅葉はしがみつ

横浜市 布山 嘉信

雀まで案山子を馬鹿にして群れる

清貧に金のなる木の鉢がある

台所からの鼻唄ほっとさせ

肝臓の呻きとどかぬ祝い酒

横浜市 山下 省子

相手にも必ずわかるダイキライ

人間でよかった猫に悪いけど

ストレスをルージユにこめて塗りたくる

外食で主婦のうっ憤晴らされる

横浜市 伊藤 ふみ

嘘々と言ひ合う仲で楽しそう

記念碑を椅子にハイキングは休み

のら猫のお通り今日もつつが無く

愛しさが年々募る道の草

横浜市 秋元 和可

鳥の口借りて木の実が旅に出る

人と手を繋いでいれば温かい

寒そうに不況へ座る招き猫

何もかもただ懐かしい歳となり

横浜市 三村 八重子

初対面ジャブも少うし入れて置く

腹時計秋の陽浴びて狂いがち

なべの中で煮えたぎってる腹の虫

児の声も演習砲もこだまする

横浜市 近藤 道子

山あいのやさしい風に触れた旅

少子化の街で老人多忙です

治癒力を信じて薬飲まずいる

よくもまあぶつかりあって生きている

横浜市 川島 良子

赴任から戻ると妻が肥りだす

膨らんだ分だけシワが消えました

スーツよりジーパン似合うフルムーン

ポックリ寺のお札が足を軽くする

横浜市 北沢 街湖

予定表医者と句会とバスツアー

用心へ腹に巻かれるパスポート

アンケートペンが鯖読む年の欄

がたついた体へネジが締らない

静岡市 増田 扶美

飲み込んだ甘さが悔いを残してる

ふんざりがついて迷ったことおかし

ポイントカード得たような五百点

交代制父の料理に兎等の笑み

唐津市 井上勝視

ジツと掌を見ている暇があるかいナ

飲めている量で余命を測つてる

獅子舞いの口から青い眼が覗く

齢などに負けてなるかと派手を着る

唐津市 宗 弘

コスモスに手入れ不要の美しさ

み心のままと不況を眺めてる

警察が暇になる日を待つている

先生の眼色が変わる曳山囃子

今治市 越智青園

百歳を目標妻が持つパワー

気がるには遊びに行けぬ門構え

親切が裏目にまわり仲たがい

千切れ雲お前と同じ核家族

松山市 山之内 八重美

赤信号見抜けなかつた子のいじめ

うっかりと受けた約束重くなる

許そうと思ふ心がまだ揺れる

サラサラとカーテン揺れる風は秋

愛媛県 黒田茂代

冗談も言えて主治医とも馴染み

護られている命だと信じ生き

リハビリの日進月歩松葉杖

病窓の景色 夏秋そして冬

愛媛県 安野案山子

大切なところであかんべしたテレカ

パチンコで負けるお金は惜しまない

人前で泣かぬ男の独り言

過労死はもう流行るまい新世紀

愛媛県 宮本末子

はやり風邪人並みもらい生きている

新世紀迎えるパワーためておく

主役にはなれぬ女でよくしゃべり

下向きに咲いて色よきお茶の花

高知県 桑名孝雄

真つ直ぐな竹が世間に溶け込めぬ

景気浮揚たつぷりやろうお年玉

アバウトで判断をするカタカナ語

飲み放題損をするよなヤワでない

鳴門市 八木芳水

使い分け出来ない一枚きりの面

野仏を惑わすように秋の蝶

はなし好きプライバシーに触れたがり

凡人に二足のわらじ重た過ぎ

京都市 高島啓子

うどんすきまだ気取つてるあいだから

心地よい疲れ次の日本疲れ

子の便りしばらくピンで止めておく

謝った男とっても好きになり

京都府 前上英一

手品師の手先がスリル売っている

自画像へせて明るい色を添え

片道切符添えて娘の婚荷出す

軍歌まだ父の脳裏で呼吸する

京都市 勝山美千代

迎春に部屋一杯に活ける花

寄せ植えて春待ち遠しプラントー

おーいお茶言う人無くて気楽すぎ

思い出の古布集めでんち縫い

京都市 高村吉之助

アルツハイマー妻にあんだこのひと

秋冷に膝のサポーター外せない

旬のもの皿はみだして盛ってあり

丹精の菊惜しげなく切ってくれ

長岡京市 山田葉子

きんもくせい匂う小道を選って行く

美しい女は誰 鏡よ答えてよ

折り返し点でおとした面ひとつ

定年がない主婦の座を降りられず

奈良県 出井澄子

地下街を花屋しるべに右に折れ

色とりどり願いは一つ千羽鶴

朱雀門 虹が雅に彩そえる

見事咲く手塩にかけたお返しに

檀原市 西本保夫

海遊館 魚のための薄暗さ

この暗さ何度も妻を見失う

矢印の通りに行けぬ人の波

なるほどと妻のコメント聞いてない

岡山市 清水金太郎

孫からの文 読みかえし読みかえし

自分よりもっと不幸な話聞く

何かあるな夫婦揃って神参り

寝たきりへ商品券より紙オムツ

倉吉市 大下智子

流行の真っ先走るコマージュル

正直な柱時計が鳴りだした

生と死のドラマを子等に見せておく

元氣だせポケットにまだ金がある

鳥取市 中村丸金

じっくりと煮詰めた愛が暖かい

花粉症とくされ縁でも春が好き

くされ縁男を泣かす熟女です

温室のだました花に騙される

鳥取市 夏目健一

虫一匹殺せぬ人も意地がある

苦労してむいたひと皮愛おしい

競うでもひがむでもなく日が昏れる

迷信と思っけていても踏ん切れぬ

鳥取市 谷岡清子

陽を浴びた真つ赤な柿のためし食い
新そばの包む香りにのどが鳴る

中流が下流になった不況風

数珠つなぎ車のライト大ばたる

鳥取市 松本つね子

子ばなれが出来ないままに母たのし

古日記わすれた過去が舞戻り

足腰に人生の秋ふと感じ

ゴキブリもにげ足弱く冬に入る

米子市 足立由美子

どの朝も洗濯機から動き出す

不況風 行動範囲を狭くする

新年を祝う仕事をひとつずつ

今年またこの夢ずっと見続けよう

米子市 小塩智加恵

五尺二寸を次つぎ孫が追い越した

習慣で輪ゴム一本捨てられぬ

嫁不足子の惚れた娘だありがとう

休み明けおくやみ欄の賑やかさ

鳥取県 山本益子

夫にも言えぬ思い出チャックする

まだまだと玉の興待つ娘は売れず

称賛を浴びてやる気は盛り上がる

泣き顔を鏡だけには見せている

鳥取県 西垣美知子

腹一杯飲んだ乳房が遊ばれる

母からのお国自慢が届く秋

やりくりが買物袋軽くする

フロントのお客の手配おかみ舞う

鳥取県 加藤公子

病床でじつと生命線を見る

青虫がせつせと菜っ葉毒味する

安楽死評議一致を馬が聞き

退院の許可証の印軽やかに

鳥取県 橋谷静江

健康を噛みしめる歯を治療する

ふれあいへ数えきれない愛もらう

同じミスくり返してる人の良さ

久々の古里知らぬ顔ばかり

鳥取県 松本聖子

点滴をぶら下げながら帰りたい

働けば心の痛み忘れられ

世はいろいろ不幸につけ込む神さまも

自家製のトマト美味いと舌が言う

鳥取県 武島ちよえ

石一つ置いて流れを変えてみる

雑談の中で掴んだヒントです

手のかかる貴方にしたのはわたしです

慰めてくれると思うから愚痴る

木次線 雀もつとつとしています

島根県 菅田 かつ子

コスモスへ羽を休めにおりた蝶

血圧計時たま狂っておどろかせ

思い出を種切れせぬほど積んでおく

島根県 福岡 博利

善人が住むのか木戸は花ざかり

靴の埃払って今朝はお寺まで

短所なら妻に聞いたが早わかり

流行は試着の鏡が知っている

宇部市 高山 清子

腹立ちも小石を蹴っただけで済み

行間に好きと匂わせ書く便り

社交ダンス老いのほのかな恋芽ばえ

夫婦でも触れてはならぬ古い傷

川西市 田中 喜俊

今日もまた郵便受けはチラシだけ

口べたがおせじ言うても信じない

健康を自慢の友も風邪をひく

お若いと皺を見ながらお世辞言う

池田市 木村 一笛

豆腐ようお前はすぐに崩れ出す

遍路坂石仏かぶる冬帽子

ドクターは電気ショックに望みかけ

つまらん人つまらん物を贈っている

好奇心奥へ奥へと行きたがる

父さんの行方不明は持病だよ

受付に筆のいじめが待っている

末席の気楽な席が性に合い

吹田市 三浦 憩

句読点のように行事が活をくれ

あんないい人が悪だと気が付かず

音符など描いてみたい上機嫌

名勝が支えてくれる露天風呂

枚方市 大昇 隆広

便利な世が消した道具のあたたかさ

要領の良さを負かした実直さ

仕事探し小さい秋はその後で

信号ものんびり変わる里の道

枚方市 二宮 紫鳳

ふるりの包みは母の香りして

ジャジャ馬も愛のたずなで夫好み

洛北の紅葉たどるペアシューズ

不況慣れして節約が板につき

大阪市 一本 勇太

ふところの浅い男は匂わない

追伸に軽いヨイシヨを忘れない

老年をまたそのかす火吹竹

被写体として体温のない裸体

大阪市 榎本舞夢

旅立ちに雨ついて来る雨女
羅漢様影長くなり秋深し

間違いと気付いたままに金婚式
爪研いで新しい恋期待する

大阪市 三浦千津子

電話でもしると絆を手練り寄せ
算盤をはじき手頃な橋渡る

横槍に耐える強かにかろやかに
勇退の美学男のロマン捨て

大阪市 小泉ひさ乃

カラオケになると元気になるマイク
便りなく電話も鳴らず雨続く

雨続き好きな読書も疲れきり
松茸の香り忘れて秋終る

堺市 梶本哲平

毒消しやいらんかエそうだあの頃メチル飲み
スーダラでいける政治屋やめられぬ

この頃の親は子どものストーカー
余生という言葉は好かんオマケじみ

堺市 村上靖雄

定年後スーツ着る日の新鮮さ
貸しもせず低金利とは画餅なり

女社長化粧の下に苦悩見え
年毎に病名増える人間ドック

八尾市 鷺見章

研修のナースとしばし語り合う
リハビリのない休日をもてあまし

しみじみと一人ぼっちの人生よ
目をとじて楽しい事を思い出す

八尾市 平川幸枝

病床の小さな音に安堵する
貴重品逃げたくさせるスニーカー

シャンペンに恋の記憶をとり戻す
介護するこまごま一日使い切る

八尾市 山本宏

さわやかな男木綿の肌ざわり
まないたに母の心がはずむ音

頭の中空っぽにする酒をのむ
もったいないその一言でまたふとる

八尾市 田中トシエ

独り身はママゴトのよう屠蘇祝う
商戦のバーゲンをして蔵掃除

母の背の丸みに合わせ毛糸編む
母さんの木綿針には錆がない

八尾市 興田明

つるべ落とすのようにリストラ増えつづけ
冬くれば冬がたのしい鍋料理

晩秋初冬脱いだりきたり忙しい
木枯らしの吹けば吹いたでうまい酒

藤井寺市 楠 昭子

半分は動ける身体よろこぼう

何も出来ぬが泣きにおいでと友は言う

きびしさとやさしさ抱いている海よ

小さな喜びそれだけでよし生きている

藤井寺市 岸 本 寿 代

信号を待たずに渡る大阪人

かすみ草真紅のばらを引き立てる

リフォームで母の着物も陽の目みる

北風に帽子コロコロ冬の旅

羽曳野市 川 田 晋

熱燭を一本追加さす肴

行詰まるまでは素通りした神社

気にしつつ訊けない彼の咳つづく

リストラの候補気付かず付け届け

羽曳野市 西 村 りつえ

新世紀へオーバーホールしたい僕

はしごかけ手摺みしたい青い鳥

とび切りのジョークわからぬ血のめぐり

羽曳野市 安芸田 泰 子

この辺り風の棲家が芒原

ひもじかった昔が匂うふかし芋

ぬくもりを貰って夢が孵化をする

謝っているけど顔が怒ってる

羽曳野市 川 口 信 子

カラオケで音痴一番うけている

言い過ぎてこだわりのこる朝の膳

色々な賀状うれしや読みあきぬ

一呼吸おいて明るい返事する

大阪狭山市 伊 藤 尚 子

コスモスのおもいおもいのポーズして

病院を出て落日のせわしなく

イヤリングつけたら化粧終りです

飛び立ってハワイで同じ月を見る

富田林市 山 原 昭 水

隣は有馬 向い白浜うち銭湯

断酒会誘われたけど断わった

病んでから健康百科読んでいる

好きな女優CMしてる酒を呑む

岸和田市 徳 庄 美智子

受賞した菊が威張った顔してる

花の香のルーツは神の吐息かも

初冷えにへやーマニキュアする紅葉

淀川さんさよなら さよなら さよなら さよなら

岸和田市 宮 野 みつ江

南座のまねきが空に見得を切る

とんぼりはグリコが走りカニ踊る

リセットボタン押して人生再挑戦
パソコンをゲームみたいに打つ園児

岸和田市 不破 仁 緑

脇役が炎えると主役従いてくる
神からの呼び出し状に逆らえぬ

取って食う奴は居らんと亡父の声
寝たきりで居ても采配だけは振り

貝塚市 吉道 時子

苦手な人も挨拶だけはしています
昔話くり返す母日向ぼこ

これ以上アクセル踏めば迷い道
それ以上何も言うなと肩抱かれ

河内長野市 木太久 正一

気づかずに結婚記念日すぎていき
忘れてもよいこと妻はよく覚え

二人目を生んだ娘をほめてやる
癌病みし姉への手紙さりげなく

河内長野市 柏本 靖子

テレビから学ぶお洒落なせち料理
悪友の助言に何時も救われる

贅沢を知らずに母は老い給う
一年の計は明るい彩に塗る

三田市 北野 哲男

相続税児孫は美田売り払い
釣鐘は要りませんなど和尚言

神仏を私物化してる罰あたり
半眼の仏の返事微笑のみ

兵庫県 円 増 純子

齢よりも若く見られたうれしい日

ひしめいて出口あるのに出られない

具沢山味噌汁長寿の泉かも

念入りが過ぎ嫌われる羽目になり

兵庫県 倉 垣 惠美

とよ子さん野菊に惹かれ逝き給う(中野とよ子さんを偲ぶ)

辛かったでしょうに何もしてあげず

宇宙までゆく世に友は救われず

会者定離 舞い昇りゆく秋桜

宝塚市 飯 西 ミサヲ

ときどきは自分を褒めておだてとく

ひとりでは淋しすぎます鬼も内

日誌帳何もない日は花まるに

遺伝かな孫が音痴と言う便り

西宮市 長谷川 淳

睦言を言わぬ家内と五十年

いつの間にか消えたか淀の濡標(みおつくし)

花束を貰い八十路を噛みしめる

生前に貰えば賞も生きてくる

尼崎市 森 安 夢之助

空缶がごろごろ寒い年の暮れ

飽食のカラスは森へ帰らない

三面鏡私に魅力あるかしら

風のないくらしに垢がたまります

尼崎市 野瀬 昌子

声さきぬ日がつづきます流れ雲
グルメ自慢家では料理作らない

送金もこれで終りと妻笑顔

間違い電話だまって聞いてみる事に

尼崎市 尾宮 弘治

乗るまでは嫌いであった車椅子

ヘルメットの社名が名刺二度の職

深夜まで待って独りでとる夕餉

病む友に声を荒げて嘘ひとつ

尼崎市 軸丸 勝巳

幸せと元気が集う同期会

子持鮎二匹も食べる極悪人

山頂に立てばまた来い霧の中

遅すぎた孤児の悲しい日本唄

和歌山市 上地 登美代

どんなことあろうと二人縄電車

病んでから生きる炎がなお燃える

発芽して間引きされるも運不運

疲れたのか鬼は山から下りてゆく

和歌山市 森口 美羽

沈黙を守れぬ舌で憎らしい

子に見せる背中に意地を張りすぎる

流されぬように重りはつけてある

人間の脆さだんごになりたがる

和歌山市 福重 美子

住宅は山に小鳥は街に棲み

診察券出して朝食たべてくる

会社一すじ倒産すれば首も飛ぶ

廃校舎 母校で老人趣味の会

和歌山市 木村 親路

大いなる喜劇は政治かも知れぬ

とぼとぼと歩く余生にしたくない

K点をどどんと越えてゆく不況

ポケモンの名にも詳しい小児科医

和歌山県 中後 清史

どさり着く賀状うれしいプレゼント

政治では適わぬからの神頼み

香水が鼻をくすぐる初詣で

心配が安堵に変わりへたり込む

和歌山県 杉山 精子

掌の錠剤今日をつないでる

一行詩の中の私にある翼

蛇の目傘人を恋しくさせる音

人格を問われる脱いでからの靴

和歌山県 中村 君枝

物怖じをしない小さな太っ腹

娘の前でいい子ぶってのお母さん

たしかな目父は太めの母が好き

国宝も風の猛威にただ啞然

札幌市 三浦 強 一

ミサイルの好きな元首の玩具箱
子のために美田残さぬ思い遣り
大器晩成よく食べよく眠る

新潟県 高野 不二

一病を持って元気に酒煙草
弁護士の言い分にまで腹が立ち
栄養指導金のかからぬ事ばかり

千葉県 大川 晩翠

空き缶のポイ捨て銜え犬散歩
中高年歩け歩けを生きがいに
コンビニも流行病に店じまい

日立市 加藤 権悟

翼いま国境は無い北の使者
鈴なりのさし木に茄子の高わらい
開戦の師走に風の鎮魂歌

東京都 吉田 土風

愛嬌が余りいいので乗せられる
覚えある借用証を突出され
子の奢り親子仲好く酒を酌む

横浜市 小野 句多留

急ぎ足自動速度にじらされる
妻君の下着取りこむ秋の夕
福袋買いまた増える不要品

横浜市 金森 徳三

遅れ馳せの台風続く義理堅さ
あちこちでこの国叱咤する噴火
充電の旅に食い込む荷の重さ

横浜市 豊田 羊子

詰め放題溢れた栗がアカンペー
社会派をおんなに変えた男の眼
宙に舞う屑に我が身を重ねる

静岡市 中西 雅

一周忌過ぎねばピアノ音が出ぬ
集まって何を知らずか鳴くからず
極楽に行きたい今を点かせぐ

滋賀県 中宗 明

色っぽくなつたわが娘に目を見張り
目立ちたくモヒカン茶髪ピアスする
しきたりに押しつぶされる新企画

倉敷市 森本文子

法事済み祭も済んでまた一人
農出来る元気幸せとも思い
カブに乗る自分を古希と思われぬ

倉敷市 家守 政子

直筆が踊っています傘寿の師
寡婦となり日毎身にしむ亡夫の価値
夢を追う趣味の投資は五十円

鳥取市 近藤 秋星

清掃をされて砂丘も冬に入る

死に土産に明石大橋渡る旅

必要のない人私もそうだから

鳥取市 有沢 せつ子

銅像も除幕のあとは寂しすぎ

パソコンを青い蛙に教え請う

ジャンケンで鯛焼買いに雪の中

鳥取市 宮脇 道子

枯れてまで刺を磨いているバラよ

山と海に恵まれた里紅葉映え

荒波が泡沫の恋薄れさせ

鳥取県 藤山 弘子

稲刈りが済むと母さん冬支度

兼業に強い味方のコンバイン

電柱がきれいに並ぶ田んぼ道

鳥取県 高尾 京

笑えない記事多過ぎる年でした

無事退院これから始まる自己管理

神仏に医学に祈る日が続く

松江市 小川 忠憲

パソコンで届く給料明細書

偽札にお釣り渡して慌て出し

相続の過疎の田都市に移したい

出雲市 榎 ミツエ

我が庭に山蔭咲いた日曜日

古時計 私の心見抜いてる

友達が老眼鏡で若返り

出雲市 岡 あきら

萌えた春あつた落葉も風まかせ

服までは買えず帽子を買って来る

初春の空に描きたい詩がある

鳥根県 谷岡 ふみ

やつと喜寿子の恩親の恩を知る

一幅の軸見る如し霧の海

紅葉散る前に座布団散る相撲(九州場所)

宇部市 中田 忠夫

名水と名乗ればすぐに売れている

禁断の実食べて誓ったはずなのに

入社式もうライバルを意識する

香川県 松村 輝夫

的しぼり長寿のコツを決めている

長寿国威張っておれぬ財政難

根っこから切らず芽が吹くように置き

香川県 向山 治延

孫が来て妻の財布がよく開く

高金利の誘いに乗った泥の舟

子育ては叱ってみたりおだてたり

徳島県 安宅 美代子

手のひらのくぼみに忍の字を握る

根っこから育て直そう子の躰

言い勝つてニトロが欲しい不整脈

今治市 渡邊 伊津志

浮いていることに気付かぬほど浮かれ

気が付くとゴールは足の下にある

打ち返す波が若さを連れて来る

大阪市 平井 露芳

ええ天気風にもちよつと話しかけ

デイスカバリー天女は歌も詠む余裕

歩け歩け俺にはついてる万歩計

豊中市 岸田 知香子

湯上りにほてる頬打つ木曾の風

北の国雪の便りに首すくめ

惜しまれるライトアップの公会堂

吹田市 有田 加寿老

妻に内緒のメモが一枚見当らぬ

異国語のような祝詞に節をつけ

一通話千円につく忘れ物

高槻市 執行 稲子

おだまりのセリフに似合う派手な服

おでん味じっくり仕込む老母の秋

近所には伏せて置きます謎の癖

高槻市 左右田 泰雄

駅までの道を尋ねるミニリュック

腹の虫なだめてにらむ回りずし

花の名を覚えぬうちに散りはじめ

高槻市 江原 秀夫

天国でぬくぬく遊ぶ朝うつつ

ひよつとして俺だけ残る恐ろしさ

家事一切寝込んだ妻に指図され

高槻市 乙倉 武史

身内から出た錆庇うのも身内

いざと言う時は集まる血の絆

しっかりと手綱は妻が握り締め

八尾市 井尻 民子

無駄遣い詫びる夫へ酒を酌む

いっぱいの田舎を詰めて母ごころ

預けよう彼方の虹にこの火種

八尾市 高橋 明子

北の国台風悲し落ちリソグ

磯の香を窓に打ち寄せ波の音

セクハラを待てるような冬の服

東大阪市 今岡 貞人

たこ焼の丸さは愛の丸さだよ

丸む背を散歩ではっぱかけてみる

言い過ぎを詫びて人間丸くなり

常識も現代版で勘狂い

寢屋川市 井上 すみれ

年重ね新聞見るも長くなり

捻子いらぬ眠り人形となるわたし

大工 静子

仏飯の形もみんなそれぞれに

花植えて土をくわえた爪を切る
残蚊泣く耳の回りでフラダンス

羽曳野市 芦田 絢子

和歌山市 土屋 起世子

ゆっくりとゆっくりと行く秋のみち

いつもよりはしゃぐ母の背寂しそう

火のいろが温もりくれる一人部屋

ロードショウ南京豆で初デート

張り合うてみても空しさ残るだけ

ネオン街の裏は情けに飢えている

羽曳野市 山本 たけし

和歌山市 和田 美寿子

全快に復活かける羽繕い

あの世へに撮った写真を大切に

同じ金持つ身で違うその重さ

捨てられてまた拾われて花が咲く

思い出がワイングラスにちよつと浮く

国民の納得しない消費税

河内長野市 杉谷 カズエ

和歌山市 武本 碧

曇天の海 沖繩を去る日なり

偏差値へ風の子前へ進めない

仕方なく転勤毎に捨て上手

欲望もパンも八分にして元氣

引越荷未練残らぬように積む

ほどほどのリップサービス輪が和む

岸和田市 亀井 皎月

和歌山市 吉村 さち子

酒だけは三日前からお正月

父に似てる母にも似てるお人好し

突張った義理と虚礼の年賀状

真っ直ぐに生きて蓄えなど持たず

新しい年よい年と祈る朝

利口ぶっているから輪には馴染めない

泉佐野市 稲葉 洋

尼崎市 内田 美也子

おい影よ愛想尽きぬかこの俺に

子等の声響きははじめた仮設あと

慎めとささやく影も酔っている

思い出を手繰れば里の風に逢う

噛み慣れて身の内となる総入歯

子の前で弱気は見せぬ母の眉

肩書を脱いで祭の音頭とる

伊丹市 榎谷郁子

秋深し写経の筆にうつる亡夫

婆いつも信玄袋離さない
木屋の匂いが酔わす寺詣り

鳥取市 西尾敬之介

土産物自慢もまぜてご近所へ

姫路市 服部一典

古希の坂越すにこされぬ妻看取り

晚酌が減って心配そうな妻
吐く息に指を当てさす霜柱

鳥取県 平井栄翁

虚しさは無職で生きる以下余白

呑み仲間かみさん褒めて誘いだす

兵庫県 植村雄太郎

悪いこと出来ぬナンバープレートだ

ローン済むまでは死なせてもらえない

気を長くして待ちましよう北の島

さよならの日から止まっている暦
吉の芽が出ること信じ種を蒔く

米子市 池尾保子

兵庫県 高見末野

老いても握るこぶしに明日の夢

影法師 今夜もついで来てくれる

ビルの谷間に蔵のすがたがひっそりと
たのしくて遠回りするフルムーン

米子市 門脇晶子

巢立つ子の部屋に大きい歌手の顔

兵庫県 北川とみ子

敬老会 夫の嬉しい顔がある
いらぬ事考えていて今日も暮れ

島根県 槻谷仲子

安らぎのなかつた亡母へ土を盛る

対話なき休耕田の土が泣く

朝かがみ強気な姑のひとり言

兵庫県 仲井素水

一夏を手を通さずにしまい込む
膝が知る冠雪告げる今朝の冷え

出雲市 加藤スズコ

九十の顔に見えぬはお世辞かも

転んでもダルマの意地で起き上がり

浮き沈み人生九十の川渡り

兵庫県 松浦登志子

ガソリンを使って名水くみに行く
自己証明免許証の顔公開し

松江市 松浦登志子

来年もまたよろしくと衣替え
先輩も後輩も来る焼鳥屋

兵庫県 谷田多美子

あなただけ貴女だけよと泣きに来る
迷う日もあった私の帰る城

兵庫県 西山八重子

孫二人大人四人を振り回す
ホームレス巷に集う不況風

兵庫県 徳平毬子

雲を生む嶺の姿に魅せられて
ふところをあれこれ覗く奉加帳

尼崎市 河津正治

あんちゃんの評判で陰る貴乃花
塾通いせぬ子のびのび家業継ぐ

寝屋川市 瀧本八十八

あの人が風の便りにまた揺れる
お噂は聞いていますとご挨拶

吹田市 後藤志津香

プロ人間造る野村に期待する
名残り惜し大阪球場さようなら

岸和田市 井伊東吉

腹一ばいに常緑樹の息を吸う
木刀を構える腰がもう大人

東大阪市 松山隆

ひまな人他人の事が気にかかる
再会へ何はともあれ縄のれん

大阪市 中井正秀

叙勲者の中に合点のいかぬ人
姑がいないと言うことで嫁くと決め

大阪市 尾崎黄紅

治らないまだ治せない勇み足
喜寿すぎて知恵の袋も軽うなり

大阪市 亀井円女

ごそごそと薬参加のクラス会
核家族美食の旅の夢弾む

大阪市 松岡千恵子

悔しがる負けん気はまだ脈がある
足広げ座るぐらいの自己主張

三重県 尾崎勤

蔓の性釘打ちながら這いあがる
天をける一人芝居の嬰兒です

和歌山県 村中悦男

優勝のセールへにわかファン増え
衣食住保障されてる留置場

横浜市 巖田かず枝

聞かれても一つ二つと物忘れ
古パンツゴム入れ替えてはいている

唐津市 岩崎實

沙湖抄

八木千代選

谷底に落ちた一枚の写真

好きが嫌いかグレーゾーンなら要らぬ

満月に見てもらおうわたしの尻尾

ジグソーパズルの欠片隠している落葉

どんぐりが二つ小さなほとけさま

山芋を流し込むほど無知でない

蟹とどく去年と事情変わる中

冬の絵の中は禁猟区域です

ちぎれた愛が一枚コインランドリー

後輩から学ぶ乱世の生き方

塞翁が馬を信じているひとり

しらたきを買う賑やかになりそうで

秋には秋の翼で欲を買いにゆく

天秤の真ん中辺にある孤独

大根の白に時どき気圧される

純白な人などいない秋の道

臆すれば臆する音のする太鼓

お経よむ わたしを直訴してみよう

錆の浮いた時間が皿に盛ってある

蛙飛び内緒の場所ですてこよう

鳥根県 松本 文字

大宮市 新井 朋子

西宮市 奥田みつ子

和歌山市 古久保和子

同

松江市 川本 晔

西宮市 牧渕富喜子

和歌山市 川上 大輪

和歌山市 川上 富湖

枚方市 濱田 良知

松原市 小池しげお

あきるの市 佐藤 季穎

富田林市 池 森子

鳥取県 鈴木 公弘

吹田市 石原 靖巳

鳥取県 新家 完司

堺市 桜沢あかり

鳥取県 乾 隆風

和歌山市 木本 朱夏

米子市 小西 雄々

道草の話が弾む赤とんぼ

そのままの自分を通すむつかしさ

今という一生涯の一大事

無に還る肩のちからは抜いてある

生んだのは私と妻が譲らない

玉虫色を納得しないのが短所

割烹着疊んで怖いことを言う

脳軟化の言葉 清涼剤にする

笑われているな私の表向き

後押しした風 神さまの御手だろう

真ん中の欲と真ん中の真実

進みすぎると他人の足を踏みつける

かけられた篩どっちの方をとる

夕焼けの勝った負けたは小さきもの

板につく板の方から寄ってくる

三日月が一人前の顔をする

大風呂敷に淋しがり屋と書いてある

さようなら紅いリングを剥き終える

おだんごも母も見えませんが

空間に安らぎのある仏さま

この次の駅から風になる二人

過去ばかり話して夢はもう見ない

小細工が出来ない指になったのう

流されそうな姉をしっかりとさえよう

家並みに似合う小さな樹を植える

喧嘩しておこう元気な今のうち

弘前市 齊藤 嘉

鳥取市 石上 悦子

鳥取県 土橋 螢

藤井寺市 高田美代子

綾部市 藤田 芳郎

大阪市 本間満津子

今治市 月原 宵明

藤井寺市 太田扶美代

寝屋川市 籠島 恵子

寝屋川市 森 茜

鳥取市 坂田和歌子

海南市 三宅 保州

砂川市 大橋 政良

大阪市 辻川 慶子

米子市 白根 ふみ

八尾市 村上ミツ子

愛媛県 中居 善信

八尾市 大内 朝子

米子市 茂理 高代

鳥取県 土橋 睦子

羽曳野市 田中 透太

横濱市 菱田 満秋

鳥取県 土橋はるお

米子市 青戸 田鶴

吹田市 山本希久子

出雲市 竹治ちかし

ようこそ名は忘れてるけど渡り鳥
眼鏡はずし現実ぼつと見て生きる
迂回路で歎異抄などつぶやいて
死ぬために生きる博士もわたくしも
その先の話は旅を終えてから
俺でさえ死ぬよと医師の高笑い
錯覚で夢を築こう最後まで
窺ってばかりで海へ出られない
ストレッチも平等にある動物園
歳月やピサの斜塔につっかい棒
喪の明ける前から離陸する気配
内面で燃えて零から出す答え
インプットしとかなくつちやこの言葉
太陽が元気袋を持ってくる
コウモリは住んで逆だと考えぬ
寂しいと言えば秋だと妻がいう
縁なくって一期一会の女となる
バラ色になる一瞬もたまにある
今日に限ってなにこだわっている鏡
歳月の流れは人間を晒す
ライバルが邪魔して神に近づけぬ
黄昏のはやさ足音消して来る
水は穏やか深追いは止めにする
醜さも自分なんだと言ひ聞かす
両方に耳があるので便利です
連弾のピアノに助けられている

大阪市 渡部さと美
米子市 林 瑞枝
大阪市 川久保睦子
鳥取県 谷口 次男
富田林市 片岡智恵子
青森県 漆戸凡々子
大阪市 立蔵 信子
富田林市 中井 アキ
枚方市 寺川 弘一
和歌山市 福本 英子
黒石市 相馬 一花
和歌山市 桜井 千秀
枚方市 森本 節子
米子市 足立由美子
今治市 矢野 佳雲
尼崎市 田辺 鹿太
兵庫県 大谷幸次郎
和歌山市 吉村さち子
京都市 都倉 求芽
八尾市 村上 剛治
唐津市 久保 正剣
鳥取市 植田 一京
鳥取市 徳田ひろこ
奈良県 鍛原 千里
羽曳野市 酒井 一壺
鳥取県 岩崎みさ江

じゃがいもを剥いて無口になっている
コスモス揺れるわたしが女であった頃
歩みたい道を心に抱いたまま
心経を朝のからだが知っている
赤い実は残しておくれ轄よ
血管よ小川のようにさらさらと
保護色で描く自画像は無題
私にもそんな日があり二二ンが四
妻の手をじっくりと見たことがない
負け犬のドラマを書こう美しく
困るのは嘘つく柱一本あり
夜あけまで私の筆が眠らない
早歩きなど躓く男下駄
とりあえず歳時記だけで入院す
感謝してくれぬチラスをたたむ役
ネクタイを結んだカラスまただます
飾るだけ飾っておこう玉手箱
ごろりごろり充電をしている時間
追憶やしばらく続く冬火花
何時咲いて散るのかなんじやもんじやの木
老い方の本を買うほど暇である
投げやりの言葉は誰も拾わない
後手々々にまわす政治もわたくしも
結ぶ切れるいつも出雲は忙しい
遺言にあったら笑う誤字脱字
弥陀の面 久方振りに陽にさらす

八尾市 高橋 夕花
羽曳野市 吉川 寿美
鳥取県 西原 艶子
米子市 野坂 なみ
横浜市 布山 嘉信
尼崎市 春城 年代
大阪市 板東 倫子
羽曳野市 徳山みつこ
寝屋川市 岸野あやめ
大阪市 一本 勇太
河内長野市 植村 喜代
八尾市 高杉 千歩
倉敷市 小野 克枝
唐津市 仁部 四郎
鳥取市 武田 帆雀
岡山県 富坂 志重
寝屋川市 太田とし子
倉吉市 野口 節子
西宮市 門谷たず子
出雲市 石倉美佐子
唐津市 宗 弘
出雲市 園山多賀子
岡山県 矢内寿恵子
唐津市 井上 勝視
和歌山市 田中 みね
倉吉市 米田 幸子

生きたため凡人の道貫くか
 石一つ百羽の鳩を風に
 泣くことも泣かせることも忘れてる
 電話ほど迷っていい顔がくる
 見栄を張るとは競うことかも知れぬ
 長雨に乱れた机上そのままに
 隠し事あるのか今日はよく喋る
 孫来たら奴服でも揚げようか
 墓地通過 車の中で掌を合わす
 海峡を越えて我が家のことおもっ
 紺碧に飛行雲ゆく秋の葬
 幾歳月 窓はわたしのロマンです
 信じてる風呂敷包み 穴がある
 つぎはぎの追憶だから味がある
 生き延びてよいことばかり無い浮世
 ジョーカーに生まれて風に身構える
 生かされて迷惑な人きつといる
 逆さまに記憶を辿る探し物
 初鏡 しみも自分史だと思っ
 孫から貰うキラ星ほどの玉手箱
 いい話だ今夜ぐっすり眠れそう
 捨て犬がついて来る日のみぞれ雪
 雑念を葬り切れぬ昨日今日
 お似合いの夫婦と他人には見える
 我流でも花は満足してくれる
 右耳に垢よう溜まる右ぎつちよ

鳥取県 橋本多哥由
 八尾市 宮崎シマ子
 池田市 栗田 久子
 茨木市 藤井 正雄
 鳥取市 夏目 健一
 和歌山県 村中 悦男
 三重県 尾崎 勤
 寝屋川市 平松かすみ
 今治市 塩路よしみ
 和歌山県 楠見 章子
 弘前市 一戸 ツネ
 西宮市 西口いわゑ
 鳥取市 福田 登美
 八尾市 吉村 一風
 倉敷市 田辺 灸六
 日立市 加藤 権悟
 大山市 早川 盛夫
 寝屋川市 江口 度
 河内長野市 水谷 正子
 岡山県 土居ひでの
 米子市 石垣 花子
 出雲市 板垣 夢酔
 岡山県 山本 玉恵
 松原市 玉置 重人
 鳥取県 石谷美恵子
 寝屋川市 坂上 高栄

老いたとて生きてる花でございます
 球根と話し合ったよ明日のこと
 秋の天われ閑せすの気楽さよ
 原色を愛し不器用ぬけ切れず
 赴任から戻ると妻の時間割り
 呱呱の声 既にエコーで会ってます
 ガスボンベ柳友減って行くばかり
 結論が見えた会議の席を立つ
 禁煙は簡単なこと三回目
 バランスを修理している医者通い
 点滴が生きろ生きろとメッセージ
 まだ生があるのにペット捨てられる
 行間にペチャクチャ這入る声が邪魔
 他人にはわからぬように口惜しがり
 世話好きの母に短い二十四時
 アンテナの長い兎の歳明ける
 新聞もポストで朝寝するサンデー
 松本文子さんの一枚は絵でなく写真です。谷底に落ちたのは自体の意志だったのかも知れません。「もういいよ。充分だよ」と掌から離れ、椿落下の覚悟とも通じましよう。切々と訴えてくる句ながら諦観と葉が見えます。新井朋子さんのZONNEには参りましたね。外来語ならではのグレーゾーンの使いようが適切で、清新な香りがあります。黒か白か好きか嫌いかの切れ味の鋭い導入部も魅力的。エールを贈りたくになりました。奥田みつ子さんの尻尾と満月は童画のようであり怖いんです。今夜の月齢は14・9。冬月のはずなのに皓々と照り渡っています。レントゲンよりも超高性能の月はすべてお見通しです。わたしの化けの皮も脱げてしまいました。

弘前市 蒔苗 果林
 米子市 澤田 千春
 大阪市 町田 達子
 鳴門市 八木 芳水
 横浜市 川島 良子
 茨木市 堀 良江
 京都市 松川 杜的
 和歌山県 中後 清史
 三田市 北野 哲男
 和歌山県 福重 美子
 八尾市 生嶋ますみ
 横浜市 後藤 早智
 横浜市 保田 絹子
 横浜市 山下 省子
 大阪市 津守 柳伸
 香川県 木村あきら
 横浜市 小野句多留

—水煙抄

秀句鑑賞

—12月号から

吉川 寿美

カンナが枯れる他人事とは思えない

太田 扶美代

真夏の太陽にあれば情熱の炎を燃やしていたカンナも、秋風に昔日の面影を失くしてしまつた。移ろいの世の佗びしさが胸の奥でキユンと泣きました。

明日こそ真実言おう髪洗う

山下 省子

どうしても言えなかつた過去、でもいつまでも隠しておけない。明日こそ打ち明けよう。でも、ゆれ動く女心の決心を髪洗うの下五で如実に言い表わしています。

真心の入った嘘に礼を言う

近藤 道子

あくまでも病名を隠す笑顔で看病する妻、そして何も彼もわかつていながらその嘘を受け入れる病夫。美しい夫婦愛で呼応する、吟醸の一句。

マスコミの土足白紙に戻せない

安宅 美代子

無遠慮にズカスカ土足で踏み込むレポマイク、哀しみを剃り出すようなインタビュ、この心の傷は生涯消えないでしょう。マスコミへの一矢の句と受け止めました。

大声で泣けたらスツとするだろう

高村 吉之助

喉仏でグツと耐えている怒り哀しみ、それを握りしめている拳がふるえている。涙をたやすく武器に出来る女性と違って殿方のつらい処でしょう。

白は白 黒は黒です無器用で

亀井 円女

妥協の二字は持たない、誠実なお人柄が滲み出ている佳句です。口先で器用に生きるより、濁り水は吞まず自分に正直に生きる方がどれほど立派か。でも生き難いですよね。

折れそうで折れぬわたしもコスモスも

楠 昭子

冷たい秋風にめげず、なよなよと咲きつづける秋桜、当節は死語になりそう、手弱女に見えてどうしてどうして、芯の強さを秘めている、女のしたたかさと相通する。昭子作品のさり気ないみつけの良さに、注目しているひとりで。

結ばれるそんな予感のする出会い

国米 きくゑ

初対面から、お互い肋に響き合う出会いがありますよね。この句はそのままと傘になる出会いですが、ほかにもかけがえのない友でありライバルになれた出会い、短い一生のうちこんな出会いに恵まれた仕合せが、ほのぼのと伝わって来ます。

けんかするたびに絆が太くなる

森口 美羽

言うだけの事は、言い合ってお互いの思惑もわかり、自分の悪かった処も反省して「ゴメン」の一言で仲直り、却って新鮮な気持ちで元のサヤに納まる。夫婦の歴史ってそんな積み重ねの上に、成り立ってゆくのでしょうか。誰もが身に覚えのある実感句です。

世渡りのコツを覚えてる尻尾

中村 君枝

これはまた前出の円女作品と反対に、風向きを素早く読んで派閥の波に乗る。そんな器用な尻尾も宮仕えには必要でしょう。

門札は亡夫も娘もいて大家族

家守 政子

夫も近き娘も嫁ぎ、寂しい独り住いせめて表札だけでも賑やかだった頃のままだに、名前を並べて置く佗びしさが胸を打ちます。

尚香のむ

西出楓楽選

生きもののように汚れる台所

沈黙の中で問われている勇気

長電話 忙しい一日でした

ストレスもついでにかえすフライパン

がまん我慢がまん疲れの盆の窪

やるせない思いの川が蛇行する

場違いの椅子にじりじり冷えてくる

丁寧な鏡を拭いて機嫌取る

なんとなく教え請いたい笑顔だな

何かしら悩んでないと落ち着かぬ

象の耳 大きなことは考えぬ

花屋の前で時間をつぶす事がある

風邪気味のあなたの声に負けておく

聞き上手忘れ上手なロバの耳

あやとりの指が微熱を溜めている

数珠玉さらさら風をよび弥陀をよび

ポケットに去年の秋の独り言

暮れて来たことも気づかず空元氣

小面をつけていい春待つてみる

米子市 政岡日枝子

和歌山市 杉山 精子

堺市 志田 千代

寝屋川市 籠島 恵子

寝屋川市 森 茜

和歌山市 武本 碧

大阪市 日阪 秋子

倉吉市 淡路ゆり子

鳥取県 さえきやえ

鳥取市 石上 悦子

米子市 白根 ふみ

今治市 塩路よしみ

西宮市 門谷たず子

大阪市 辻川 慶子

和歌山市 古久保和子

熊本市 永田 俊子

和歌山市 木本 朱夏

河内長野市 植村 喜代

鳥取県 西原 艶子

耕して土からもらっている命

おかげ様で宇宙がとでも近くなり

念仏にこの世の欲が添えられる

名水で飲めば薬も効きそうなの

毎日を充実させて留守ばかり

争いは川の向こうで見ていよう

姑の季節はゆるゆる過ぎる熟し柿

ばれている嘘に気付かぬ豆の花

時折りは神を欲しがらぬ無宗教

美術館のはしごしてます秋日和

スランプの時ほど虚勢張って生き

枯れ方を知らない女にも困り

ひとり言聞かせ枕を裏返す

買うつもり無いのに裏まで見てしま

上昇指向もうすぐ天を突くポプラ

胸底に亡夫のささやき貯めてある

子を包むゆるみもたんと入れた服

生きのびる今日への面つけようか

父は帰らず冬の足音だけがある

想い出が溜るエッセイでも書こう

穏やかな海も厳しい冬を抱く

終章を飾る笑顔のりハーサル

それぞれの色生き方は変えられぬ

日々多忙 医者と付き合う暇がない

虫干しをして思い出の中にある

言い訳をすれば矛盾がこぼれ出る

鳥取県 西川 和子

倉吉市 野口 節子

横浜市 三村八重子

羽曳野市 芦田 絢子

大阪市 神夏磯典子

奈良県 鍛原 千里

西宮市 牧淵富喜子

富田林市 片岡智恵子

堺市 神原 文

八尾市 村上ミツ子

美面市 出口セツ子

八王子市 播本 充子

岡山県 山本 玉恵

富田林市 藤田 泰子

和歌山市 川上 富湖

富田林市 中井 アキ

大阪市 三浦千津子

八尾市 大内 朝子

倉敷市 小野 克枝

藤井寺市 太田扶美代

鳥取市 録沢 風花

岡山県 矢内寿恵子

芦屋市 黒田 能子

西宮市 奥田みつ子

枚方市 森本 節子

鳥取市 福田 登美

和解するかたちに椅子をセットする
充電の旅で見付けた小さい秋
漁火の瞬き星とする会話

抱くものがないから今をだきしめる

主役にはなれぬ山葵をすりおろす

スパイスがきき過ぎ舌が乾いている

沈黙は金とおんなの保身術

懐をやがて飛び出す蝶結び

外堀をわが手で埋める或る決意

偶然が三度重なるいい出会い

未熟さも笑顔のカバー若いから

回り道した人生の妥協癖

客無しのエスカレーター風を乗せ

階段も人生も下りが怖い

裏切った風がしらりと吹き返す

わたくしの火種くすぶっているノート

はないちもんめ一人になった城守る

躓いた石に心を見透かされ

雪しんしん竹人形は人恋し

美しく老いて未来に備えよう

わからない嫌という字の女へん

花束に託すわたしのありがとう

スランブだ古い殻から脱出だ

紅変える振り向かせたい人がいる

鏡にはうつしとうない泣きぼくろ

ババシャツのレースで正す女偏

岡山県 大石あすなろ

大阪市 板東 倫子

和歌山市 楠見 章子

宝塚市 嵯峨根保子

藤井寺市 高田美代子

富田林市 前田 登子

尼崎市 長浜 澄子

和歌山市 榎原 公子

鳥取県 岩崎みさ江

岡山市 川端 柳子

大阪市 渡部さと美

和歌山市 山口三千子

横浜市 伊藤 ふみ

横浜市 豊田 羊子

今治市 村上久美子

松江市 川本 晔

今治市 野村 清美

松江市 佐野木みえ

出雲市 石倉芙佐子

和歌山市 和田美寿子

和歌山県 坂東 和代

寝屋川市 平松かすみ

和歌山市 桜井 千秀

岸和田市 宮野みつ江

寝屋川市 太田とし子

米子市 鷲見 正子

うなづくだけの優しきで聞く話
ラーメンで一人をかこつ秋の夜
傾いたままの絆がいと嬉しい

母の愛ずつと見て来た台所

ひとすじの薬にも頼る人が増え

伊勢暦みて退院の日を決める

人間の弱さ強さよ土俵ざわ

よろよろとよろけてばかり女坂

生涯を学生喜寿の受講生

香水は行く先ちゃんと読んで居る

情念を燃やす私と彼岸花

灯を消せば百合が私語る応接間

嬉しい日ちよつと贅沢するお鍋

八尾市 宮崎シマ子

寝屋川市 坂上 高栄

八尾市 高橋 夕花

米子市 木村富美子

和歌山市 福重 美子

倉吉市 松本よしえ

大阪市 大川 道子

弘前市 一戸 ツネ

愛媛県 黒田 茂代

鳥取市 前田 一枝

和歌山市 玉置 当代

寝屋川市 岸野あやめ

倉敷市 井上 富子

日枝子さんの句―実際に台所仕事に携わっている主婦なればこそ、詠めた句であろう。台所は活気のある家族ほどよく汚れる。その汚れ方を、生きもののように、と表現したところに、作者の鋭い感性がうかがえる。精子さん句―何人かの会話の途中、気まずい沈黙が漂った時、ピエロ役を演じ一人で悪者になつてしまふことがある。そのたび自己嫌悪に陥るのうは、この句で表わされているように、勇氣がないせいなのだろうか。

千代さんの句―長電話していたから、忙しい一日になつたと思われる。五五七で詠んであることにより切迫感が出ている。下七を、でしたと丁寧語で結んであるので、自分を揶揄する気持が伝わる。恵子さんの句―テレビなどでコックさんが、フライパンを手の一部のように巧みに操っているのをよく見る。この句はプロの所作とは限らないと思うが、着眼の面白さを買わせてもらった。ついでに、が句の深みを倍増している。

― 109 ―

雪

藤田泰子選



新雪の夜明けは神の音がする
初雪が俺の頭に降りだした
雪原の墨一滴となる鳥
嘘ひとつ雪の白さを甘く見る
悔しさを一つのみ込む雪景色
吹雪く夜はみんな許してしまえそう
うわついた言葉は言えぬ銀世界
雪明かり別れ話が切り出せぬ
確執に雪の階段ころげ落ち
その事は忘れてくれている根雪
雪しんしん私魂盗まれる
肩の雪払ってくれる人と逢う
亡母送る日も雪だった忌が巡る
わたくしを庇ってくれる雪囲い
雪もよい見栄はる人と知りしより
若者は去り豪雪に埋もれる
地吹雪を肥やしに育つりんごっ子
雪に泣き雪に喜び雪と生き
雪霏々と北方領土遙かなり
空しさの休耕田を埋める雪
雪しんしんひとりの闇をかきまわす
幸せな雪はきれいなうちにとけ

風花 喬水 強一 和歌子 扶美代 剛治 典子 哲郎 アキ しげお 高栄 みね 英子 啓子 羊子 雅城 凡々子 重人 柳五郎 ミツ子 佳雲

ばたん雪わたしに蓋をするように
ふるさとへの道をふさいでしまつ雪
どんどの音で舞台は雪になる
道行きの雪は男女を深くする
いつまでも溶けない雪が降る舞台
真つ白な雪でも罪は消されない
雪の朝どこへ行くのか破戒僧
狩人の道迷わせる雪おんな
地吹雪に破られているメトロノーム
表層の雪崩に今日ももがいてる
負の連鎖雪の重さをもて余す
竹山の撥へ津軽の雪は舞う
雪の怖さを知っていますか雪見酒
七色の雪とつきあう北の旅
雪の中自分の家を探してる

日枝子 シマ子 高夫 朝子 大輪 たもつ よしみ 俊子 ツネ 健一 銀波 久仁於 保州 東雲 次男 たず子 とし子 仁緑 タミ 玉恵 隆風 小林 妻子

一徹も溶かし和らぐ初春の酒
父の顔少し和らぐいい便り
和らいで落葉と遊ぶ風の神
初対面を和らげている大阪弁
弾き初めのバイエル風も和らいで
スクラムを組み和らぐ泣き所
家風にも慣れてやわらぐ嫁姑
妥協点間近空気も和らいで
一呼吸おけば和らぐ言葉尻
鎮痛剤よりも一言効きました
みんな管とれて優しい亡母の顔
一日の汗が和らぐ縄のれん
ひとときを和らぐ母の南無十指
家に愛花屋に花があるように
三寒四温も和らいでくる予定
心読み合つて夫婦の海が風ぐ
和らいだ風に帰れぬ渡り鳥
散らかった部屋に和らぎ置いてある
妻の抱く猫の機嫌をとっておく
腹の虫和らぐまでと飲んでる
カネ少少きて頭痛が和らいだ
和らいだ言葉で骨を抜いている

寿恵子 清芳 正匍 和重 哲子 周信 愛論 白光子 あずき みつこ 和歌子 権悟 高夫 あやめ 富子 岳水 勤 時弘 満秋 四郎 しげお

和らぐ

川上大輪選



どん底で和らぐ鬼の瞳に出会う
 和らいだ話同郷知ってから
 雑然と和らきがあるわが机上
 和らいだ笑顔で乳房ふくませる
 岩風呂に和らぐ肌が美しい
 やわらぎの世界があつた左遷の地
 気の合った年金暮らしの日向ほこ
 誤報だと判り和らぐ消防署
 墓地買つてほつとしてます共白髪
 アンパンの丸さに気分和らげる
 歩み寄る姿勢へ空気まるうなる
 唇に触れて和らぐ指の先
 社も家も男和らぐ場所がない
 お見合いの終わりの頃に馴染むお茶
 ロッカーで外す仕事の鬼の面

住 佳
 鎮痛剤が効いてうとうととしてしまふ(陶美代子
 千鳥足もうストレスの消えた貌
 水一杯怒りがスツと解けてゆく
 コスモスのあたり和らぐ風が舞う
 テトラポット海の機嫌を和らげる

人 芳 郎
 色即是空丸腰で出る仁王門
 イヤリングはずすと珈琲が美味い
 天 天
 鳩時計ふつと独りの箸を止め 政岡日枝子
 軸 軸
 楷行草肩の力が抜けてゆく

リボン

安平次弘道選



正 一 甚 劍 英 壬 子 重 人 狸 村 佳 雲 清 史 充 子 德 三 英 子 螢 み ね あ ず ま 慕 情 由 一

母の背でリボンが眠る七五三
 大きなリボン以下同文の席にいる
 祝賀会リボンが弾む控室
 代読のリボンへ拍手する合図
 三夫婦リボンも映える渡り初め
 プレゼントリボンに君を徳ぶ色
 黒枠のリボンめくれれば亡母の声
 紅白のリボンに敵意溜めていた
 候補者のリボンはとても低姿勢
 黒揚羽のリボンにはしゃぐネギ坊主
 核兵器に平和のリボン掛けたいネ
 テープカットリボンの行方気にかか
 赤いリボンほしくて風を追いつづけ
 まだ見えぬ主賓のリボン氣を揉ませ
 義理チョコのリボンに軽いなされる
 少女羽化赤いリボンがよく似合う
 ポニーテールの赤いリボンがよく喋る
 恋知って少女のリボン蝶となる
 代読のリボンがすこしきこちな
 本命と義理チョコリボン色を変え
 ポニーテールの孫のリボンが蝶のよう
 花束を飾るリボンが華麗過ぎ

宵 明 たもつ 正 雄 芳 郎 花 匠 愛 論 妻 子 多 賀 子
 人生の終焉飾る黒リボン
 リボンつけたベツトが見てるホームレス
 実力を胸のリボンが喋り出す
 真っ赤っかでかいリボンに夏帽子
 思い出はリボンに騎士と夢に憧れて
 遠い日リボンに騎士と夢を追
 私から夫を攫つた黒リボン
 みつ編みのリボンは恋を知っている
 結び目にほのかな愛があるリボン
 黒髪を結ぶリボンは白と決め
 招待席今日のリボンに自負がある
 引き潮に流されている喪のリボン
 弔辞読む声もとぎれる喪のリボン
 哀しみに凍てついている喪のリボン
 演壇に立つとリボンが欲しくなる

住 佳
 赤毛のアンに孫あこがれているリボン
 もう三十路リボンに騎士は現れず
 候補者のリボン虚飾の色に見え
 姉のリボンが欲しくて泣いたことがある
 司会者に文句つけているリボン

人 芳 郎
 胸リボン少しきどっていませんか
 地 地
 うれしい日言葉にリボンつけたいな よしみ
 天 天
 大きなリボンをつけているのが狸です 川上大輪
 軸 軸
 表彰式胸のリボンにある誇り

武 史 俊 子 岳 水 柳 五 郎 松 煙 美 津 子 英 子 銀 波 た ず 子 螢 典 子 周 信 吉 之 助 時 弘 靖 巳 英 壬 子 文 時 た だ し 佳 雲 し げ お

初歩教室

題 一

吐 田 公 一

おめでとうございます。本年もよろしく。

前回の推敲でお話したように、推敲にとつて大事なのは何辺も舌の上でその句を転がしてみることです。そのことによつて語呂の悪さや意味不明な部分が自ら判つてくる。言葉を上下してみるとか、別の表現方法はないか、同義語になる表現はしていないか、冗漫になつていないか等々反芻してみることが大切。

このことは省略についても言えることです。川柳にとつて省略はいのちと言へるものですが、さりとて無闇に省略すればよいというものでもない。その省略の取捨選択も推敲に外ならない。且つ省略の基本は詠み込もうとする事柄を一点に絞ら込むことがコツと言へる。添削句

○ 一声をかけて一日丸く生き

美 子

中七を自分中心にしないで詠むと

▽ 一声をかけ合い今日を丸く生き

○ これ一ヶ残して見ても仕方無い 志 重

なせ残つたかの心理を詠めばよい。

▽ 一つだけ残る遠慮に手が出せず

○ 一杯のお酒で心癒される

ひさ乃

人物の配置があればよいのだが

▽ 一杯が心を癒やす妻の酌

てる代

○ 道化師の一人芝居で幕を閉じ

てる代

道化師では劇に限られてしまふ。人生の幕

切れを詠むとすれは

動

▽ 残された一人芝居の幕を閉じ

動

○ 一億が瀬踏みの列に続いている 時事吟は内容を分りやすく詠む必要がある。

▽ 一億が公的資金背負う羽目

國八重子

○ 一からの出直し花の終るまで

國八重子

下八がやや遊離している。

▽ パツイチの出直しがきく花の齡

隆

○ 一から十数えられれますわが児褒め 下五の表現がまずい。

▽ 一から十数えた孫へ出すおやつ

幸 枝

○ 星一つ月は思わぬとこで出る

幸 枝

人間が詠めていない。月を擬人法とみても

少々無理があるようだ。句意は異なるが

▽ 一番星探した頃の友も逝き

輝 夫

○ 一人旅一寸いっぱい連となる

輝 夫

一寸いっぱいもいいが

▽ 一人旅知らぬ同志が連れとなり

○ 一つぶを植えていたので花が咲く 美寿子

中七以降が説明的。花が咲くのは植えていたからで、中七を省略して何かを詠む。

▽ 一粒種がやつと実つた披露宴

タツエ

○ 庭隅の一輪の花さみしそつ

タツエ

この場合一輪とあれば花

▽ 一輪の淋しさを知る秋の庭

茂 代

○ 今一步遮断機降りてある訣れ

茂 代

中七がサスペンスの見過ぎの感

▽ ある訣れいま押しができぬまま

禮 子

○ 見栄つ張りグイヤー一つを光らせる 禮 子

光らせるもいいが動きを出せば

▽ 見栄つ張りグイヤー一つをキラキラと

宗 明

○ ベイスターズ今年の締めは日本一 宗 明

時事吟は即吟が宿命。掲載は一月号。時事

性を失う点に配慮のこと

▽ 三十八年ぶり日本一の顔

方 子

○ 一冊の本よりうれしハガキくれ 方 子

本よりも内容のある一葉の意は分るが

▽ 一枚の絵はがきうれし故郷の春

円 女

○ 昔の話一番になって亡母のエゴ

円 女

上七中九ですばらしい破調

▽ 一番になれとつるさいママのエゴ

ふ み

○ 虫一匹へ大人三人燃えている 虫一匹が不適切。また三人と限定しなくても

▽ 一匹の虫へ大人がキヤーカーと

○永遠の愛誓った筈が今一人 てる子

中七がいわずもがなの表現

▽ひとり身にされてしまった永遠の愛

○一隅をてらす光は弥陀の色 宏

色がこの場合そぐわない。

▽一隅をてらす光に弥陀の慈悲

○卯の年に一步ふみだす万歩計 要子

上五は来年の干支からの思いつきだけ。

▽全快へ一步踏み出す万歩計

○恋文一枚老いのペースを狂わせる ひでの

上八と破調すぎる。着想はよい。推敲不足

▽一通の恋文老いを狂わせる

▽老いを刺戟する一通のラブレター

○僕達の愛をつづった一頁 晩翠

中七で自分達のがわかるはず。

▽ありし日の愛をつづった一頁 義男

○一步でも二歩でも人に先んじる

単なる説明に終っている。

▽一步先読んでそつない妻の勤 益子

○湯の宿の一泊惜しむクラス会

上五を省き、別れを惜しむ情景を

▽一泊の別れを惜しむクラス会 寿代

○朝焼けの始発列車で旅に出る

上五はつけ足しに近い。楽しい内容を表現

する言葉を探すこと

▽うきつきと始発列車で旅に出る

○這い這いが立ったと里に電話する 山雅子
課題からやや離れた感じがする。

▽一步踏む足へ茶の間がドッと湧き

○家計簿のマイナス賞与待ちこがれ 羊子

下五で一番待っている様子がわかりますが、

題から言ってわかりやすく一番を入れて作

句してみられては――

▽家計簿が一番待っている賞与

○茶柱の縁起を信じ心待ち 栄翁

▽茶柱の一つ信じて幸を待つ

○逝く秋を同行二人一人旅 つよし

二人一人と語呂がよくない。

▽逝く秋を大師と連れの一人旅

○一人酒横目でにらむバラの花 泰雄

中七の表現が不適切。少し品よく

▽一人酒淋しかろうとバラの花

○一を聞き十知る相手肩がこる よしこ

相手「に」または「で」を挿入されては――

▽折りに触れ母の一言反芻し 知華子

あまりむずかしい言葉を使わず思い出す程度――

▽折りに触れ母の一言思い出す

佳句

一抹の不安適中ガン告知 啓子

(参考)一抹の不安が残るガン術後

一番にソフトな言葉ほしい年 タツエ

一握の米に泣いてた敗戦日 トヨ子

一通の手紙が恋を幕にする ひさ乃

一文字結んだ口にある主張 美子

一球に泣いたさよならホームラン 四三郎

言い訳はすまい一からやり直す 武治

一から出直す老いに遠い春 三恵子

(下五でいただいた)

荷が重く一時逃れのコップ酒 一典

一生の大波小波知る日記 登子

血糖値もう一杯に迷う箸 徳三

一枚のハガキで人生狂わされ てる代

(こんな時代もあった)

一言も言えず別れた駅を悔い 志津香

(演歌的情緒)

お早ようで今日一日が動き出す 君江

(朝の挨拶でご機嫌がわかる)

アルバムに一喜一憂盛り込まれ 純子

(思い出が山盛り)

紙一枚夫婦の絆切れてゆく ミツオ

(夫婦別れはあつけないもの)

同居欄猫一匹も書いておく 智加恵

(ユーモアのある句)

一杯のコーヒー詩人にもさせる 風花

(詩的情緒がある)

私句
一歩ずつ前進亀の粘り勝ち

本社十二月句会

十二月七日(月)午後五時半

アウイーナ大阪

本年度最終の本社句会は、小雨降る中、十九名の出席により定刻開催された。

お話は「上方芸能と川柳」と題して藤井一二三氏。生活も文化も町人主体であった大阪では元禄の頃より、和事芸中心の歌舞伎、浄瑠璃が盛んで芝居小屋が栄えた。座付作者近松門左衛門の出現により芸術の域にまで高められる。彼の七十二歳の死まで、百十本の台本が書かれたという。曾根崎心中の道行きの一節が朗読され、会場はしんと聞き入る。

人情の機微をうたう川柳にも、歌舞伎、浄瑠璃に関するものが多く、

扇雀はこの世で添えぬ役ばかり
ひとりになれば芸人目を伏せる
頼冠りの中に日本一の顔
文楽人形みな寒むそうに寒むそうに
等の句を紹介し、

過去に似た舞台半日泣きに行く
の自句で話を締めくくる。

二三

披露の前に、京都の都大路川柳社を代表して中林醉虎氏が同社二十周年記念大会の御礼を述べられた。

月間賞は富山ルイ子さん(寝屋川市)に輝く。
(司会―朝子) (受付―寿美子・茜)
(記名―いわる・澄子) (清記―希久子)

席題「風呂」 平松 かすみ 選

幸せを連発母さんのお風呂

一番風呂嫁にすめるおじいちゃん

風呂場の持ち電話ねだってる

風呂の栓抜くのは私でもできる

少し蹴伸びた気がする風呂上がり

風呂にまで手すり静かに老いを生き

露天風呂めぐりへ水着持参する

設計の都合で風呂は丸くなり

孫びっくりお湯から音と泡が湧く

人間の顔にもどっているお風呂

八十の母すこやかに風呂が趣味

玉三郎風呂で男の顔になり

いい一日あなたもお風呂もあたたかい

ゆで蛸が美人待ってる露天風呂

ダン吉

満州

瑠美子

金太

泰子

二三

楓楽

瑠美子

章久

朝子

愛論

昭子

扶美代

満寿蔵

余罪も問うまい柚子の湯に浸る

銭湯の馴染みで温泉ツアー組み

銭湯で待たせた妻は冷えていた

真っ当に生きてゆつくり臍洗う

夜勤明け手足伸ばして朝の風呂

銭湯の話し相手にどなた様

素肌美が自慢見せたい風呂上がり

産湯からすつとお風呂がきらいです

風呂上がり美女のお腹が鳴っている

ヘアチャンに囲まれている露天風呂

ホーローのホテルの風呂は落ちつかぬ

山の風呂虫も木の葉も落ちてくる

風呂上がり鏡に見入るナルシスト

湯舟でも第九を歌う十二月

柳伸

まつお

咲二

紫香

度

雅楓

一風

満州

洞庵

勇太

一風

信子

洋

東雲

兼題「やっこ」 海老池 洋選

此処からはやつとが見える九合目
完走がやつとだ燃えつきた私
肩の荷を降して秋のフルムーン
支店長のやつと動いたのど仏
大学をやつと出たのにこの不況
飯設からやつとわが家の窓明り
飯設からやつと出られた顔洗う
八起き目に摺んだ虹がすぐ消える
やつと来た五合目杖を持ち直す
スランプをやつと抜け出したひとつの絵
教育費をやつと終えたら婚礼費
七転びやつと自分が見えてくる
やつと来た順へ割り込む救急車
歯が抜けてやつと鎖を外される
心の戸やつと開いた子の涙
とりとめた命へやつと朝が来る
旅に出る妻からやつと放される
もう泣かぬ女でやつと喪が明ける
雑用からやつと解かれた二十五時
好きな人やつとできた息子の便り
無罪やつと勝ち取るまでの長い道
金星をやつと射止めた乱れ髪
座禪堂やつと阿弥陀の掌に触れる
やつと来た出番兜の緒を締める
風雨にもめげずにやつとみゆる秋
母ちゃんと先妻の子がやつと呼ぶ
やつと芽が出なかったのに踏まれてる

しげお ゲン吉 アキ 章久 まつお 隆盛 英子 大輪 たず子 典子 隆盛 楓楽 英子 泰子 章久 賢子 鬼遊 雅文 寿美 千里 寿美 女 千秀 千秀 一風 紫香 ますみ

やつと得た椅子へなりふりかまわな
い枢の中でやつと一人になれま
したやつと来た引越先は留守だ
つた這えば立てやつとは遠い母
ごころ約束をやつと果たした軽
い飢えやつと得た椅子がギンギ
ン音を立てやつと子育てすんだ
女は戯画を描くお正月やつと
振り子のとまる母

たもつ 大輪 梨里 柳伸 西 典子 勇太 度 美代子 朝子 泰子 鹿太 冬葉 保子 千里 美代子 洋

やつとももうとも思ふ年の暮れ
まごころにやつとであつた蛇い
ちご三年目やつと素顔がみえて
くる定年でやつと自分の絵が描
ける困ったことにやつと受話器
が取れた孫ライバルのやつとに
油断せぬことだ地下街をやつ
とはい出たカタツムリやつと咲
いて明日にはしほむ赤い花

美代子 朝子 泰子 鹿太 冬葉 保子 千里 美代子 洋

兼題「大根」 八十田 洞庵 選

間引き菜の犠牲を大根は知らず
大根が小さくなってくる屋台
土つき大根妻に届いて十二月
陽の匂う煮干し大根老母の味
大根を抜く子供らに地の温み

剛治 セツ子 しげお 朝子 正雄

かすみ 楓楽 扶美代 美代子 とし子 恵子 一風 瑠美子 萬的 あやめ 泰子 典子 朝子 度 雅文 満州 咲二 東雲 酔虎 章久 鬼遊 度 保子 瑠美子 千秀 月子 章久 克治 冬葉

住

大根足しっかり我が家守る嫁

沢庵は祖母が秘伝の塩加減

主役ではないが刺身に添うている

太陽の笑顔を食べる干し大根

ふろふきの味に染みてる妻の愛

大根に定位置があるおでん鍋

おろし大根脇役なりの自負がある

仲直り大根はとけるまで煮込む

大根引き持つていきなと叔母がくれ

兼題「指紋」

宮西弥生選

五十年信じてついて来た指紋

ベタベタと指紋をつけて店を出る

関取りの指紋鬼門に貼つてある

わたしの証耳のほくろとこの指紋

大切な人にわたしの指紋おく

同じ指紋作らぬ神の思し召し

被害者としての指紋もとられます

指紋のついたコップで薬吞まされる

姑が来てあちこち指紋つけやはる

お金届けた人の指紋も見て欲しい

義のために男になった血判状

拇印押す後めたくはないけれど

言い訳の出来ぬ指紋がついている

ルイ子

正雄

希久子

楓

たず子

指紋押す一生君を離さない

警察に指紋とられたことがある

灰皿の指紋波風立てている

盗難届けに行つたら指紋押された

カットグラスへ指紋残して買わぬ客

たつた一つ時効の日まで追う指紋

それぞれに違つた過去をもつ指紋

指紋ベタベタやつと陶芸出来上がり

菜箸に母の指紋がうつばい

陶工の歳月指紋うすくなる

四面楚歌はんやり指紋など眺め

そのときまできれいな指紋とておく

怪しいのは全然指紋のないコップ

ワイングラスさみみの指紋を消す別れ

売り物に指紋は残さない匠

幸いに指紋取られたことがない

焼くまでは僕の証である指紋

すりきれた指紋は汗がしつている

母よりも少し長生きした指紋

人間の弱さで罪を生む指紋

人間の指紋を持った鬼がいる

悪い事するなと指紋神がくれ

寒椿わたしの指紋抱いて散る

警察が欲しくてたまらない指紋

柿の木に残る少年期の指紋

亡父の辞書指紋も垢もあつたかい

舞夢

寿美子

澄子

三男

千歩

世界遺産私の指紋つけて来る

別れない別れてはしくない指紋

兼題「裏」

西出楓楽選

裏め殺しだんだん裏がよめてくる

人妻を待たせてあつた裏鬼門

裏側で胡坐をかいている本音

女関から十歩あるけはうちの裏

褒められてそれは裏ですとも言えず

裏十せば腹の黒さが浮いて出る

表裏ないと言うのも物足らず

裏木戸の口笛謎をかけてくる

鏡台の裏から工面しておくれ

トラブルの裏で誰かが薄笑い

ここ一番九回裏がどつと沸く

裏の裏読んで表をあぶりだす

足の裏汚い土も踏んで来た

裏地には念を入れている着道楽

裏返しした座布団がしゃべり出す

口裏を合わす舌ならたとある

B面に素敵な味を持つおひと

浪費癖の妻が持つてた裏帳簿

その裏を知っているから笑つとく

盃の裏に味方をたんと持つ

一枚の名刺の裏にある野心

わたしの裏の裏まで知る日記

裏の裏まで脳みそついて来ぬ

泰子

弥生

満津子

しげお

剛治

たもつ

千歩

しぶちんに裏の顔あり募金箱

裏返す軍手にあつた辛い汗

裏表知る達観の笑い皺

裏道で花の咲く日待つとしよう

駄洒落ばかりで裏を覗かせない男

小面の裏に炎を溜めている

裏のうら見過ぎて前へ進めない

気がつけばパーシプルで歩いてた

住

ほほ笑みの裏はのぞかぬことにする

裏の裏その又裏が面白い

いじめつ子根はやさしさを求めてる

裏のない男と車間距離をおく

裏話すんなり呑んだのと仏

人

神様の答えが裏にあるカルテ

地

頼りない男を一度裏返す

天

ありがとう明るい声に裏はない

軸

裏の裏読んで正攻法でゆく

兼題「外見」

橋高薫風選

礼という外見だけの四方拝

外見の立派なこわい玉手箱

二枚目半の恋は取り持ちばかりする

外見と同じようなお人柄

外見も大切だから顔洗つ

かすみ

満寿蔵

朝子

高栄

萬的

たず子

達子

哲夫

住

いわゑ

扶美代

一風

重人

とし子

人

ますみ

地

義

天

かりん

軸

楓楽

兼題「外見」

橋高薫風選

照子

セツ子

恵子

大輪

大輪

外見は少し繕うほどがいい

外見は一分の隙もなく詐欺師

気位の高い鼻だがシャイなひと

スリーサイズ外見よりは清純派

亡き妻とそっくりの娘が二児の親

見た目より妻は鈍くて平和主義

いびつでもトマトの味のするトマト

温泉プール外見はみな健常者

外見は質素に高額納税者

玄関に外車並べて火の車

外見は英字ばかりの日本製

外見にとびつく癖がなおらない

外見はとても立派な映画村

外見用に金縁眼鏡持ち歩く

外見に構ってられぬ不況風

からっぽの頭にパーマかけて春

外見ではないと自分に言いきかせ

世間体気にする母とせぬ娘

外見で好かれたわけじゃないらしい

真っ直ぐが売れる胡瓜も長芋も

私ごみのみの顔へ一票たてまつる

外見でめしを食つてる鬼瓦

柘榴炸裂 外見などは気にしない

クラス会臓器はみんな同い年

若作り中身はあつちこち痛む

滲み出て外見おおう艶となる

外見に母性本能くすぐられ

母になる自信堂々見せてます

住

咲二

柳宏子

寿美

澄子

正坊

陸子

泰子

千代

絹子

東雲

萬的

朝子

武庫坊

正雄

まつお

かりん

かりん

洞庵

信子

文秋

一三

鹿太

富湖

かすみ

満州

保子

希久子

典子

外見を気にして薄い僕になる

外見に釣られた針が外れない

浅漬けの味外見を疑わず

外見にこだわりのある霊柩車

ときどきは鬼の姿をする仏

外づらはよいが奥さん泣いてはる

人

鷹揚な葉巻内幕覗かせぬ

地

外見へ苦勞少しも染まらない

天

ミサを出てドレスに替えるクリスマス

軸

平成十年度本社旬会の月間賞杯永久保持者

は富山ルイ子さん(寝屋川市)に決定した。

平成十年度本社旬会皆出席者(順不同)

橋高薫風 黒川紫香 西田柳宏子 阿萬萬的

高杉鬼遊 安藤寿美子 山本義子 吉川寿美

宮崎シマ子 福田満州 北山悟郎 前たもつ

嵯峨根保子 石原靖巳 鍛原千里 籠島恵子

神夏磯典子 坂上高栄 川端一步 吉村一風

森下愛論 岩佐ダン吉 川上富湖 金井文秋

堀端三男 福本英子 高須賀金太 海老池洋

門谷たず子 高杉千歩 稲葉冬葉 大内朝子

平松かすみ 楠昭子 榎山隆盛 西口いわゑ

八十田洞庵 芳地裡村 一本勇太 寺井東雲

藤井正雄 高田美代子 坊農柳弘 川原章久

奥田みつ子 (45名)

柳界展望

変更電話番号

平成11年1月1日から大阪(06)の電話が変わります。したがって川柳塔社事務所の番号は06・629・6914→06・6629・6914となります。市内局番が4桁となり、従来の3桁の頭に6がきます。

の本社関係の入選句は次の句は次のとおり。

★第38回和歌山城観月句会
入賞者の表彰式が11月25日
行われ、本社関係の受賞は
次のとおり。

〈読売新聞社賞〉

歳月が声まで丸くさせて
いる 森口 美羽

〈市議会議長賞〉

汗いっぱい吸った野良着
の笑い声 山根めぐみ

〈奨励賞〉

妥協して声に丸みを取り
戻す 澤田 和重

〈奨励賞〉

天動説信じて月の出を待
とつ 古久保和子

〈奨励賞〉

月降ってハート丸ごと盗
まれる 榎原 公子

★第40回和歌山文芸まつり

〈市長賞〉

忘れられぬように手拍子
打っておく 森口 美羽

〈産経新聞社賞〉

過労死が怖い緩めにネジ
を巻く 川上 大輪

〈読売新聞社賞〉

正直に生きるバトンを子
に渡す 吉村さち子

なお、文化協会賞を青枝
鉄治、山田高夫、谷口義男

木村親路、小川百合子、上
地登美代の各氏が受賞。

★第19回川柳塔鹿野みか月
川柳大会は11月29日、鹿野

町山紫苑に於て開かれ、投
句者を含む二百十四名の参

加があった。本社同人の秀
忘年句会は12月6日、米子

〈鹿野町議会議長賞〉

ひとときがひととせとな
り銀杏散る 新家 完司

〈鹿野町教育長賞〉

輝いているか傷だらけの
鱗 小島 蘭幸

〈新日本海新聞社賞〉

実行力あるハンカチだ
真っ白い 長浜 澄子

〈げげ起し奨励賞〉

みか月会員高得点者
土橋 螢

なお、第二部(事前投句
の部)出席者・欠席者の

三才を福本英子、石尾かつ
乃、倉益一瑤、奥谷彩子の

四氏が受賞。

★第34回川柳塔きやらばく
忘年句会は12月6日、米子

新同人紹介

徳山 みつこ

―敏・美代子推薦

楠 昭子

―天笑・月子・美代子推薦

鈴木 政子

―公一・典子推薦

大阪川柳の会

市観光センターにおいて開
かれ、本社同人の秀句は次
のとおり。

真っ先に起きる命の水を
呑む 木村富美子

テイータイムとても大切
な繋ぎ目 白根 ふみ

板塀にもたれぬ菊も山茶
花も 白根 ふみ

にんげんの声が嫌いな
った耳 新家 完司

とき2月2日(火)
17時開場 ところ3
ンケイヒル本館3階3
22号室 題と選者
首・和泉香△曲線・川
上富湖△盗む・田頭良
子△わくわく・磯野い
さむ 各題2句 席題
なし 会費800円
18時締切

★川柳あさか誌250号記
念誌上大会が次の要領で行
われる。題「美」▽選者
齋藤大雄・吉田州花・方
迷多・猿田寒坊・宮本めぐ
み・黒沢かかし・大野風柳
佐藤曙光・笠原高二・佐藤
良子・下重秀石・秋本トヨ

▽川柳塔碑合祀法要△

高野山大霊園内の川柳塔
碑への本年度物故者合祀法
要は、同碑の前で11月14日
午後一時半から行われた。
今回の新合祀者は、森川
抜智・芦田静江・中野樺子



計報 片岡つとむ氏(番傘川柳本社幹事長)は12
月14日、胃がんのため死去、76歳。葬儀・告別式は
16日、奈良市学園南2-4-6の自宅で行われた。

子▽投句料 一組1000円
▽締切 平成11年1月20日
便箋または2000字詰
原稿用紙に二句一組として
次の宛先まで。〒963-1
8852 福島県郡山市台新
2-7-5 秋本トヨ子
★すみさか百号記念誌上大
松下たつみ・笠原吸江・吉
本善風・児島与呂志・福岡
しげおの8氏で2遺族8名
が参列され、ほかに主幹以
下14名、計23名で心から冥
福を祈った。
標高八百米あり、平地よ
り季節がひと月早い高野山
も、当日は雲ひとつない快
晴で暑さを感じるほどであ
った。法要終了後、特急こ
うや号で午後四時半難波着
恙なく行事を終えた。

会が次の要領で行われる。
各題の兼題と選者「正」
藤本静港子・岩村秀月・遠
藤風来・大森風来子「自
由吟」齋藤大雄・ちば東北
子・野尻佳水・中澤恵生
投句料 一組1000円
締切 1月25日 便箋に各
題2句ずつ4句一組として
次の宛先まで。〒382-1
0087 須坂市東横町36
8すみさか川柳社

★第83回中部地区誌上川柳
大会が次の要領で行われる
「映画」 坪哲子・ト部晴
美 「思」 木野由起子
村井見也子 「町」 前田
芙巳代・山本ひさゑ 「ふ
たたび」 森中恵美子・加
藤田鶴子 参加料 1000
0円 締切 1月31日 必着
投句箋 各題別用紙一枚2
句連記、横4センチ・縦19
センチの白紙へ上部2セン
チ空けること。裏面に記名
投句先 〒460-0001

2名古屋市中区千代田3-
31-13 303 浜口剛
史方中日川柳会事務所
★うぶみ川柳会は第7回紙
上投句川柳大会を次の要領
で行う。兼題と選者(各題
未発表2句・詠み込み可)
「公」 小西雄々・山本礫
「興」 福本英子・山本玉恵
「好」 和井親洋・寺谷あづ
ま「自由吟」一句のみ 投
句料 1000円 締切 3
月31日 投句用紙 自由
余白または裏面に住所・氏
名・所属柳会名を記入 投
句先 〒680-0941
鳥取市湖山町北4-817
坪井正和方第7回紙上川柳
大会実行委員会宛

▽入事往来△
11月29日、第19回川柳塔
鹿野みか月川柳大会に薫風
主幹、楓楽副理事長は選者
他に紫香相談役はじめ同人
多数が参加した。
12月6日、第34回川柳塔
主幹、鬼遊相談役が出席。
▽出 版△
川柳句集「白い梅」を同
人の奥田みつ子さんが発刊
B6判上製本・224ペー
ジ・序文橋高薫風・黒川紫
香。頒価10000円
▼計 報▲

常任理事会各部長決まる
10月の総会で承認された役員人事に伴い、各部長
の一部変更があり、次のように決まった。
総務 宮西弥生・編集 奥田みつ子・同人 西出楓
楽・句会 西口いわる・渉外 吉岡美房・会計 岩
佐ダン吉・発送 高須賀金太・企画事業 前たもつ

柳楽鶴丸氏(元同人・松
江市)は11月12日、病気の
ため死去、72歳。

老地獄

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳塔おっぱこ吟社

木村あきら報

仕残しがまだある古稀の登り坂
 金婚へまだ余生ある夫婦独楽
 追うよりも追われる者の気の重さ
 大戦で生きてパブルに殺される
 転んでも素手では起きぬチャッカリや
 よく出来た妻で夫が光らない
 老母病んで吊るしたままの種袋
 転んでも慌てないほど子沢山
 泥水を吐かせて美味いドジョー汁
 運転を頼んで置いて吞ます人
 転んではならぬ絆の二人綱
 年金は転ばぬ先の杖となる
 人生は転んで起きるタルマさん
 煙草買う度禁煙は明日から
 お前とは老いて逝くまで二人連れ
 泣き笑いしつつ元気で共に老い
 デイサーピス心身共に若返る
 追い風をジツと待ってる竹トンプ
 ライバルの先手をとって賭けにでる

マツエ 文仙 放任 あきら 治延 いさむ ひかり 輝夫 かおり 捨楽 吟笑 節子 なみ子 坊太郎 ままさ よしみ チカエ はつ恵 くに子

大不況月賦は残り身は細る
 デュエットの調子外れて唄終る

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

温もりがほしい貴方と手をつなぐ
 税務署が貴重な壺といっている
 貴いと弱い命をつっかい棒
 村おこし出来そうもない貴賓席
 村芝居の座席はみんな貴賓席
 貴いものに故郷の母のくらしぶり
 貴さは彼岸の彼方燃ゆる虹
 清貧に米は眩しいほど光る

川柳岩出

小倉 アサ報

顔色で夫婦を守る車間距離
 ころころと転がる話題連れ散歩
 一つ泣き一つ笑って風車
 一つ泣き一つ笑って風車
 運命に勝ち抜く道は車椅子
 子の貨車を押してやりたい親として
 コミック誌疲れた脳を散歩さす
 車椅子でも頑張った運動会
 追い抜いた車待ってる赤信号
 台鎮のお客悪さをして帰る
 文鎮の重さが似合う筆づかい
 長寿国さんば散歩と打つカルテ
 時計見て今朝の散歩はBコース
 若人は車と共に生きて行く
 平等に鳴らしてくれた母の鈴
 父よりも器用な母が舵を取る

正雪 貞月 能子 喜美子 田実子 あずき 欣史子 シマ子 弘直 清芳 哲雄 悦男 保子 春子 昌子 良一 正義 正直 ふみえ 幸子 たねゑ 重徳 英子 智恵子 愛子

ダンベルの重さずつしり老いを知る
 花の種夢を抱かせてくれる秋
 身の程を知った車を持つ平和

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

自由化で稲刈りの手も不整脈
 刈り終えて仰ぐ夕陽の美しがる
 稲刈りにいつも減反陽にかかると
 鎌で刈る稲の重みの一掴み
 鼻歌も出そう稲刈り穂も重い
 稲刈りも鎌の手刈りがなつかしい
 機械化へ人影もなく稲刈られ
 有機米稲刈る鎌に元氣みる
 赤米の古代のロマン鎌光る
 稲刈りへ米の出来高机上論

城北川柳会

神夏磯典子報

野仏の鼻かけており秋深し
 エレベーター知らぬ男でちとこわい
 理想など諦めました余命表
 いきいきとラストにかける老いの道
 理想像描く大きな空がある
 仲直りしよう青空好きだから
 体調のいい時花も美しい
 旅の留守知らぬ女が来た句い
 電話かちやんと留守番したはるえ
 古い空しいまだ理想の絵が書けず
 ラストまで持ちつづけたいい好奇心
 待つ人のない身もいそぐ秋の暮れ

精子 和子 アサ 正光 豊枝 康女 智恵子 久子 鈴枝 静江 和代 公美子 雄々 春蘭 登美子 トヨ子 義江 高栄 賢子 典子 史風 睦子 白峰 寿美子 あい子

大臣がドミノ倒しに並べられ
母さんは心の窓を開けたまま
真つ二つハートを割った花の乱

嫁の留守のそいでみたいものばかり
ラストまで幸せだったと夫婦離

ある悔いを握りこぶしの中に溜め
我が家には居ついてくれぬ夏帽子
方円に従い自己を曲げぬ水

ラストチャンスロビーのソファーに浅くかけ
世話女房そんな理想もあつたけど
どんな顔しようか人生ラストの日

留守宅に咲く山茶花の物思い
ふたりからひとり芝居になるラスト
無位無冠肩を張らずに物が言え

呑み込んで良かった愚痴の後半分
両輪で生活支えてきた夫婦

高柳川柳サークル卵の花
川島諷云見報

法話聞きに乾いた心抱いて行く
水を下さい乾いた花になつてます
乾いた声になる少年の反抗

乾く者同士で拾う沙羅の花
母病んで漬物石が乾きだす
ちちははとはらからみんないる彼岸

爪あとを岸辺に残す砂袋
切岸の花が赤くてふみはずす
ひとり立ちする気で岸を発つ小舟

マンシヨンは袖ふれ合わず会釈だけ

求芽
千恵子
和歌子
久留美
とし子
純子
一枝
昭子
ただし
千歩
あやめ
倫子
達子
朝子
はじめ
順三
公一

ご近所のつき合いゴミを出す日だけ
離婚したらしいお向いの神田うの
車間距離とつて近所の輪になごむ
お隣のミサイル何処に落ちるのか
ラーメンで最後を締める梯子酒
ラーメンの好きなアベックよく喋る
ラーメンでも食べてと妻は長い旅
深刻な話はその味増ラーメン
金策がついてラーメン大盛りに
チャルメラにホームシックの夜が更ける
ささやけば猫が不審な顔で見る
ささやきの余韻へ恋をふくらます
ささやきがときめきになり恋となる
バーゲンで買った模様がすれちがう
刃こぼれのナイフで九十まで生きる
薬とも毒とも思ふ酒を飲む
井の中で自己満足の文を書く
最高に事が運んだ爪楊子
銀座裏美人でやり手で丙午
秋風を待ち秋風にせかされる

川柳東大阪

森下

愛論報

産声の時から背負う親の柳
美しいものに五百羅漢の顔
運不運いつも不運を背負つてる
う飲みした話で喉を詰めている
冷や奴ひたすら食べる父の夏
生きてる弾みへ夢を食べている
想い出の丘にあげれば夕茜

秀夫
磯
百合子
一笛
満寿蔵
白浜子
波留吉
活恵
スミ子
とし子
紫香
朝子
光穂
泰雄
晴美
靖巳
和子
しげお
茶の子
諷云児

恭昌
雅文
治也
文秋
朝子
弘直

灯を消して昔の人を思い出す
車椅子駅長が出て介護する
桜守りの介護でさくく蘇る
いちにちの長さに耐えている介護
介護疲れらしい受話器を慰める
車椅子の母にも紅をさす介護
男ひとり土に還つた夕茜
無人駅土の匂いもなつかしく
生きてる土だしっかり耕そう
土もたげ春の生まれる音がする
脱サラで土と取り組む耕運機

大原川柳社
矢内寿恵子報

折角の器量茶髪がふいにする
折角の頼みにのらぬ堅い靴

佳句地十選 (12月号から)

工夫して愛情皿に盛り分ける
嘘のない顔が最前列にいる
古里は星の数など数えない
まだ芯に匙の投げられぬ意地がある
持ち味を喪われたから出た調子
ふりあげた拳の行方愚痴になる
たやすくは心を見せぬ赤いバラ
飽食の舌が素朴な味を恋う
平仮名の増えた手紙に老いを知る
上品に喋ると舌がもつれ出す

岩切康子
よしみ
磯
周信
健一
芳江
宏
澄子
町子
美智子
奥みつ子

たもつ
東雲
シマ子
湖風
文子
信治
一志
萬的
柳宏子
賢子
愛論

玉恵

愛論

愛論

愛論

愛論

愛論

新世帯覗いてみたい親心

幸せへつなく世帯の蛇を取る

断つたまま縁談もこなくなり

貧乏で鍛えた見事なる世帯

折角の花だ見事に活けてやる

折角のカラオケ音痴歌いだす

寡婦独りお茶も沸かさぬ世帯ぶり

駆け落ちの世帯に余る物がない

母さんが首頭取つてる大世帯

折角のうまい話に水をさす

折角の好意お気持だけでもらう

折角の気持ちを反古にされた夜

グイエツト折角出来て皺が増え

折角のチャンスだ恋も命がけ

新世帯一人前の主婦の顔

差しのべた手を振り払う反抗期

折角のご馳走待たせ長談義

使いすて世帯馴染ぬ戦中派

ひと聞きり箸と茶碗の新世帯

二世帯がスーブの冷めぬ庭つづき

折角の出逢い程よい星あかり

うぶみ川柳会

上田

宣子報

よく走る健気な母の縄電車

赤ちゃんに健やか願う乳が出る

健やかな人ばかり出る敬老会

百歳を過ぎると老母のぐちが減る

水面下あばいた記事が本当かも

水面にチョンチョン蜻蛉お産する

あやこ さちこ 辰江 妻子 地佳平 悦子 貴美子 正己 巴子 こふゆ 敏子 朝代 みさえ 美佐子 たつ子 はるみ 昭子 絹子 和子 あすなろ 寿恵子

ユリ子

どんぐりを水面笑つて受け入れる

水面の下は修羅場で眠られぬ

うな井もわたしも並のまま老いる

並足でしつかり大地踏んでいる

平均寿命までは並大抵でない

電線に並ぶ燕が決意する

秋風を探してそぞろ歩きする

来る来ない待つて見よつか帰ろうか

草の根の思いを恋が吸い上げる

射程外の恋に落ち込みやせてゆく

本心をジョークに託すあなたの手

頼まれて恋人やつてあげている

恋は未完夢も抱きますまだ女

おふくろの一日健やかほつとする

水面に映し出される人のエゴ

掌にまだ有る恋の無重力

竹原川柳会

時広

一路報

秋風といっしよに旅へ出たくなる

エプロンをつけて料理をつくろうか

生涯現役母の笑顔は美しい

働いて働いた時が花だった

働いて働いて来た過疎の母

父の汗たっぶり吸った軍手干す

働いて来た手だごつい父の手だ

働いてはたらいでおお働いてる

花鉢持てば安らぐ音がある

ひ孫来るばつと明るく花咲かす

赤トンボ私も橋を待っている

赤トンボ私も橋を待っている

登美枝 鬼桜 忠良 葉士人 良雄 一枝 静生 あづま くにお 雄人 正和 きみ子 健一 黙光 宣子

笑子

台風一過洗濯物の山を干す

初対面いとさわやかなご挨拶

さわやかに生きたし余生西の空

さわやかな返事が二階からおりる

さわやかに散髪すまじあデート

さわやかな顔ですきつといい夫婦

お茶の間でいっよと肩たたく

秋風が旅はいよいよと肩たたく

終着駅旅の余韻を深くする

大正が歩かぬ旅を組立てる

ミサイルが旅人のようやつて来る

生活に句読点打つ旅に出る

祈るでも願うでもないひとり旅

ジープの旅は明るい風を連れ

三幸川柳教室

三宅

保州報

開店休業商店街は工事中

喧噪の街で公約聞き違え

遠い日の街を知ってる赤とんぼ

よそ行き顔が要らない街に住み

ビル街でもう弾まない紀州巻

商店街歩くと財布軽すぎる

軽い嘘許されそうなおネオン街

ツンとした街で屋台が見当たらぬ

ネオン街裏は情けに飢えている

自販機が無口な街をつくりだす

連鎖反応配るジュースも気を遣う

一病を抱いて気配りする余生

全快の証を配る内祝

全快の証を配る内祝

比呂子 房子 夏喜 栄恵 蝸牛 力 淑子 規代 一枝 節夫 喜美子 不朽 一路 美子 章子 健三郎 正一 千秀 みね 秀男 孝子 起世子 鉄治 三千子 登美代 美寿子

平凡のランクが違ふ息子らと住む
平凡な日々号令もかからない
ぼろぼろに破れた夢を貼り直す
肩書きを捨て平凡な道生きる

寛子
信子
單車
多哥由

サークル檸檬

小林 一夫報

ちぎれ雲たのしいひとに逢えました
暗雲へ策なきままに新世紀
寂しさがよぎる 海が青すぎる

いわゑ
あずき
喜美子

雲に乗るか かぼちゃの馬車が検討中
病む母のもう出られない青い空
雲百態どれにこころを預けよう

房子
雅子
楓楽

枯葉舞うイブモンタンはもつけない
階段のおんなにゆうぐれがきていた
雲走る昨日の嘘が立ち止まる

正坊
薫
智恵子

追うものがまだあり走る風の中
雷雲を呼ぶ情熱が欲しくなる

みつ子
希久子

じょうびんたきまた十月二十日記す
六根清浄山に祈しこ来光

實
久仁於

俺のものは案山子のように干されてる
週刊誌目次のほどはない中味
三石衛門壹に命をたたき込む

輝夫
晴翠

天つちにかえず命が汚れてる
奥様の気性が分かる借りトイレ
腰まげて歩く姿は親ゆずり

虹 弘
勝視
高明

日が昇るああ日が昇る鏡山

幸夫

本棚の真ん中亡父の辞書がある
年賀状やがて月から火星から
はたる川柳同好会 井上 直次報

四郎
正剣

夫婦茶碗先に割れるは僕の方
賢いのんばかり寄った仲間割れ
レタスはぐまた一枚の胸を割る

薫風
ただし

キーパーはゴール割られる夢ばかり
ギャルたちと割り勘で飲み旨かった
割り切ったような顔だが悔いている

博史
吉太郎

汚職には付きもの割りを食う輩
まんじゅうの割り方孫が目凝らす
居酒屋で注がれる方が口を割り

祥風
竹二

メロン四つ割り恐ろしいものなど何もない
青空を二つに割ってデイスカバリー
すつきりと割り切れてから夢が消え

見清
実

ひび割れた心で人を恋う聖夜
晴耕雨読世間にうとくうとく生き
お金にはうとい振りして家を建て

喜美子
敞子

うといから皆についで歩いて
かけひきうとく懐古趣味かかけ
分かれ道手の鳴る方の畏恐れ

久子
セツ子

大赤字も事務署は恐くない
恐れなし二十歳の恋の真っしぐら
検診のたびにびくびく不摂生

善守
直次

恐ろしい夢だったから話せない
今更は何を恐れている六十路

螢柳
昭子

衝動買い恐れバーゲン近付けず
川柳塔おとり 原 みさを報

雪子
ひかり

縁の下言いたいことはたんとある
酒と縁切るか私と縁さるか
いい縁の子感受話器をそっと置く

ゆきの
せつ子

傘借りただけの縁でも結ばれる
偶然の縁を楽しむ汽車の旅
ふと話しかけた縁から生きる欲

由多香
清子

いい所まで行くと縁がない
縁あって同じ世代に生きている
多産系同士の縁の葬の列

清子
伝住

粋な縁陶治の詩が見せつける
赤い灯も青い灯もあり縁遠く
天高く詩人になれと波の音

和子
敬之介

争いを眺める火傷せぬ位置で
遠くから眺めて火には近寄らず
自画像を眺め枯ススキを唄う

野草
敬之介

お隣のもめ事冷めた目で眺め
マンションへ眺望権が揺れている
宇宙から地球を眺め向井さん

野草
敬之介

反対をするエネルギーたんと要る
反対は頭なでられ止めました
反対に時が進んだ下着むすかゆい

野草
敬之介

反対に時が進んだ下着むすかゆい
表向きだけは反対しておこう
秘密主義こちら腹を割るもんか

野草
敬之介

反対をすればするほど燃える恋

野草
敬之介

反論の熱いシャワーを浴びている

みさを

川柳さきさま

酒井

靖子報

大の字に寝るにふさわし青童

純子

外孫といひあばいに宵寝出来

恵美

マジックの種も仕掛けも見てしま

美智子

大豆苗汗を肥やしにいま稔り

多美子

情けなや子に叱られる齡となり

末野

苦勞した人でなるほど丸くなり

かほる

切り捨てたはずの情けがからみつ

八重子

なるほどと種明かされてから気付き

素水

なるほどと振り向くボタンの掛けちがい

とみ子

丸木橋情け信じて渡つたが

つや子

友情に触れると綻ぶ父の苗

すず子

祥月になると綻ぶ父の苗

富美

徒生えに瑞穂の雨も陽もそそぐ

芳郎

言葉尻過ぎないうちに輪を抜ける

ヒサ子

なるほどと聞くことわざの生きる知恵

可住

友情に甘えて今日を油断する

靖子

尼崎尾浜川柳會

田辺

鹿太郎

鮎を焼き釣り名人の長話

富代

気が弱くすぐに誰かと群れたがる

まさ

名人の野心が燃える登り窯

すみ

ごめんねと病床の妻しおらしい

鹿太

美人画の前で夫の本音知る

亀与子

名人を肩にしよって糸を垂れ

イサミ

野仏に逢えて初秋の人となる

百合子

名人の指先で咲くガラス玉

幸子

ひっそりと咲いて観せませす月下美人

モトコ

名人の遺作昔が惚び寄る

いわお

面喰いが迷つた末の美人妻

六浦

群れの中目立たぬ僕の薄い影

勇次郎

名人が紫綬褒章を持て余す

弘治

全身を耳に説教聞いている

夢之助

美人湯と書いて秘境の湯が栄え

正治

名人の夢だけ見てた知恵袋

満寿藏

名人の作をわからぬままに褒め

昌子

群衆の中に紛れている安堵

澄子

名人と言われ国宝とも呼ばれ

石舟

名人がつくる人形生きている

紫香

定退のそれからの舵妻がとり

柳宏子

西宮北口川柳會

亀岡

哲子報

立冬に男いくさの顔になる

富喜子

顔を見せるだけでいいよと里の母

てる

顔に出る人の心の裏表

哲嗣

中傷はよそう醜い顔になる

諷云兒

顔色へ勝負どころの石を打つ

曙蝶

人情は顔をしかめて貸してくれ

晴美

わたくしの顔を見ながら書く巡查

紫香

五分五分の過ち先に詫びられる

能子

お詫びする気を変えさせた腹の虫

周信

こちらから詫びる印のビール注ぐ

日出男

松茸が宅急便で詫びに来る

透太

詫びる気になつたら朝めしがうまい

しげお

拳骨の届かぬ位置で詫びている

正とし

口惜しさが詫びたあとから込み上げる

柳宏子

隣から怖い話がもれてくる

いわゑ

カレンダール埋める豊かくなる

たす子

豊かさ慣れに貧しくなる言葉

はつ絵

百歳の豊かな笑顔には勝てぬ

房子

オール3ですが個性は豊かです

正坊

夢ぐらい豊かに見よう虹の橋

石舟

ワイン酌指の先から冬になり

文

下町の軒に小さな菊花展

鹿太

迷うだけ迷つた上の舌鼓

二南

鳩笛のリズムが秋を呼び寄せる

萬的

短日へ秋の行事が追いかける

求芽

秋日和花を野菜に植えかえて

松煙

それからの話は知らぬ紙コップ

涼子

来る来ないきつと来るはず彼の性

春蘭

郵便受雪の便りも舞つてます

義子

ありがとうだけで心が満たされる

澄子

川柳大阪

坊農

柳弘報

夏休み楽しいけれどすぐ終る

小和也

運動会組み立て体操あーいたい

小優紀

訓練のお茶席なぜか厚化粧

芳子

浴道の小旗うれし走り甲斐

末坊

ランナーのように無心で走りたい

須賀夫

注目を浴びてランナー盗塁死

照月

冷やかな事を言うなよ男だろ

信醉

五七五取まるように訓練中

多香

こけた子に声援が湧く運動会

河南子

長銀の処理冷やかな納税者

喜楽

ハイテクに縁遠くなった日本橋

川童

駅伝の走者の奥に母の顔

時雨るるや片手拝みに道祖神

世渡りの訓練足りぬ老いを悔い

この橋を渡れば逢える亡母の里

退屈で回り道する万歩計

橋山へ行き着くまでの身を清め

橋ゆらす川面の風がしやべり出す

ふるりの橋が迎えて笑うてる

冷ややかな表情先が案じられる

ひと口を確かめて飲む缶ジュース

頼るのは自分ランナーにある孤独

訓練の芸も烈しい津軽三味

ヨーイドンビデオが走る子はこける

冷ややかに耐えたB面陽の目みる

完走のよろこび一着もビリも

アンカーの自信バトンも風を切る

自惚れの恋に姿見冷た過ぎ

川柳塔なら

胎動に母よろこびの赤御飯

気まぐれな風にリズムを狂わされ

動かねば狙われもせぬ蜘蛛の糸

旅に來て旅の民話が荷にならぬ

建て替えて座敷童子も棲みつかず

つまりいた石からリズム狂い出す

的確にポイント掴む眼の動き

動かしてへそくりばらる大掃除

又三郎が降りて來そよな風の音

目覚めよいリズムに軽い今朝の靴

美花

青道

鉄心

かよこ

司

洛醉

柳昌

利武

雅果

本蔭樺

ダン吉

希久志

まつお

一步

金太

重人

柳弘

柳弘報

坊農

志華子

春蘭

とし子

あやめ

秋子

悟郎

桂子

寿美

千里

五体健康近頃脳が今少し

墨すつて今日のリズムを整える

順風満帆よく食べよく眠る

指人形みんなそれぞれ動くよさ

十秒で寝つくいびきをうらやまれ

太陽のリズムに合わせ生きている

村はずれの祠に残る悲話ひとつ

アンコールやまぬ民話の手話の会

冬木立さむぎむ民話語りつづ

機嫌良い母の包丁リズムミカル

悠久のリズムか山が赤くなる

菜園に朝の健康見てもらう

百歳の健康異性に憧れる

二人して一人前という達者

リズム体操ままに動かぬ五十肩

民話ふつつ自然と仲良しで

心音のリズムへどどと湧く母性

年金のリズム狂わす低金利

健康な内にドナーになつてこか

わかあゆ川柳会

盆が来て叱られた日を噂する

すれちがいあの時だったか結果論

秋更けてもるの思う日の多いこと

日和傘くるとり回してすれちがう

場所忘れた行ったり來たりすれちがい

盆踊り遠い昔が庭にある

盆踊り茶髪若者ゆかた着て

盆踊り茶髪若者ゆかた着て

眞生夫

和夫

重人

愛論

隆盛

東雲

弘直

絹子

秋雄

典子

シマ子

ダン吉

たもつ

弥生

常念

恭昌

比呂志

朝子

鬼遊

柳弘

柳弘報

松本はるみ報

ちよえ

はるみ

鈴江

かつ子

聖子

恵美子

好栄

揚花火百日紅のうえへ散る

不景気もつれて夜空に散る花火

すれちがった女の香りが放さない

縄とびの縄をあんてる案山子さん

縄とびで下駄の鼻緒を切つてくる

縄とびの遠いあの日は戻らない

逆光に縄とびの娘の髪ひかる

一筋の道理通した父の椅子

てきぱきと話す少年の歯が白い

お金のことだからてきぱきしておこ

てきぱきと言われ返事は口の中

手拍子が歌え唄えとせきたてる

突拍子もない額で公的資金消えてゆく

大鍋も子育て終り拍子抜け

手拍子の大きい方へついてゆく

さすが人脈とんとん拍子だな

突然の拍手拍子抜けしてしまふ

張りつめた気分クシヤミで拍子抜け

つまりいた拍子に自分見えてきた

筋道を立てて頼未聞いてやる

お互いの筋を通したら曲がり角

碁盤目の筋にくらしがある京都

筋道を通せば風が逆に吹き

おはなしの筋を読まれている添い寝

お通夜にてきはき動くのは他人

結論が出ぬまま雨がやんでくる

結論が出ぬまま雨がやんでくる

博利

清泉

白汀

杜的報

睦次

豊次

百合子

友照

吉之助

杜的

白浜子

ルイ子

芳子

求芽

宏子

葉子

紫香

柳宏子

楓楽

庸佑

ただし

飛鳥

英一

欣之

典子

水客

水客

品書は見たがやっばりにしん蕎麦
きっかけを外すと言葉が出て来ない
彼岸寺今日一日は善女です
まだ飛べる自信が今日を支えてる
坪庭だつて台風が来た跡始末

正坊 笑女 達子 武庫坊 年代 美穂

川柳会梨花 坂田和歌子報

一 プラス一を三だと言いだした
祖父の代からずつと貧しいままである
頂点の椅子にはずつと座れない
いい出合いずつとあなたを道連れに
お見舞い見れば骨皮筋右衛門

大漁 完司 輪かつみ 輪多朗 勝見 一夫 蟹郎 夏生 多哥由 節子 玲子 枝子

銀行の金銭感覚桁違い
骨拾う箸は静かにしゃべり出す
減点してもプラスの残る好い笑顔
あべお貞ずつと悩んだ末のこと
もう泣かぬプラス志向に切り替えた

未だまだ紙一枚に押せぬ印
金利なしそれでもプラス夢を積む
飾るのに耳プラス鼻あける穴
着い空すつと続けば飽きぐるる
生きてゆく臓器を神の手に貰う

例会で知識を一つプラスする
プラスマイナス零にして飯を盛る
苦の種を神からまたもプラスされ

美恵子 正和 忠良 東雲 行男 和歌子

もつずつと男子禁制しています
血を貰うてから生涯の友となり
秋まつり貴方も私もお別れね

川柳塔みちのく 小寺 花室報

秋深しミケランジェロの雲に逢う
根っからの善人と知る笑い皺
生きざまを魚眼レンズに曝される
雨も良し晴れの日も良し全て良し
人生の流れ味わう紅葉狩り

古里の風には仮面など要らぬ
間違えた振りして入る女風呂
さかずきの重さ軽さに見る素顔
情ほろろ 人形の瞳に風のあり
寝台車くにの太鼓が離れない

一人ずつ周囲が欠けてゆく長寿
逆らわず飾らず老いの分を知る

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

分校の机はグムの底にある
エリート机譲られ泣く留年
一本のばらが机を光らせる
花活けた机に遺影飾られる
勲章のそれから昔なの荷が重い

勲六のカイゼル祖父は額の中
勲七等村の駐在所で果てる
勲章をいっばいさげているピエロ
マ스ゲーム練習不足もろに出る
何してもばらばらになりまとまらず

幸子 典子 眞智子 慕情 一閃 ツネ 力誠 花匠 花峯 一花 銀波 黙人 蛙痴郎 北歩

三軒の医者がばらばらの診察
ばらばらの意見司会者困らせる
売り物に磨きはかけぬ骨董屋
うろたえて買うべき時に売った株
売り言葉買わずにお茶を飲んでる
ウインドに心弾ます服がある
善人が三面記事で泣いている
肩書の取れた名刺の大欠伸
空財布無重力には慣れている
木枯し一号言いたいことはそれだけ
ひとときを大切にして去る赤トンボ
炊いた御飯もコンビニで売っている
苦勞した話ほしな笑い皺

川柳クラブわたの花 吉村 一風報

干し終えて朧の月に手を合わす
飼い主も犬も太って秋の天
汚れ役見事こなしてスターの座
便利な陰で地球が汚れてる
手抜きさのママのエプロンきれいです
愛の鞭分かっていても涙出る
じつくりと見れば隅すみ綿ほこり
シャツの紅見つけて妻の手柄顔
煩惱を影の私が鞭をうつ
大根の汚れにはつと無農薬
目の前に金積まれたら汚職する
川岸で自然と遊ぶ万華鏡
日向ぼこ貴婦人の膝ベルシャ猫
汗流し手を汚しても悔いはない

和歌子 庸信 周佑 博史 寿美子 慶子 悟郎 明光 ただし げお 享子 杜的 重人

剛治 宏 明子 民子

信子 寿代 隆盛 幸枝 一風 春子 君江 道子 剛治 宏 明子 民子

父親の鞭が分かつた古稀の膳
 鞭あてた詫び言いながらまぐさやり
 思い出のいっばいつまりまるおもちゃ箱
 世渡りへすこし汚れている気楽
 木枯らしの唸りを鞭と聞く徹夜
 汚染した大気に仕方なく暮らし
 よく遊ぶ汚れた服に母笑
 耳の穴汚れて世事に疎くなる
 今頃に効いて来ました父の鞭
 落ち込んで今日のはよ寝よ明日がある
 貴婦人になつたつもりでおしぎする
 体重計おいしい秋に悩んでる
 神さまと会えばこころも浄められ

岬川柳会

八十田洞庵報

友甫 逸子 美智子 朝子 一 道 ますみ トシエ まさこ いつふみ 春江 知佐子 美代子 鬼遊 幸子 とみ 勇 倅子 みつ子 孝子 ユミ子 信博 狸村 鉄男 正美 悦子 里子 ミチエ

ウインドー覗きばかりの馴染み客
 へそくりも威張り顔出す十二月
 心のまど覗き見たがる他人様
 能舞台オペラで覗くあてやかさ
 ヒ素ヒ素ヒ素林逮捕でへり五台
 しゃべり過ぎうっかり本音覗かれる
 新聞をとなりの席で覗くくせ
 姿見にわたしの今日を覗かれる

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

押し寄せる波が謀反をおこす浜
 光り輝くところを舌とくめて
 道化師の描くそれなりの人生観
 式部草ふれば散ってピース玉
 天からの恵み棚田を守り継ぐ
 無冠の父昼ドラ時は昼寝する
 我がままを叱つてくれる日記帳
 日の丸の梅干しにある指定席
 秋風にチヨイと小粋な袖を振る
 見た目より強いやさしい茶髪の娘
 内緒ごと赤いポストは知っている
 磯でも返すかミサイルのお礼
 良い知恵を出し合いながら生きようよ
 金木犀わたしを戸外さそい出す
 谷底をたぐるとあけび人を恋う
 平成や女がぐっと強くなる
 坂越えてながめる夕陽美しい
 車待ちトランクに座り本を読む
 価値観の差を眠らせる蔵の棚

みやこ 庄六 令子 勝 ヤエ 年子 よし子 洞庵 日枝子 亜弥 春枝 寿々子 天雀 花子 富美子 すみえ てい子 保子 晶子 蕪 恵子 八重子 ふみ 玲子 千春 千代 脳天を西に染めた秋落暉
 川柳塔まつえ吟社 恒松 町紅報 荒介
 ネオン街木枯らし寒い門の塩
 早師走寒い懐容赦なく
 かけ違う釘に寒い風が吹く
 寒椿掃く手が鈍る竹箒
 今冬は寒いと噂先に来る
 懐が寒いと姿勢悪くなる
 紅葉の兆し絵ころ騒ぎだす
 結婚の兆しがなく策を練る
 相応の兆し見せたが駄馬だった
 更年期の兆しか派手な服を選ぶ
 モンタンの枯れ葉冬の兆しの中に舞い
 好調の兆しきれいな虹に会う
 なまじつか賞をもらつてから揺れる
 朝礼で賞をもらうと爪を切る
 お互いに賞罰なしの凡夫婦
 園遊会受賞輝く秋の天
 賞もらいもう一花を咲かす老い
 賞状は夫が一枚負けている
 茶の間では食事もするし客も来る
 茶の間から外れてしまふ反抗期
 曾孫来て茶の間の空気掻き回す
 お茶の間へ寄れば世間も見えて来る
 親しめぬ客は茶の間には入れず
 茶の間にはわが家の内緒置いてある
 いつからか亡父そっくりの話しぶり
 遺伝子の仕業か父の癖真似る
 与根一 多賀子 米子 雄々 ひふみ 太泡 芳枝 桂子 友子 静江 昌枝 房子 義良 和歌子 みえ 登美子 知恵子 登志子 茂美 きみ子 畔 登美子 一葉 早苗 満江 アキエ 忠憲 荒介

飼い主にだんだんと似る犬の顔
真似をしてみても鳥は騙されぬ
座ぶとんはさしこの柄を真似ている
すぐ真似るから子供らの目が恐い

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

亡き母のノートに残るカナの文字
らくがきの子供の頃のピカソの絵
おぼえ書きたノートが見つからぬ
間に合わぬ右脳にある古ノート
音楽ノート秋には秋の音がする
ノートひろげて図書館のあくび
真つすぐな視線を向けてくるノート
不都合なことは聞こえぬロバの耳
赤提灯耳をよぎった冬の風
母の愚痴受話器すらして遠く聞く
放浪の貧しき耳を持ち歩く
飢えた日はとうに忘れたパンの耳
低金利いつまで続く不況風
商いを叩き込まれた低い腰
雑草に埋めつくされた低い土地
低い方へ水も人も群れていく
水割りの氷に沈む銀行金利
老いてゆく身の丈低くなりました
曼珠沙華川より低い母の墓
コスモスあふれ 野仏の低い鼻
針の穴覗けば亡母が笑っている
秋蝶がまだ飛んでいる 政治不安
夕焼の白い半月浄土の彩か

すみこ 静恵 草丘 叮紅
千恵 ヒサコ キク子 昭三 和子 薰 芳子 伊三郎 一笛 比ろ志 栄一 富美子 節子 日出男 紫香 昌子 義芳 涉 光穂 一 夢之助 武庫坊 正子

ボスターの笑顔アンパンマンですか
ひとり生きる弟に柿送られる
とろりとろり夢 ビー玉の黄昏
被害者の心に入る弁護人
錆のつく右脳にきかずジャズピアノ
バラ園もそろそろ終り冬支度

南大阪川柳会 吉川 寿美報

やっとな似合いの夫婦になった五十年
五十年添うとくせまで似合ってる
縦縞も良く似合ってる月見草
核のない世界が似合う青い星
明日香路の畦に似合いの彼岸花
諦めが次第に憎さ消してゆく
憎しみの余り自分を見失う
母の愛憎まれ口も包みこみ
恋しさが憎さと変り般若の面
だし殻の煮干しにも似た齢となり
緑の下の力持ちという煮干し
煮干しにもなれる人間味
遠い日の亡父は煮干しでコップ酒
煮干しにもなれぬ目高の群れの中
煮干しのプライド銀色に輝いて
ハンバーガー煮干しの知らぬ子に育ち
浜風と語らいながら煮干しほす
だしの味母がこたわり持つ煮干し
枯れてても煮干しに負けぬ味は出す
忍耐で花を咲かせた子に拍手
車間距離守り続けている忍耐

ヤス子 年代 久子 静 愛 たもつ 東雲 慶一 ダン吉 勝美 章久 久峰 千梢 日出子 萬的 楓 志華子 寿美 直子 ひさ乃 咲 秋子 久子 正博 半蔵門

忍耐の極限にきて笑い出す
惚れ直しましたと憎い台詞言っ
むつかしい貴方に耐えた五十年
二の足を踏めば理性のゆれる音
二の足を踏まぬ男の心意気
二の足を遅れた穴が埋まらない
二の足を踏んで焼き芋買いな
二の足踏むな思い立ったが吉日だ
愛憎に狂うて袈裟を切り刻む

川柳塔打吹 米田 幸子報

爆発の火種飼ってる胸の襲
もろともに哀れよ案山子私も
大らかな世相案山子とともに消え
台風へ睨み利かせている案山子
定形を崩して渡り鳥になる
ユニークな案山子臍出しルックです
びくびくするな金のなる木をもっている
飯免で車びくびく走らせる
心の一本襲をつけて生き
山の襲命の水がポトリポトリ
心の襲命の水がポトリポトリ
太っちゃって腹にも襲がある
山襲に隠れるように襲がないぞ
名を聞いてびくびくしては勝てないぞ
びくびくと妻の布団に潜り込む
相好を崩し夫婦の茶番劇
切り株を崩すと父の音がする
胃の襲で酒と胃薬デートする
びくびくもするがときどきする逢瀬

三男 ハル子 千里 朝子 庸佑 文秋 柳伸 芳光 和歌子 博丈 信子 石花菜 玲子 かつみ 季芳 孝恵 勝見 逸子 松盛 一夫 雄々 睦子 陸子の 節子

遊び過ぎびくびく帰る妻を見る
手術室びくびくするな楽になる
足崩してゆつくりと飲み直す
胃カメラで贅がきれいに写ったよ
禁煙を三日で崩す虫族

襲の中眠る胎児よ何ゆめみる
一線を崩した先の乱気流
満月が崩れる人が死んだまゆく
浮世絵の崩した衿のなまめかし
代々の遺産も崩すどら息子

翠洋会

児玉

悔いひとつストンと落ちる秋の陽よ
落し物たんとしました古稀と喜寿
京おんな竹しなやかにしたたかに
手拍子に下戸も端から仲間入り
宝くじ仲間を買って当らない
また一つ泉がかれる過疎の村
長生きの果ての仲間は風ばかり
仲間だと本音喋って四面楚歌
四捨五入やと仲間端にいる
御堂筋さんなん落ちて冬のかお
秀才は仲間はずれのクラス会
落ち葉カラカラ孫とかけっこしています
一匹もかからぬ羊に陽が落ちる
紅一点が美し過ぎた仲間割れ
サヨナラサヨナラ映画の神が枯れて散る
仲間からはずれた鬼に角がない
下町に住んでみんなが仲間うち

順子 玲泉 善江 和枝 克枝 康子 七ツ子 幸子 蛙報 希久子 千梢 さと美 絹子 会美 千枝子 喜美子 叔子 蛙 蕉子 恭昌 みつ子 正雄 宣司 佳秋 志華子 真砂

ご招待仲間はずれに気がつかず
諺で社長訓辞をしめくくる
遅くても落伍はしないかたつむり
落日を嘆くな明日も陽は昇る
じゅんじゅんと論されおじやない
枯れ尾人生捨てたものじやない
今日も逢う名前も知らぬ飲み仲間
援け合う仲間時には議論する
失意の日多い仲間にも励まされ
来ぬ仲間まないたのにせ弾んでる
ことわざをひと言聞いて治まった
貧すれば何をやってもおもしろない
観覧車落ちるに丁度よい高さ

岩美川柳会

石谷美恵子報

千歩 正坊 靖巳 周信 久峰 澄子 綾子 照子 舞夢 伽羅 日の出 東雲 鬼遊 大漁 公乃 單車 節子 睦子 和歌子 芳江 螢 裕子 一夫 きみ子 蟹郎 はるお 忠良

柱にはなれぬが手足にはなれる
生真面目な取材駆け出し記者だろ
賛美歌のムードに油断してないか
何もかも許す裸で駆け来て
この家の柱ですもお父さん
正論を駆ける轆馬に乗っている
ときめきも嫉妬も薄れ羽畳む

倉吉川柳会

松本よしえ報

弱者ほど素直に解禁待っている
大物も雑魚も一つの網の中
おみやげに蟹を届けるいい客だ
解禁日兎も鳥も知っている
解禁の女人禁制山がゆれ
蟹解禁 懐痛い時期が来る
平家蟹食う気にならずナムアマミダ
網張って見たが大物ひからぬ
網の目を小さく細くして暮らす
天高し空の財布が気が暮らす
リサイクル蟹の甲羅は七変化
防衛庁法の網目を抜かれず
お前もか親蟹なげく横歩き
蟹禁に大風呂敷を投げてやる
越冬の鴨に受難の解禁日
蟹の泡南無阿弥陀仏命乞い
解禁の蟹を宝にする男
僕の網なぜか女がかからない
年金の財布もゆるむ蟹の味
甘え癖男の網にひっかかる

一京 孝男 一瑠 圭一郎 正和 宣子 美恵子 菊枝 ちよ子 智子 秋人 小生 天雀 菩句 かつみ 石花菜 季芳 義憲 御喜美子 よしえ 賀寿恵 ゆり子 和枝 康子 秋草 幸子 睦子

沢蟹よおまえも長く生きてるね
月の夜千鳥の餌になった蟹
不景気の蟹が真つすく歩きだす
寂しくていつもの店で網を張る
網の目が粗く汚職が防げない
安住の水族館で暮らす蟹

かわはら川柳会

上田

俊路報

学ぶ子に更に重石を乗せる親
いつまでも学ぶ姿勢が若さよぶ
学習と出掛ける妻をやぶにらみ
口うつして学んだつばめ空に舞う
仏の教え学んで少し丸くなり
もみじ燃ゆ芦津の里の水の音
留守居する夫へ土産の山の幸
目にしみて心にしみるみたき園
つたの葉が色づき過去の友想う
褪せる日を知らぬもみじの彩に酔う
芦津溪のもみじ一枚押し葉とす

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

窓際になって男の真価見せ
ただ酒の後で笑はと切り出され
道連れの男は顔で選べない
明日知れぬいけつる魚餌を食む
兄弟で奪いあつてる母の膝
一〇〇円の餌に群がる鯉の口
札束に釣られ奈落の底で這い
無印の男で友の輪が広い

芳江
見阜子
絹子
嘉信
笑留
句多留
広和
道子

いつまでも男は子供妻の膝
同年とおぼしき女に席立たれ
人前で威張る夫に見栄がある
男ならゴミの袋も出しましょう
男手が欲しくて夫婦仲直り
百歳の長寿の秘訣特になし
あれこれと男の料理器具を買
住所録アララまさかの隣組
縄のれんくぐつて男鎧脱ぐ
たやすくは見せぬ男の隠し味
人望は意外なところで保たれる
優しげな顔でずばりと本音言
平成の毒婦というにはいい笑顔
男の子産れるまでと子沢山
厨房へ男一品凝りに凝り
何かある男が肩を揉むという
肚のない男と見えてよく喋り
不況にもペットフードは増え続け
贅沢な餌が野性を失わせ
人間が来ると自然が奪われる

はびきの市民川柳会

安芸田泰子報

徳三
和可
かず子
数の子
鈴美
かず枝
雅子
良子
ふみ
サト子
土風
亜希子
あらた
純子
街湖
政勝
充子
早智
潮華
満秋

裏切らぬこだまに惚れた山男
窓際が日毎ネクタイ替えて来る
譲られた席もためらう肥満体
私かも知れぬボツンと雲ひとつ
招かれて人生変える席もある
がむしやらへ付けが来たのかレントゲン
病床の一週枕が合ってくる

ご破算にできぬ昨日が胃に重い
人間の証優しさなんだろう
やんわりと言われた皮肉気が付かず
靴 靴買った身に浮かぶ余命表
だんじりの茶髪が景気盛り上げる
うきうきと約束の刻紅ほのか
人生の午後もうきうきと畳まれる
おみくじの吉うきうきと畳まれる
うきうきと挙式待つ娘へ父無口
浮きうきを足の動きで見破られ
ルーキーに空の青さは無限大
せまき門通つてルーキー旅立ちす
競り合つてルーキー机ところ揺れ
新入社社長の訓示信じよう
ルーキーにペンとカメラが陣を張り
白髪一本一本に子は育つ
心配が増えた娘の免許証
富士山も私も白髪ふえて秋
愛してる口に出さずに五十年
目隠しの両手に愛がこぼれ落つ
不況風出口見えない日本国
リストラへ妻の笑顔で救われる
読めなくも読めた顔して書道展

美代子
ダン吉
志洋
吐来
専平
桂子
たけし
二南
泰子
かつみ
重人
昭平
忠宏
洞庵
美喜
聡
庸佑
みつこ
俊男
扶美代
昇
敦子
辰子

堺川柳会

河内

月子報

柳宏子
小雪
東雲
扶美代

屋台酒学歴なんか照れ臭い
 焼きなすび我慢の酒に手が伸びる
 屋根瓦一万円を寄贈する

鬼瓦バブルを笑いころげ落ち
 やんちゃくれ頑固親父と手を結ぶ
 いたわって暮すひとつの屋根の下

竹光をひそかに研いで待つチャンス
 野心家でがめついほどの鉄の意志
 やさしさと頑固な父を手なずける

やがて朝癌という字を手で潰す
 休まずに学校へ行く転校後
 やわ肌をがさがさにした手内職

やがて冬柄はトナカイ手編糸
 あの時がチャンスだったとのれん酒
 やり直すがッツが嬉し手を握る

母さんの避雷針ある父の屋根
 野心まだ頑固に溜める手のくぼみ
 やつとこさ合点がいった手を引こう

やさしさとガッツで愛をてんこ盛り
 約束へがっかりさせる手紙くる
 屋根のないホームで母は待つている

せつたかのチャンスを雑魚が邪魔をした
 夢抱いてラストチャンスに賭けている
 チャンス到来すかさずネジを巻いておく

ひまわりが西向く今がチャンスかも
 芋かぼちゃ青菜牛乳みなくすり

「ひとこと」募集 三百字以内でおねがいし
 ます。採否は編集部にお任せください。

楓 づつや 伽羅 日の出 舞・夢 ちゃや 勇太 健吾 紀美女 美代子 みつこ りつえ 泰子 哲平 五月代 千代 寿恵子 八千代 天笑 洞庵 アキ 冬虹 梓 春蘭 月文 子

句会名	日時と題	会場と投句先
高槻川柳 サークル 卯の花	21日(木) 正午から 幸運・スタート・手応え・これから・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
西宮北口 川柳会	11日(月)午後1時から 門・迎える・すっきり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
はびきの 市川柳 民会	24日(日)午後1時から 見る・資金・シングル・「官吏」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
東大阪 市川柳 同好会	23日(土)午後6時から 内緒・エリート・打つ・樹	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
富柳会	9日(土)午後1時から 朝・おしゃれ・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
ほたる 川柳会	12日(火)午後1時から 光・使う・テレビ	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池駅西へ150米 〒560-0033 豊中市蛭池中町3-10-28 井上直次
岬川柳会	17日(日)午後1時半から 祝う・霜・おしゃべり	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
南大阪 川柳会	27日(水)午後6時から 農園・濃厚・望む・覗く	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
もくせい 川柳会	18日(月)午後1時から 歴史・許す・清い・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
八尾市民 川柳会	10日(日)午後6時から 鍵・笑う・松・プレゼント	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

1 月 各 地 句 会 案 内

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	8日(金)午後1時から 坂・駅・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
尼崎 尾浜 川柳会	12日(火)午後1時から 祝う・優雅・自由吟	尼崎市尾浜公民館 阪急武庫之荘南口からバス尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
岸和田 川柳会	16日(土)午後1時半から 薄着・笑顔・面影・活路	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
京都 塔の会	28日(木)午後1時から 寝る・福・ようこそ	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
堺川柳会	14日(木)午後1時から てまり(折句)・出会い(共選)・捨てる	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
せつつ 川柳 万画会	23日(土)午後零時半から スタート・お年玉・福・呼ぶ	伊丹市立文化会館(いたみホール) 〒664-0858 伊丹市西台4-1-17-101 岡村方
川柳クラブ わたの花	22日(金)午前10時から 俎・怖い・梅	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
川柳塔 打吹	9日(土)午後1時から のこのこ・亀・跳ねる	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川柳塔 唐津支部	10日(日)午後1時半から 近い・それから・雑・雑詠	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13 仁部四郎
川柳塔 なら	14日(木)午後2時から 仰ぐ・美・はじめ	奈良市芝辻町1-21 船橋フロムワン 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
川柳塔 まつえ	9日(土)午後1時半から 福・祝う・占う	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川柳塔 みちのく	9日(土)午後4時から 目標・惑う・美しい	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8202 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川柳塔 梨花	16日(土)午後1時から 大・成・長	鳥取市勤労福祉センター 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3宮木方 坂田和歌子
川柳塔 わかやま	10日(日)午後1時から 亀・決断・高い・「初耳」	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川柳 ねやがわ	17日(日)午前11時から 家族・マナー・郵便	寝屋川市民会館 京阪寝屋川市駅からバス市民会館前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉

献 壽 平成11年

あけましておめでとうございます

川柳塔鹿野みか月

第19回記念大会のご支援ありがとうございました。お陰様で盛会になりました。会員一同こころより御礼を申し上げます。

本年は、成人となる第20回記念大会の開催年に当たります。皆様のお力添えを祈念して何卒よろしくお願い申し上げます。

山根 茂	監査役 土橋はるお	大角 正道	徳岡 本丸	事務局 中原みさ子	会 計	副会長 中原 諷 人	森 山 盛 桜	会 長	相談役 土 橋 螢	顧問 小 倉 利 男
中原 汲 香	土 橋 睦 子	津 村 八 重 子	田 村 き み 子	黒 田 く に 子	国 森 武 子	太 田 幸 枝	大 角 幸 代	岩 崎 み さ 江	乾 隆 風	石 尾 か つ 乃
	ほ か 会 員 一 同	森 明 美	中 澤 正 恵	谷 口 百 合 子	吉 田 弘 子	山 岡 久 枝	田 中 き み 彦	竹 森 富 久 江	加 藤 公 子	西 川 和 子

事務所 〒689-0405 鳥取県・鹿野町鹿野1279 中原 諷 人 方
電話 (0857) 84-2100

明けましておめでとうございます

川柳塔わかやま吟社

		同人		顧問		主幹							
桑原道夫	北山好笑	川上富湖	川上大輪	柿花紀美女	尾田綾子	小倉アサ	内芝登志代	岩倉天彦	野村太茂津	牛尾緑良			
中井栄美子	富上光代	天満三千代	寺田裕美	垂井千寿子	玉井豊太	谷口信子	田中輝子	杉山精子	塩谷佐代子	澤田和重	坂部紀久子	坂口公一	小山太一
ほか会員一同	横垣忠翁	森三枝子	宮園射月芳	宮口克子	松原寿子	堀端三男	細川稚代	福本英子	福田和子	中村君枝	中田誠子	中島正博	中後清史

例会 毎月第2日曜日 近鉄カルチャーセンター

事務局および投句先

〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良方

TEL 0734-46-2855

明けましておめでとうございます
ことしもよろしくお願い致します

米子 川柳塔きやらぼく

木	神	門	鹿	大	猪	石	石	池	足	青
村	崎	脇	島	塚	森	中	垣	尾	立	戸
富	あ	晶		恵	す	時	花	保	由	田
美	い	子	蘭	子	み	子	子	子	美	鶴
子	こ				ゑ				子	

中	田	鷺	菅	白	塩	澤	さ	雑	小	木
井	中	見	井	根	谷	田	え	賀	村	村
ゆ	中	正	知	ふ	八	千	き	美	て	春
き	弥	子	子	み	重	春	や	世	い	枝
					子		え		子	

矢	八	茂	三	光	政	吉	福	林	林	野	中
野	木	理	好	井	岡	岡	代			坂	野
満	千	高	寿	玲	日	文	天	瑞	荒	な	弘
子	代	代	々	子	枝	葉	雀	枝	介	み	子
					子						

あけましておめでとうございます

川 柳 堺

平成11年度

句会開催日

第2木曜日 午後1時

句会会場

堺総合福祉会館

	折り句	共選の句	兼題
1	てまり	出会い	捨てる
2	むすめ	騒ぐ	壺
3	みごと	欲	遅れる
4	からす	凄い	渡る
5	みどり	城	求める
6	きつい	怪しい	値段
7	すてき	気合い	主婦
8	8月1日(日)第17回夜市川柳大会		
9	まさか	探す	堂々
10	第26回堺まつり(別掲)		
11	つもる	半日	戻る
12	ゆとり	揃う	一流

河河梶柿太大榎榎一以荒
内内本花田橋本本本倉川
天月哲紀扶鐘舞日の勇菜磯
笑子平美女代造夢の出太々子

中中徳寺高高志小源楠神
川井山井田田田西田原
アみつ東美星千小八昭
楓キこ雲子子子代雪千代子文

藤藤藤福樋長西西中中中
田田井田口谷村田野澤崎
泰頂一二満冬春り柳健伽深
子留留二三州虹蘭え宏吾羅雪

和横山矢八十安矢楊宮見藤
田井本野十永倉倉井本本林
つ金半矢十田永倉井本本ち
づ三郎錢梓庵春月二南かりゃ
や郎錢梓庵春月二南かりゃ子よ

あけましておめでとうございます

竹原川柳会

〒725-0022 広島県竹原市本町1丁目14-3

小島蘭幸方

500号誌上川柳大会の御支援ありがとうございました。
うございました。

お蔭様で盛会になりました。会員一同
こころより御礼申し上げます。

会 監 会

計 査 長

山古古岩藤石岡森三岩時小
内田田本解原本井宅本広島
ほ房比太文静淑清菁不笑一蘭
か呂虚晴風子水居朽子路幸
同子子

謹賀新年

横浜あおば川柳会

菱田 満秋	川島 良子	長島亜希子
秋元 和可	菊地 政勝	播本 充子
芦田 鈴美	北沢 街湖	福島かづ子
荒井 広和	後藤 早智	福田由美子
生坂サト子	近藤 道子	布山 嘉信
和泉見早子	清水 潮華	三村八重子
伊藤 ふみ	鈴江 純子	保田 絹子
巖田かず枝	瀬川数の子	山下 省子
岡田 芳江	平 達也	山梨 雅子
小野句多留	平 のぶ子	山廣あらた
金森 徳三	田中 笑子	吉田 土風

あけましておめでとうございます

翠洋会

橘高 薫風	高杉 鬼遊	石原 靖巳	稲本 凡子	井上 照子	指宿 千枝子	上田 佳秋	梅田 宣司	榎本 日の出	榎本 舞夢	岡本 久峰	奥田 みつ子	北田 綾子	黒田 真砂	古今堂 蕉子	児玉 蕉子	小玉 周信	清水 絹子	柴田 英壬子	住谷 石舟
高杉 千歩	竹田 みずき	田中 正坊	谷口 義	津村 志華子	寺井 東雲	天正 千梢	中澤 伽羅	中村 叡子	長浜 澄子	西出 楓楽	藤井 正雄	古川 喜美子	堀江 光子	松永 会美	安永 春	山本 希久子	米田 恭昌	渡部 さと美	

あけましておめでとうございます 平成十一年 元旦

正 黒 西 阿 松 辻 小 川 藤 竹 松 奥 富
本 川 田 萬 川 島 村 内 川 山 山
水 紫 柳 萬 杜 白 諷 し 白 花 芳 美
客 香 宏 的 的 溪 云 げ 溪 代 子 智
子 子 子 的 子 児 お 女 子 子 子
ル イ 子

会 柳 川 阪 大 南

同 一 員 会

賀 春

岸和田川柳会

岩佐ダン吉 原 さよ子
島崎富志子 古野ひで
田中文時 寺田甚一
井伊東吉 村垣鹿太郎
井齋一齋 内田一弥
長谷川呂万 善野盛之
堂免路子 加藤 基
原 苑子 宮野美津江
古妻敏光 藪野ケイ子
柿花昭二 徳庄美智子
高須賀金太 芳地狸村

あけましておめでとうございます

高槻川柳サークル卯の花 一同

本年もよろしくご支援のほど願ひ上げます

川柳若葉の会

吉	山	宮	宮	宮	古	中	辻	椎	黒	橘
田	内	崎	崎	本	川	島	川	江	田	高
あ	香	シ	弘	欣	喜	田	慶	清	能	薫
ず	住	マ	直	史	美	実	子	芳	子	風
き		子		子	子	子				

新年おめでとうございます

あけましておめでとうございます

ほたる川柳同好会

前	松	藤	古	富	出	田	滝	田	嵯	栗	奥	岡	江	上	板	池	月	湯	井	橘
田	本	原	川	永	口	辺	北	中	峨	田	村	本	口	田	山	田	原	浅	上	高
ほ	た	た	喜	敵	セ	正	博	螢	根	久	し	吉	明	佳	ま	善	方	馬	直	薫
か	だ	桂	美	子	ツ	三	史	柳	保	子	ず	太	光	秋	み	守	郎	洗	次	風
会	昭	子	子	子	子	郎	郎	子	子	え	郎	郎	郎	子	子	子	子	子	子	子
員	子	し																		
一																				
同																				

定例会句会・毎月第2火曜日午後・豊中市螢池公民館

謹んで新春をお祝い申し上げます

川柳 さ さ や ま 社 一 同

代 表 遠 山 可 住

あけまして

おめでとうございます

京 都 塔 の 会

浅 柗 本 山 渡 高 山 山 松 都 松
野 本 莊 田 辺 沢 口 海 川 倉 川
幸 宏 福 葉 圭 美 友 芳 求 杜
子 子 子 子 坊 栄 穂 熙 子 芽 的

あけまして

おめでとう

ございます

熊 本 川 柳 会

岩 永 高 有
切 田 野 働
康 俊 宵 芳
子 子 草 仙

あけましておめでとうございます

三幸川柳教室一同

事務局 〒640-0112 和歌山市西ノ庄239-23

桜井千秀

あけましておめでとうございます

八尾市民川柳会

会員一同

謹賀新年

NHK川柳教室

橘高薫風
北畑金治
藤井正雄
黒田能子
伊藤武
指宿千枝子
井上直次
海老池洋
古川喜美子
三品征子
鴨谷瑠美子
前たもつ
田中節子
志田千代
福岡雅楓
小林周信
野下之男
井上松煙
緒方美津子
井上信子
近藤豊子
奥田泰治
北野哲男
唐住実
出井澄子
池田真昭
三木愛子
谷鈴子
竹谷弘子

謹賀新年

サークル 檸檬

あけましておめでとうございます

西宮ローズ川柳会

明けましておめでとうございます

平成11年 元旦

川柳塔おおとり会員一同

会長 小林由多香

〒680-0805 鳥取市相生町1-110

謹んで新年のご祝詞を申し上げます

うみなり川柳会

鳥取市相生町3丁目204
電話 (0857) 23-4672

賀 正

川柳塔まつえ吟社

同人一同

〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅方
電話 0852-24-5450

もくせい川柳会

満松榊星西辻玉玉田滝住小岸木北岡江安黒橘
仲本本野田川置置中北谷池田村山本口藤川高
きただ路登柳慶英重正博石し知香一悟吉明寿紫薫
くだし児代宏子子子人坊史舟お子笛郎郎光子香風

定例会句会 毎月第3月曜日 豊中市立中央公民館

あけましておめでとうございます

川 柳 大 阪

会 員 一 同

大阪市交通局互助組合文化部・川柳部

あけまして
おめでとうございます

はびきの市民川柳会

塩	清	酒	榎	吉	山	森	三	西	徳	立	川	内	芦	安
満	水	井	本	原	本	田	好	村	山	蔵	田	田	田	芸
	利	一	吐	辰	た	四	専	り	み	信		さ	絢	泰
					け	三	つ	つ	こ	子	晋	み	子	子
敏	武	壺	来	子	し	郎	平	え	こ	子	晋	み	子	子

あけましておめでとうございます

	太	高	福	武	楠	赤	高	川	福	中	高	吉
他	田	田	田	部		木	津	端	元	島	田	岡
	扶	治	悦	敦	昭	和	三	六	み	志	美	美
一	美	子	子	子	子	子	郎	点	の	洋	代	房
同	代								る		子	

川 柳 藤 井 寺

あけましておめでとうございます

いずも川柳会

会長 尼 れいじ

会 員 一 同

事務局 〒693-0052 出雲市松寄下町 2 8 4

吉 岡 きみえ方

TEL0853-22-1068

あけましておめでとうございます

平成11年 元旦

川 柳 塔 唐 津 支 部

久松浜相樋林井宗岩浜市山山山仁田
保本本葉口 上 崎本丸門門口部口
正 ちあ輝^公勝 久仁晴夕幸高四虹
剣圭よき夫朗視弘實於翠ミ夫明郎汀

謹賀新年 〈御支援をお願い致します〉

番傘みどり川柳会創立35周年

田中喜代志句集「年輪」発刊

田中蛸柳句集「道修町」発刊

記念川柳大会

日時 平成11年4月29日(みどりの日) 午前11時開場
(昼食は済ませてご出席下さい。会場にもレストランがあります)

ところ ホテル アイボリー (阪急宝塚線・豊中駅前)
豊中市本町3-1-16 TEL 06-6849-1111

挨拶	拶		竹森雀舎
祝辞	辞	番傘川柳本社主幹	磯野いさむ
〃	〃	(社)全日本川柳協会 理事・事務局長	山本翠公
句集鑑賞		『道修町』	片岡湖風
〃		『年輪』	中田たつお
事前投句		『二人』	岩井三窓 選
宿題		はがきで二句3月31日必着・欠席投句拜辞	
		『約束』	田中新一 選
		『時事雑詠』	柏原幻四郎 選
		『仲間』	住田英比古 選
		『拾う』	中尾飛鳥 選
		『呼ぶ』	戸井田慶太 選
		『輝く』	梶川雄次郎 選
		『兄』	森中恵美子 選

出句 各題2句連記※出句締切13時
会費 3,000円(句集2冊・記念品・発表誌呈)
懇親宴 6,000円同会場(申込制・3月31日迄)
事前投句・懇親宴の申込みは3月31日迄に下記へ
〒569-0814 高槻市富田町2-21-10 岩井三窓
Tel 0726-93-3865

主催 番傘みどり川柳会
後援 番傘川柳本社・(社)全日本川柳協会

編集後記

★あけましておめでとどうございませう。一九〇〇年代最後の年、どうぞ平穏で実り多い一年になりますよう、心から祈念いたします。併せて、三月二十日の創刊七十五周年記念川柳大会にはみなさんの御協力御支援をおねがい申し上げます。

★お正月といっても、この頃は風揚げ、羽根つき、独楽まわしなど、殆ど見られなくなつた。それを惜しむのは老人の証拠かも知れないが、のどかな新春の風景を懐かしんでいる。少人数の初春句会のおとなどに百人一首を楽しんでもよきさうなものだが：。
★楽しいこと、笑うことが多く病気の魔手からも逃れることが出来る。以前にもこの欄に書いたことがあ

るが、強いストレスを経験した人に癌の発生率が高いという統計もある。体の抵抗力、免疫力が低下するからで、それを防ぐには明るく前向きに気力を充実させると効果的とか。やっぱ

り「病は気から」は本当だと肝に銘じた。

★ペラングのプランターに朝顔のこぼれ種が芽を出した。記録的な気温の高い秋

だったから、どうなるかなと水をやつて見守っている。十一月の末に二センチほどの花が咲いた。何ともいじらしく、可愛い紫の花を二日間楽しんだ。

★52ページに掲載しように今年から二賞選考方法が変る。また、薫風主幹の「佳句感想」のページも出来、各地句会案内も大幅に増え

た。この一句、エッセー、ひとことなどにも御投稿をお待ちしています。(み)

ひとこと

川柳をはじめ

三年前、横浜におおは川柳会が誕生する際に入会致しました。動機は面白そうだからの単純思考で「川柳」とは季語が無い五七五の短詩というレベルの知識しかありませんでした。子供から国語辞典を譲り受け、毎回拡大鏡を使って文字用語を探す等とは思っても居りませんでした。川柳をはじめから、深くて遠い奥行きのある文

芸に、ほんの数歩足を出したと自

覚して居ります。最近ものの見方や考え方に一面的に見ないで、多面的に見るようになった為か、喜怒哀楽の振幅が敏感になったよう

菊地 政勝

〇さき頃、MSF(国境なき医師団)という差出人で一通の封書が届いた。

それは世界60カ国で活躍する民間のボランティア団体で、アフリカ中央部スーダンの窮状を訴えたものであった。

〇パンフレットによると、その国では内乱と干ばつによる飢餓のため、何も手を打たなければ、子供達はちろんのこと住民全てが

間もなく死に絶えてしまふであろうとのこと。

真や、新聞記事の紹介があり、前記の団体の活動に手を貸して欲しいとあった。

〇五千元、一万円、二万円各々の寄付額で援助のできる内容の説明があり、些かな金額の張るのが、ちょっと気に入らなかつた。

年生の孫に話すと、そんな国のあることにショックを受け、お小遣から五百円ずつ出してくれた。息子夫婦も千円寄付をしてくれたので、早速五千元にして振込んだ。

〇しかし、七、八年前に、盲導犬を普及すると称する団体に、まんまと騙された悔しい経験があるので、一抹の不安をぬぐい去ることができないでいる。(ふ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（3月号）」

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

川柳塔創刊75周年記念川柳大会

平成11年3月20日(土)

NO.		
電話番号	指名・雅号	住所
性別		
男・女		
どちらかに○印をつけて下さい		
同人・誌友・一般		
懇親宴 (8,000円)	参加 不参加	
宿泊 (8,000円)	要・不要	
翌日観光 (4,500円)	参加 不参加	

事前投句「高」橘高薫風(2月20日締切・出席者に限る)

NO.	

三才圖會卷之四

此圖係三才圖會卷之四之內容，包含多個小圖及說明文字。

此圖係三才圖會卷之四之內容，包含多個小圖及說明文字。

此圖係三才圖會卷之四之內容，包含多個小圖及說明文字。

此圖係三才圖會卷之四之內容，包含多個小圖及說明文字。



『時実新子一九五〇〜一九八全句集』

出版記念祝賀会

このほど時実新子さんの四十五年間にわたる句業が、大巧社から全一巻の句集として刊行されることとなりました。

ご存じのとおり新子さんは、自らの内奥のすべてを川柳に昇華させ、川柳を文芸として世に問い、文学界をはじめ各界から高い評価を受けております。また、その軽妙な筆致のエッセーも多くの人びとを魅了してまいりました。

今回の偉業ともいふべき大著の誕生を、私たちは心から祝ひ喜びを共にいたしたいと存じます。

記

日時 一九九九年一月二十四日(日)午後五時

会場 神戸ハーバーランドニューオータニ

五階宴会場「鳳凰の間」

会費 三万円

著者サイン入り『全句集』(定価・税共一五、七五〇円)に新子直筆落款入り色紙を添えて謹呈。

代表 田辺聖子(作家) 荒川克郎(神戸新聞社会長)

岡野久二(朝日放送番組審議会委員長) 橘高薫風(川柳家)

柴田俊治(朝日放送社長) 寺尾俊平(川柳家)

根岸 徹(大巧社社長) 道浦母都子(歌人)

森 浩一(同志社大学教授) 若一光司(作家)

『時実新子全句集』(著者サイン入り) 定価・税共一五、七五〇円(送料著者負担)

祝賀会出席、または著書購読ご希望の向きは左記へお申込み下さい。祝賀会は先着順にご案内を差し上げます。

〒550-0011 神戸市中央区下山手通ハリー一

ライオンズマンション元町Ⅲ五〇五号 川柳大学事務局
電話〇七八(三六)八二六九 FAX(三六)八二七九

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL・FAX (06)6372-1178